ISSN 2186-8794

明治学院歴史資料館資料集

第18集

山田幸三記「明治二十九年・同三十年日誌」

明治学院歴史資料館

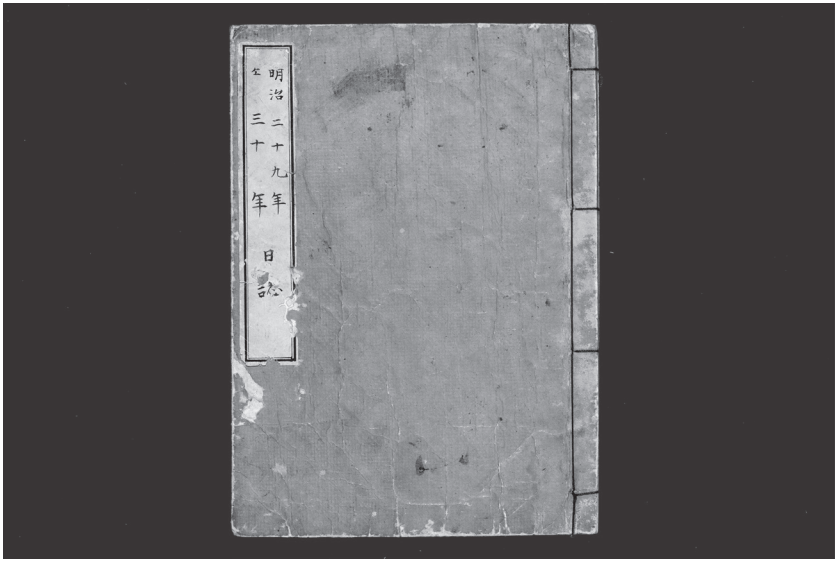


写真１－１　「明治二十九年・同三十年日誌」表紙
山武市歴史民俗資料館所蔵　東京都八王子市　山田家文書

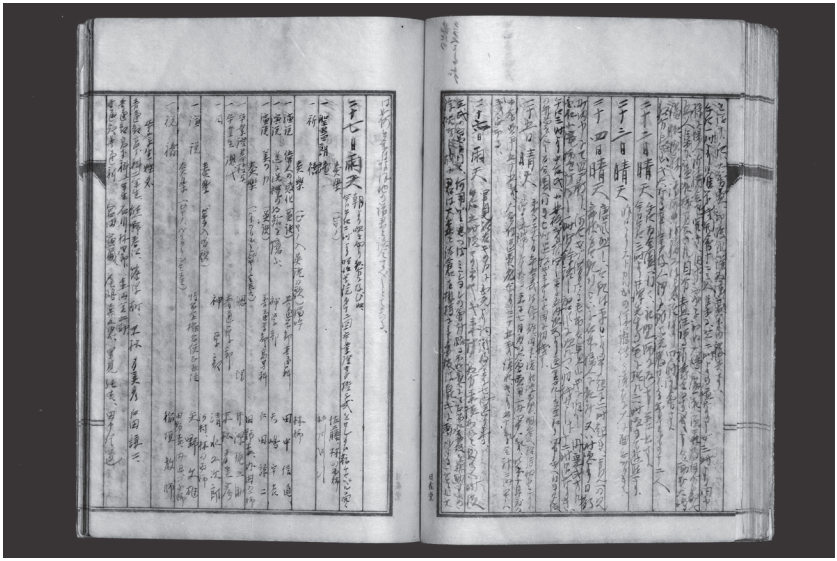


写真１－２　幸三の卒業式当日のことが記された1897（明治30）年３月27日部分

写真2　神学部教師・学生集合写真

1896（明治29）年3月18日　芝・写真士田中武撮影　当館所蔵

1896年3月28日の第十一回卒業式を前に行われた記念撮影の写真。日記3月18日条によると、当日、幸三は委員として奔走。植村正久が何らかの理由で出席を拒み、結局写真撮影に来なかったことが記されている（本資料集48頁）。最前列左からマコーレー、ミラー、マクネア、井深梶之助、柏井園、小倉鋭喜、最後列右から3人目が山田幸三。

写真3　級友との記念写真

1897（明治30）年1月20日　芝・写真士田中武撮影　山田幸吉氏寄贈　当館所蔵

日記明治30年1月20日条に「今朝九時過、矢島・長山の三人にて田中で写真を取（撮）る」（本資料集157頁）と記されている。左から矢島宇吉、山田幸三、長山万次。

写真4　幸三が卒業する直前の神学部教師・学生集合写真
1897（明治30）年3月12日　芝・写真士田中武撮影　当館所蔵

1897年3月27日の第十二回卒業式を前に行われた記念撮影の写真。日記3月12日条に撮影が行われたことが記されている（本資料集173頁）。最前列左3人目からマクネア、井深梶之助、小倉鋭喜、柏井園。2列目は、卒業を控えている山田幸三と同級生たち。右から4人目が幸三。

山田幸三氏逝く

明治三十年神學部卒業の山田幸三氏には去る三月廿日發病、腸チブスにて遂に四月七日横濱三島堂病院にて永眠せらる、享年六十八

氏は遠州掛川藩主太田家士族山田幸律氏の長男として千葉縣山武郡松尾町に生れ、同窓里見純吉氏の母君は同氏の叔母に當る。明治三十二年三井銀行社員となり在職三十年、昭和三年三井信託に移られ同十一年五月退職せられ悠々自適し讀書、書道、弓道、圍碁、小禽飼育或は花卉植木にと各方面に趣味を持たれ、寡言温容その聲咳に接することが出來ず洵に哀惜にたへぬ。長男嚴殿は目下大阪大丸次男は東京三省堂に勤めらる。

（遺族　横濱市神奈川區高島臺二十九未亡人山田しん殿）

（寫眞は故山田幸三氏）

写真5　山田幸三逝去の記事
『明治学院時報』第94号　1940（昭和15）年4月20日発行

明治学院歴史資料館資料集　第一八集

明治学院歴史資料館

はじめに

このたび『明治学院歴史資料館資料集』第一八集を刊行いたします。

本書では、第一六・第一七集に引き続き、明治学院の神学部生であった山田幸三（一八七三―一九四〇）が記した日記のうち、一八九六年一月から学院を卒業する一八九七年三月までの日記を翻刻し紹介いたします。

当時の明治学院における出来事をはじめ、教授陣や卒業を控えた神学部生たちの動向などが詳細に記されています。また、学院以外でも、幸三が長老をつとめていた赤坂教会の活動の様子や、勝海舟の三男である梶梅太郎とその妻クララ、のちに女子英学塾（現在の津田塾大学）を設立した津田梅子らとの交流など、貴重な内容が含まれています。

山田幸三が記した日記の翻刻は本書をもって完了いたしますが、今後、本資料をさまざまな分野の調査研究等にご活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたりましては、資料を所蔵される山武市歴史民俗資料館、また同館古文書調査員の加藤時男・川島秀臣の両氏、さらに資料を山武市歴史民俗資料館に寄贈されました山田幸信様に大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。

二〇二二年三月

明治学院歴史資料館　館長　長谷川　一

目次

凡例
解題　山田幸三記「明治二十九年・同三十年日誌」について　松本智子……1頁
一八九六（明治二九）年……23頁
一八九七（明治三〇）年……149頁
註……181頁
主要参考文献一覧……215頁
第一六集・第一七集　正誤表

凡例

一、本書は、千葉県山武市歴史民俗資料館が所蔵する「東京都八王子市　山田家文書」のうち、山田幸三が記した「明治二十九年・同三十年日誌」（目録番号C―2―6）を翻刻したものである。なお、明治三〇年分の記載については、幸三が明治学院を卒業する三月の末までを翻刻範囲とした。

一、翻刻は原則として原資料の通りに行ったが、次の事項は例外とした。

・漢字は常用漢字を使用し、俗字や略字等は改めた。

・並列する語句の区切りには「・」（中黒）を付した。また、読みやすさを考慮して適宜読点を補った。

一、外国人名・平仮名・カタカナ・濁点・傍線・傍点については、原文のままとした。

一、誤字・脱字・書き間違いと思われるものについては、右傍に〔　〕で案を示すか、〔ママ〕を付した。

一、判読困難な箇所は□とし、推定した場合は右傍に〔　〕で示した。

一、本文中の空白部分には、その字数分を空け〔　〕で示した。

一、原資料の欄外への書き込みについては、当該日の日付・天候を記す行の次行に〔欄外〕と記し、「　」で記載した。複数の記載については、「／」（スラッシュ）を付し続けて記載した。

一、註の記述において、人名の読みが不明の場合は、推定の読みを記し「＊」（アステリスク）を付した。

一、本文中には、現代社会では不適切と思われる差別的表現を含む記述があるが、当該期の社会状況を伝える歴史資料として、原則として原文のまま掲載した。

一、解題の執筆は、明治学院歴史資料館特任研究員の松本智子が行った。

一、翻刻も松本によるが、翻刻に当たっては、山武市歴史民俗資料館古文書調査員の加藤時男・川島秀臣の両氏が翻刻された筆耕資料を参考にさせていただいた。また翻刻本文の校正にあたっては鈴木美奈子氏にご協力いただいた。山武市歴史民俗資料館の山口直人氏、日本基督教団赤坂教会の姫井雅夫氏、金沢大学資料館の藤原真理氏、津田梅子資料室の中田友紀氏には資料の調査等で大変お世話になった。記して謝意を表します。

〈資料名の省略について〉

明治学院が編纂した左記の資料については、以下のように記す。なお当館所蔵資料ＩＤが付与された資料については、「ID:」以下にその番号を記す。

『明治学院歴史資料館資料集』→『資料集』

『明治学院神学部一覧　明治二十八年十月改正』（ID: 1201611400）→『神学部一覧　明治二十八年』

『明治学院神学部一覧　明治二十九年十一月改正』（ID: 1201611401）→『神学部一覧　明治二十九年』

『明治学院神学部一覧　明治三十年十二月改正』（ID: 1201611402）→『神学部一覧　明治三十年』

『明治学院普通学部一覧　明治二十七年六月改正』（ID:1201710994）→『普通学部一覧　明治二十七年』

『明治学院普通学部一覧　明治二十九年三月改正』（ID:1201611383）→『普通学部一覧　明治二十九年』

『明治学院普通学部一覧　明治三十年三月改正』（ID:1201611384）→『普通学部一覧　明治三十年』

『明治学院高等学部普通学部一覧　明治三十四年三月改正』（ID:1201611386）→『高等学部普通学部一覧　明治三十四年』

「[学籍簿　明治学院神学部]」（ID:1202000431）→「神学部学籍簿」

「明治二十九年　当用日記」（ID:1201610859）→「井深日記」（適宜、明治二九年と月日を付した）

「明治三十年　当用日記」（ID:1201610860）→「井深日記」（適宜、明治三〇年と月日を付した）

『明治学院同窓会会員名簿』（伊藤毅編、明治学院同窓会刊、一九三九年）→『同窓会名簿』

解題

山田幸三記「明治二十九年・同三十年日誌」について

松本智子

（一）「明治二十九年・同三十年日誌」の概要

今回翻刻を行うのは、山田幸三が記した日記のうち「明治二十九年・同三十年日誌」（山武市歴史民俗資料館所蔵、東京都八王子市山田家文書〈以下、山田家文書とする〉、目録番号C－2－6）である。なお、明治三〇年分の記載については、幸三が明治学院を卒業する三月の末までを翻刻範囲とした。また、解題や註における「明治二十九年・同三十年日誌」の呼称については「日記」とし、適宜年月日を付した。

一八九六（明治二九）年九月、幸三は明治学院神学部の最終学年となる。日記には日々の学生生活のほか、読書記録、長老を務める赤坂教会での活動やそれにともなう慈善活動等が記されるとともに、友人の恋愛話（明治二九年六月二〇日）や結婚（明治二九年四月九日）など二〇代の青年ならではの内容も散見されるようになる。

また、この頃になると、赤坂教会の活動を通じて幸三が交流する人の範囲にも広がりが見られる。後述するが、とりわけ婦人祈祷会の会場であった勝海舟の三男梶梅太郎[1]とその妻クララ[2]の自宅を幸三は足繁く訪れており、梅太郎が自らについて語った「日本に一人の不生産的の人間か殖へた」（明治三〇年二月一五日）など、他の資料では見出せない梅太郎の生の言葉が幸三の日記には残されてい

る。幸三は梅太郎とクララから紹介状をもらい、のちに女子英学塾（現在の津田塾大学）を設立することになる津田梅子を訪問する（明治二九年三月三一日）。残念ながら訪問の理由や会話の内容は日記に記されていないが、幸三は梅子の印象を「躯体矮にして容貌美ならずと雖も品高きものありき、居座挙動談話の体裁存外日本風なりき」と書き留めている。

同じ頃、キリスト教界では、前年四月の日清戦争終結をうけて台湾伝道がはじまり、それにともなう動きが幸三の周辺にも見られるようになる。日記には、台湾人周添祐の明治学院への入学（明治二九年一月三日）、赤坂教会で伝道師を務めていた河合亀輔の台湾への派遣（明治二九年六月三日）など、関連事項が見受けられる。

一方、日本全体に目を向けてみると、当時日本では天然痘（疱瘡）が流行していた。天然痘は、明治時代に入って四度の大流行が起きており、一八九六年から九七年にわたる三度目の大流行では約一万六〇〇〇人の死者が出たという。[3] 日記明治二九年三月一一日条には「ホーソウ」流行のため、明治学院においても医師の加治木を招いて予防接種が行われ、幸三も接種を受けたことが記されている。明治学院第二代総理井深梶之助の日記同年三月一〇日条には、「生徒中感冒患者多シ」とあり、[4] 既に生徒たちの間に天然痘が蔓延していたようである。翌日の一一日条にも「悪性ノ天然痘流行ニ付学院ノ生徒一同種痘ヲ為ス、余モ亦之ヲ行フ」と書かれており、幸三ら生徒たちと同様に井深も予防接種を受けたことが分かる。

加えて、一八九六年は地震や洪水など未曽有の天災に相次いで見舞われた年であった。幸三の日記からもその様相が見てとれる。

六月一五日に起きた東奥大海嘯は、午後七時三二分頃、三陸沖で発生したマグニチュード八・五の巨大地震（のちに明治三陸地震といわれる）に伴って起きた大規模な津波である。三陸沿岸を中心として死者約二万六〇〇〇人、流出・倒壊家屋一万戸以上[5]という甚大な被害が発生した。『福音新報』など各種新聞紙上でも被害の詳細を伝える記事や義捐金募集の広告が散見されるようになる。幸三が通う赤坂教会でも義捐金募集が行われており、幸三も「義捐の為十銭」を投じた（七月五日）。聖書学館の卒業式では「昨今は東奥海嘯沙汰にて人心焦愁する際故茶菓は一切見合せ」（六月二九日）となるなど、当時の状況へ配慮した自粛ムードもうかがえる。

続いて七月七日には幸三のもとに「富山市に洪水起れり」との通信が届いた。富山市では七月一日から八月二日の期間、大小九回の風水害が起きており、特に、七月六日から七日は低気圧が日本海南部を通過して大雨となった。七日に常願寺川、神通川が出水して、この周辺地区の家屋では床下浸水と床上浸水の被害が合計約一九〇戸にも及んだ[6]。たびかさなる災害に義捐金募集の声は高まっており、赤坂教会の罹災救助義捐金も七月一二日までに四円五十銭集まっていたという[7]。

更に、七月二一日に起きた長野県千曲川・犀川・聖川での大洪水をはじめ、各地で洪水の被害が発生した。日記七月二一日条に「各地方の洪水沙汰」として「岐阜・群馬・青森・富山・愛知・福井・長野・新潟諸県より洪水沙汰の飛電頻りなり、新聞紙に細なり」と幸三が記すように、洪水に関する電報が飛び交い、新聞紙上でも関連記事が連日掲載される。一八九六年は、全国各地で水害が多発した年で、『風俗画報』でも各地の被害状況を伝える「大洪水被害録」が臨時創刊された[8]。

八月三一日にはマグニチュード七・二の秋田大地震（のちに陸羽地震といわれる）が起き、死者約

幸三たちの卒業式が執り行われたサンダム館
1887-1888年頃撮影　当館所蔵

二〇〇人、全壊家屋約四二〇〇戸の被害が出た。[9] 幸三の日記では翌日に名古屋・岐阜の暴風とともに秋田大地震のことが記されている。

翌年三月二七日、幸三は卒業の日を迎える。幸三の日記には式次第とともに当日の様子が事細かに記されており〔口絵写真1－2〕、当時の明治学院の卒業式を知る上でも大変貴重な情報源となりうるであろう。「サンダム館チャペル」にて執り行われた「明治学院第十二回卒業証書授与式」は、雨天にもかかわらず二〇〇名程の来会者があり、式後には晩餐が饗され、木村屋の洋食が振る舞われたという。こうして、神学部予科と本科を合わせた四年にわたる幸三の明治学院生活は幕を閉じた。

（二）井深梶之助日記との併読のすすめ

今回、翻刻を行った明治二九年・同三〇年については、明治学院第二代総理であった井深梶

之助の日記[10]（以下、「井深日記」とする）が残っており、幸三の日記と併読することで、それぞれ一個人の視点ではあるが、教師と学生という二つの立場から当時の出来事を捉えることができる。また、情報という点からも相互に補うことができ、有益な資料の解読を促すことに繋がる。本資料集の註部分にも適宜「井深日記」を引用したが、今回、いくつかの出来事を例示し、両日記の該当箇所を見てみたい。なお、ここでは、山田幸三の日記については【山田日記】、井深梶之助の日記を【井深日記】とする。

○台湾人留学生周添祐の入学

【山田日記】　帰校着床せしは十二時過なりき、台湾人周添祐入学、山野と居る（明治二九年一月三日）

【井深日記】　学院ニ往キ細川氏ガ台湾ヨリ携来リタル支那人周添祐ヲ見ル、同人ハ台湾嘉義ノ牧師周某（霞歩？）ノ二男ナリ、年齢十七歳、漢文ヲ以テ筆談ヲ能ス、且羅馬字・日本ノ片仮名・平仮名ヲ解ス、未タ日本語ヲ解セズ、容貌温柔ニシテ卑シカラズ、一個ノ好青年ナリ（明治二九年一月四日）

【井深日記】　山野生来リ、周添祐ノ寒ヲ訴フ、不取敢持合セノ「下バキ」ヲ恵与ス（同一月七日）

※前日の日記には「此日寒入ル一段ノ寒気ヲ加フ」とある。

【井深日記】　午前九時学院ニ出テ教授会ヲ開ク、講師外山亀太郎氏ノ事ヲ報告シ優等生ヲ定メ周添祐扶助法ノ件等ヲ議ス（同一月八日）

【井深日記】 周添祐近衛師団軍旗祭ニ招カレ往ク、古帽トズボンヲ恵与ス（同一月二三日）

右の例では、幸三の日記には詳しく記されていない台湾人の周添祐なる人物について、【井深日記】から、その出自や年齢、日本語の能力、印象などを知ることができる。更に、【井深日記】を読み進めると、周が寒がっていることを学生の山野が井深に訴えに来ており、井深は周に下履きを与えている。【山田日記】に見える「山野」は、おそらく幸三の同級生の山野友一郎と思われるが、周の世話役であったのであろう。その後も、学院の教授会において「周添祐扶助法ノ件」が議論され、また近衛師団軍旗祭に招かれた周に対し古帽とズボンを井深が与えるなど、当時の留学生に対する学院内での対応の一端を【井深日記】から知ることができる。

○式典・会合における発言等の詳細や感想

（a）神学部開校式における植村正久の説教について（明治二九年一月一〇日）

【山田日記】 午后一時より開校式あり、植村先生の確なる信仰てふ説教あり

【井深日記】 神学部始業式ヲ挙行ス、植村正久氏演説ス、主意健全ノ人、一、精神上ノ平均ヲ失フベカラザルコト、即チ猥ニ奇ヲ好ムベカラザルコト、二、旧習ニ安スベカラザルコト、即チ日々ニ新鮮ナル経験アルベキコト、即チ新機軸ヲ出スベキコト、三、神ノコト、キリストノコト等ヲ思考スル時ニ単ニ書籍又ハ人ノ説ニ依頼スベカラズ、直接ニ其実物ニ接スルコトヲ勉ムベキコト等ニ就テ演説ス

（b）教授並に新入学生歓迎会（明治二九年一〇月二日）

【山田日記】 午后六時半より神学部新入教授ポピン・陶山両氏並神学生荒木・井上・高松の三人の為歓迎会の催あり、清水氏司会され早川氏神学部総代にて歓迎の辞を述べ、井深氏の神学校の性質に高等学理研究所と実地伝道者養成の二つあり、学院の方針は其の后者に属と話され、次て高松・陶山の両氏答辞あり、八時頃歓を尽して散会す、蓋し会費五銭なりしも寄附金等の為一人前十三銭程の馳走なりしも駄菓子には閉口したり、

【井深日記】 出院授業如例、午後六時神学部新任教授及新入学生ノ歓迎会アリ、余ハ明治学院神学部ト日本キリスト教会トノ関係ニ付一言ス、ポッピン・陶山二氏ノ答詞アリ、後茶菓ヲ出ス

（c）青山学院との同盟文学会（明治三〇年三月一二日）

【山田日記】 青山との同盟文学会あり

【井深日記】 午後七時明治学院青山学院同盟文学会ノ大会アリ、森田司会、我ガ学院ヨリハ里見純吉ノ邦語演説（但病気ニ付戸田代読ス）、田中信道英語演説、栗林大寿ノ邦文朗読ヲ出ス、田中ノ英語演説最モ上出来ナリキ、青山方ハ凡テ甚タ不出来ナリキ、余興アリタレトモ余ハ留ラザリキ

本や雑誌といった刊行物で発表される著作物と異なり、各種会合における説教・演説等の内容を確認することは難しい。ただし（a）（b）に見る通り、幸三・井深ともに、その内容の要点を書きとどめていることが多く、両者の日記を併読することで、口述内容や集会の臨場感などに触れることができる。さらに（c）については、【山田日記】では文学会の開催のみが記されるが、【井深日記】には「青山日誌」[11]でも確認できない詳細な情報や、井深自身の論評なども含まれており、興味深い。

○井深邸での神学部卒業生親睦会（明治三〇年三月二二日）

【山田日記】　今日午后三時より井深先生の宅に招れ六時頃まで遊興

【井深日記】　午後三時今回ノ神学部卒業生十二名ヲ宅ニ招キ茶菓及「スシ」ヲ饗シテ親睦ノ会ヲ開ク、河野生ヲ除クノ外皆来ル

ここでは、【井深日記】によって、幸三が井深の自宅に招かれた理由を知ることができる。幸三を含む神学部卒業生が井深邸に招かれ親睦会が開かれたのであった。翌日には普通学部の卒業生が招かれており、「井深日記」三月二三日条には「午後三時今回ノ普通学部卒業生及ビ熊野・水芦ノ二氏ヲ招キ茶菓並五目スシヲ饗ス、八時過一同歓ヲ尽シテ帰ル」と記されている。前年も「井深日記」三月二五日条に「神学部卒業生ヲ招キテ茶菓ヲ供ス」と見え[12]、明治三二年三月二五日条にも「午後三時ヨリ普通学部卒業生ヲ宅ニ招キ「スシ」ヲ饗ス」とあることから[13]、その頃、三月二七日あるいは二八日に行われる卒業式を前に、神学部と普通学部の卒業生たちが井深邸に招かれていたことが分かる。

（三）本日記の歴史資料としての意義―赤坂教会関連資料としての重要性など

前回の『資料集』第一七集においては、一八九五（明治二八）年九月に神学部本科二年に進級した幸三が一〇月二〇日に赤坂教会の長老に選ばれ活動に励む様子が見られたが、本日記においても赤坂教会での活動は続いて見受けられる。本日記は、当時の赤坂教会を知ることができる貴重な資料でも

ある。まずは、この赤坂教会について簡単に解説しておきたい。

幸三が長老を務めた赤坂教会は、設立が一八八五（明治一八）年一〇月一三日（設立当時の会員数は二二名）[14]、東京市赤坂区新町三丁目四番地（現在の赤坂三丁目付近）にあり[15]、日本基督一致東京第一中会に所属する教会であった。大石保[16]・石原保太郎[17]らが牧師を務めている[18]。また、幸三が長老になる以前には、羽原亨[19]・小倉脩吉[20]・長谷川峰吉[21]らが長老を務めており[22]、幸三と同時期には、河合亀輔・新島善直が長老として活動していた[23]。幸三をはじめ、大石・小倉・長谷川・河合など明治学院出身者がこの頃の赤坂教会の運営・活動に関係していたことや、日記明治二九年一〇月二五日条に見えるように、井深梶之助と陶山斌次郎など学院関係者が赤坂教会で説教を行っていた[24]ことは注意される。

一八九六年から九七年三月までの幸三の日記から確認できる赤坂教会の主な活動としては、金曜日の祈祷会、日曜学校、礼拝式および婦人祈祷会があり、土曜日に説教会が開かれることもあった[25]。金曜日の祈祷会の参加者は少なく、日記に「誰も来らず独り祷りて去る」（明治二九年一〇月二三日）、「誰も来らず独り唱歌」（同一〇月三〇日）などと記された日もあるが、日曜学校と礼拝式はともに平均二〇名ほどの参加者が日記から確認できる[26]。

婦人祈祷会においては、一八九六年中は「梶氏」宅での開催が通例であった[27]。この「梶氏」とは、勝海舟の三男梶梅太郎のことで、日記中「梶婦人」「梶姉」と記される人物は、その日記で知られるクララ・ホイットニーのことである[28]。幸三は、二月二日の婦人祈祷会で初めてクララと出会い、「姉も亦感すべき婦人なり」との感想を残している。クララは赤坂教会でオルガンを弾くこともあった

（明治二九年七月一一日）。

一八九七年一月二四日には「赤坂教会婦人会及評議会」において、従来、月一回の婦人会を月二回とするという取り決めがなされた。第一回は第一日曜日の午後二時より梶氏宅で開催し、聖書の講義を行うこと、第二回は第三日曜日の午後二時より会員諸姉の家にて順番に開催し、感話および祈祷会を専らとすることになった。更に、年に二回ほど婦人のために有益な演説講話の集りを計画・実行することが婦人会の事業のひとつとされた。

このほか、同日には「ホイトニー氏の計画に係る毎月二回木曜日の午后開会さるべき聖書研究会」への出席について評議されている。「ホイトニー氏」とは医師ウィリス・ノートン・ホイットニー（Whitney, Willis Norton）[29]のことである。彼は一八八六年、赤坂氷川町一七番地（現在の赤坂六－九－六）に赤坂病院[30]を開設し、施療とともに福音を伝えはじめた。その後一八八八年、伝道のために妻メリー（Mary）の弟ジョージ・ブレスウェイト（Braithwaite, George）夫妻を宣教師として呼び寄せ、本格的な伝道活動を開始。一九二一（大正一〇）年に赤坂福音会が組織され、一九四一（昭和一六）年には赤坂氷川町教会と改称、一九六六年に現在の赤坂教会となる。

先に示したように幸三の通っていた赤坂教会は赤坂区新町三丁目四番地（現在の赤坂三丁目付近）にあり、現在の赤坂教会の母体である赤坂病院は赤坂氷川町一七番地（現在の赤坂六丁目）とごく近くにあった。所在地の近さはもとより、幸三が赤坂教会で関わった梶梅太郎やクララ、医師ホイットニーらの存在は、二つの場の繋がりを感じさせるが、それについては今後検討したい[31]。

いずれにせよ、幸三をはじめ明治学院関係者が少なからず関わっている明治期の赤坂教会に関し

て、本日記には教会の活動記録や伝道局集金報告など詳細な記録が含まれており、貴重な資料であることは間違いないであろう。

（四）山田家の家族構成及び家業について

山田家に関しては『資料集』第一六集の解題にて述べているが、ここでは当該期の家族及び家業などについて補足しておきたい。

この日記が書かれた当時、山田家の家族構成は以下の通りである（年齢は一八九六年時）。父・幸律（四二）、母・りゑ（三九）、長男・幸三（二三）、次男・良一（二一）、三男・理吉（一八）、長女・福（一五）、次女・和嘉（一二）、四男・俊三（八）、五男・政吉（二）。なお一八九八年には六男・六郎が生まれている。[32]

父幸律は旧松尾藩士で、廃藩置県後は地主として松尾周辺に土地を所有し、養蚕、菓子製造販売業なども営んでいた（菓子製造販売業については後述）。母りゑは旧松尾藩士・若林種芳の長女で、一八七二年三月に幸律と結婚した。若林種芳の自宅では九十九里教会の仮会堂として礼拝や聖礼典が行われたほか、牧師宅としても使用されており、[33] 一族揃ってキリスト教に入信するほど熱心な信者であった。りゑの働きかけもあって、一八八六年七月二五日には幸律とりゑ、さらに幸三・良一の四人はともに九十九里教会仮会堂において和田秀豊牧師より受洗している。[34]

日記の中には、家族に関わる情報も多く含まれている。父との間では頻繁に手紙のやり取りを行い、自身の健康状態の報告や送金の依頼のほか、布教状況やキリスト教関係者の情報などを伝えてい

る。一八九六年四月二日から一一日まで帰省した際には、親子・親戚らと草取りや浜見物に出掛け、家族団らんの際には、父と家の財産状況や兄弟の進路や学業状況などについて言葉を交わしている（四月一〇日など）。また明治三〇年正月の帰省の際には、九十九里教会における日曜学校の詳細な記事が記されており、当時のこの地域の布教状況が分かる。七日の上京の日の日記には「和嘉・良一・福に負はれたる政も土屋の角まで見送らる、政も一同と共に左様ならと別語を投たる」とあり、幼い弟妹に向けた優しい兄の視線を感じることができる。このほか、弟理吉が奉公先で起こした問題を手際よく処理する頼もしい兄の姿も垣間見られる。

山田家は明治二〇年代後半から三〇年代頃は、菓子製造販売業を営んでいた。山田家文書の中に「〔菓子税領収証〕」なるものがある。[35] これは一八九六年八月二九日、武射郡松尾村収入役中山房利から幸三の父山田幸律宛に出された菓子税の領収証である。日本では、一八八五年七月一日に醤油税則とともに菓子税則という法律が施行され、菓子を課税対象とした菓子税が定められた。菓子税則によると、菓子業者は、それぞれの業態ごとに製造営業税、卸売営業税、小売営業税の三種類に区分されており、雇人（従業人）数に応じて税額が定められた。さらに、製造業者は、製造税として売上金額の五パーセントが課税された。[36] 先の「〔菓子税領収証〕」には製造税として三円九十五銭が領収されたことが記されており、幸律が菓子製造を生業にしていたことが分かる。

幸三の日記の中にも、自家の菓子類の記事が見える。例えば、一八九六年四月九日の「長谷川峰吉氏と原三都子との結婚式」の記録には、当日の様子とともに、そこで饗された菓子が山田家製造であったことが記されている。菓子の内容は「巻カステーラ三つにあんぱん三つに指押三つ」、これら

を「白袋に入れ上を巻紙にて巻」いたもので、幸三は「体裁よかりき」と記している。幸三の父幸律の日記[37]一八九六年四月八日条には、「自分ト良一ハ製造方仕事致し」とあり、菓子という記述はないものの、おそらく結婚式に配布する菓子の製造を行っていたと推測される。

更に、今回の資料集には含まれないが、一八九七年四月二九日、九十九里教会にて幸三の同級生である矢島宇吉と若林ふじの結婚式が行われた際にも、山田家が祝事用の菓子パンを製造している。幸律の日記[38]によると、製造されたのは「巻糟テラ上等二十切ニテ二ケ花押丸上等餡パン二ケジャム入小判形上桜付エラ引二ケ都合六ケ」で五八人分を拵えている。

菓子製造販売業はその後も好調だったようで、一九〇〇年六月には、家屋を新築し、製造場を改良拡張して「麺包製造所　山田商廛」として、パンの製造・販売を開始したことが、「パン製造売り出し広告[39]」から分かる。また一九〇三年一月三日に撮影された山田家の家族写真[40]（次頁写真上）の背景には、引戸に「おろし小売」「金米糖」「和洋御菓子」「かすていら」などの宣伝用と思われる文字が書かれているのが見える（次頁写真下）。

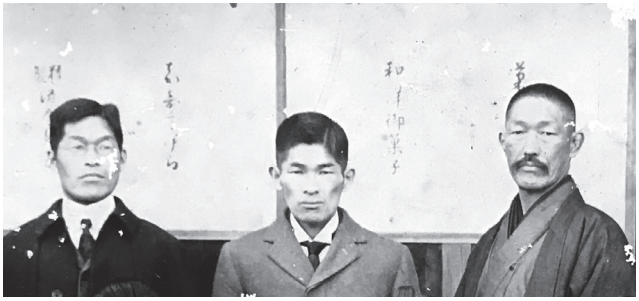
以上のように、本日記が記された一八九六年から九七年当時の山田家は菓子製造販売業を営み生計を立てていた。一方で、幸律・りゑ夫妻は四〇代を迎え、幸三・良一に加えて三男理吉も成人年齢に近づき、また長女・次女も尋常小学校を修了し、父幸律としては、家業と今後の家族の行く末を考える時期に差し掛かっていたようである（明治二九年四月一〇日）。幸律は、長男幸三の卒業後の進路を注視していた。

山田家家族写真

1903（明治36）年1月3日　山武・鈴木祐一郎撮影　山武市歴史民俗資料館所蔵

後列左から、幸三・理吉・幸律・良一・俊三、前列左から、和嘉・六郎・りゑ・福・政吉

（部分拡大）
背景の引戸には「おろし小売」「金平糖」「和洋御菓子」「かすていら」などの文字が書かれている。



（五）明治学院神学部卒業後の山田幸三について

今回収録しなかった一八九七（明治三〇）年四月以降の幸三の動向とその後につき簡単に触れておきたい。

幸三は一八九七年三月二七日に明治学院神学部を卒業した後、四月七日に伝道者試験を受けるが、残念ながら不合格となってしまう。そのため、マクネヤや秋葉省像などのもとを訪れ、今後の身の振り方につき種々相談する。また、父幸律にも今後の方針につき相談の通知を出している（四月一五日）。幸律は、「未ダ伝道地も未定」という通知の内容に「兎角面白カラズ」と不満を漏らし、「自ら一寸出京」することを決める。[41] 五月五日には国元から幸律が上京した。幸三自身としては、帰郷して当分の間は松尾で過ごし、適当な働き口が出来たら出て行く考えであったが、幸律からは在京して働き口を見付けることを勧められる（五月六日）。幸三の伝道地の候補として大森など数ヶ所が挙がるが、そのうち高田・名古屋・新橋の三ヶ所にしぼられる（五月一九日）。同時に、幸三は鉄道ミッションについても検討していたようで、ホイットニーのもとを訪れ、鉄道ミッションの話を聞いている（五月一五日）。

しかし、状況は進展しない。幸三は将来の方針につき相談するため六月一〇日に帰省する。父幸律の日記[42]によると、その相談は、任地がなかなか定まらないため、方針を転じて、波多野（承五郎）に頼んで三井銀行に入社したい、ついては一ヶ月ほど簿記等を学びたいという内容であった。

幸三は七月一日より簿記学校へ通い始め、一四日より見習いとして「三井銀行雇」となる。二八日には三井銀行の入社試験があり、合格。三一日には本店勤務が言い渡され、八月三日から幸三の社会

人としての生活が始まった。その後、三井銀行社員として約三〇年在職。その間、一九〇五年に多田しんと結婚し三男三女が生まれた。一九二八（昭和三）年三井銀行から三井信託株式会社に移り、一九三六年五月に退職した。一九四〇年四月七日永眠。四月二〇日発行の『明治学院時報』第九四号に幸三の訃報が掲載された（〔口絵写真5〕参照）。

（六）山田幸三の日記の書誌事項

最後に、『資料集』第一六・第一七集および本集で翻刻した山田幸三筆の日記四冊につき書誌を記す。

○「二榎日記」（明治二六年）（山田家文書、目録番号C－2－3）
袋綴　一冊
外題：ナシ　内題：「二榎日記」
料紙：楮紙　寸法：縦二二・八糎、横一五・六糎　丁数：六〇丁
備考：表紙表面は布張り。紺色罫線入り用箋使用。一丁表に「山田蔵書」朱陽印あり。金銭書付等の挟み込みあり。後表紙見返しに「山田幸三」と墨書。

○「今里日記」（明治二七年）（山田家文書、目録番号C－2－4）
袋綴　一冊
外題：ナシ　内題：「今里日記」

料紙：楮紙　寸法：縦二二・八糎、横一五・五糎　丁数：六三丁
備考：「松盛堂」用箋使用。後表紙見返しに「山田幸三」と墨書。一丁表に「山田蔵書」朱陽印あり。表紙の表裏とも全体に墨による複数の重ね書きあり。ほとんどは判読困難であるが、「基督降誕千八百九十四年　千葉県武射郡松尾　山田幸三」「白金村」「秋葉」「山本」「小林」などの文字が見える。

○「明治二十八年日誌」（山田家文書、目録番号C－2－5）
袋綴　一冊
外題：ナシ　内題：「明治二十八年」
料紙：楮紙　寸法：縦一八・二糎、横一三・〇糎　丁数：九六丁
備考：「日在堂」用箋使用。五八丁表（八月一四日条と一五日条の間）に絵二枚貼り込みあり（『資料集』第一七集、〔口絵写真4〕参照）。後表紙に筆記体で「K. Yamada」と記されている。

○「明治二十九年・同三十年日誌」（山田家文書、目録番号C－2－6）
袋綴　一冊
外題：題簽に「明治二十九年　同　三十年　日誌」と墨書。
内題：「明治二十九年」（四九丁表に「明治三十年」とあり）

料紙：楮紙　寸法：縦一八糎、横一三・〇糎　丁数：九六丁

備考：明治三〇年八月に部分的に朱書きあり。八〇丁表に「山田」朱陰印および朱陽印あり。「日在堂」用箋使用。後表紙に筆記体で「K.Yamada」と記されている。

註

（1）梶梅太郎（かじ　うめたろう　一八六四－一九二六）

勝海舟の三男。母は梶くま。長崎にいた母くまは梅太郎が三歳の時に病死したため、梅太郎は東京の勝家に引き取られた。中野刀水が著した「嗚呼梶梅太郎翁」（『日本及日本人』一九二六年四月一五日号所収）によると、梅太郎は、若くして神鞭知常（一八四八－一九〇五）の経営する織物会社の職工となり、神鞭が隠居するまで十数年間勤めたという。神鞭が経営する織物会社とは、小名木川綿布会社（のちの富士紡績会社）のことで、一八八七（明治二〇）年に設立。神鞭は三代目社長であった。絹川太一著『本邦綿糸紡績史』第五巻（日本綿業倶楽部、一九四一年、七九頁）によると、梅太郎は最初の技師長として入社している。紡績技術はなかったが、父海舟と関わりのあった富田鐵之助（一八三五－一九一六）の口利きによって入社したらしい。神鞭は一八九六年九月に第二次松方内閣の法制局長官となって、小名木川綿布会社社長を辞任しており（前掲『本邦綿糸紡績史』八六頁）、それにともない梅太郎も同会社を辞めたものと思われる。幸三の日記に梅太郎が登場するのはこうした時期と重なっている。先の刀水の記述によると、その後、川田龍吉の経営する船渠会社に入ったが、支配人と意見が合わず退職している。一方、クララ・ホイットニー（註（2）参照）の日記一八八三年五月三一日条には「梅太郎は横須賀か神奈川へ造船の勉強に送られるはずだったがあやうく逃れて、遂に牧師になる勉強をすることを許された。父上は梅太郎を上野の近くに住む木村（熊二、明治女学校の創設者）氏のもとへつかわされ、彼は大いに満足している」とあり（一又民子ほか訳『勝海舟の嫁クララの明治日記　下』中公文庫、一九九六年、四八三頁）、梅太郎が牧師を目指していた時期もあったようである。一八八六年にクララと結婚するが、一八九九年に海舟が死去すると翌年に離

婚、洗足池の畔に建てられていた海舟の別荘「洗足軒」に墓守を兼ねて一九二一（大正一〇）年まで住んだ。一九〇七年に刊行された巌本善治編『海舟日誌』の編纂にも携わる。一九一九年一一月二日の『東京朝日新聞』紙上では、「隠れたる労働問題の研究者」と称されている。

（2）クララ・ホイットニー・梶（Kaji Whitney, Clara 一八六〇－一九三六）米国ニュージャージー州生まれ。一八七五（明治八）年、父のホイットニー・W・C（Whitney, William Cogswell 一八二五－一八八二年）が商法講習所（現在の一橋大学）に招聘されたため、クララは父、母アンナ、兄ウィリス（註30－7）、妹アデレイド（註29－157）とともに一四歳で来日。一八八〇年、兄ウィリスの医学の勉学のため一家は帰国するが、二年後の一八八二年再び来日する。一八八六年、クララは梶梅太郎（註（1）参照）と結婚し、一男五女をもうける。義父勝海舟が他界した翌年の一九〇〇年五月梅太郎と離婚、六人の子どもたちを連れて帰国した。日本滞在中に書いた一七冊の日記が残る。

（3）「衛生統計からみた医制百年の歩み」『医制百年史』付録、厚生省医務局編、ぎょうせい、一九七六年、二九～三〇頁。

（4）当館所蔵、「明治二十九年　当用日記」（ID: 1201610859）。

（5）『日本災害史事典　一八六八－二〇〇九』日外アソシエーツ編刊、二〇一〇年、八頁。

（6）『富山市史』富山市役所編刊、一九〇九年、四三九頁。

（7）日記明治二九年七月一二日。

（8）『風俗画報』一二八号、一八九六年一一月。

（9）前掲『日本災害史事典　一八六八－二〇〇九』九頁。

（10）前掲註（4）および「明治三十年　当用日記」（ID: 1201610860）。

（11）『「青山日誌」明治二四年一二月～三一年三月』青山学院一五〇年史編纂報告三、青山学院資料センター一五〇年史編纂室編、青山学院一五〇年史編纂委員会、二〇一九年。

（12）前掲註（4）。

(13) 当館所蔵、「明治三十二年　当用日記」(ID: 1201610858)。
(14) 山本秀煌編『日本基督教会史』(日本基督教会事務所、一九二九年)および「明治十九年四月日本基督一致東京第一中会記録」の「一千八百八十六年　日本基督一致東京第一中会　明治十八年十月ヨリ同十九年三月ニ至ル　概略表」による。『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、一九八八年)「赤坂教会」の項には「大正末期に消滅」とある。
(15)『福音新報』第七三号(一八九六年一一月二〇日)の広告による。
(16) 大石保(おおいし　たもつ　一八六八－一九二四)
一八八七(明治二〇)年に明治学院神学部に入学。一八九〇年に同学部を卒業した後、『福音週報』の創刊に従事するとともに赤坂教会の伝道師を務めた。大石城築(註28－162)の弟。『大石保君伝及遺稿』(宮本栄作編刊、一九二五年)参照。
(17)『資料集』第一六集、註26－31参照。
(18) 前掲山本秀煌編『日本基督教会史』一〇六頁・五〇〇頁。
(19) 羽原亨(はばら　とおる＊　生没年未詳)
詳細は不明だが、赤坂教会の長老のほか、一八九〇(明治二三)年頃には足利教会牧師を務めていた(『基督教新聞』第三七六号、一八九〇年一〇月一〇日「上州館林」の項)。前掲『日本基督教会史』には、一八九一年八月三一日時点における第二東京中会部内の伝道者が掲げられており、その中に羽原の名が見える。また、一八九七年七月六日に行われた大会においては第一東京中会で選出された長老の中に羽原の名が見える(『日本基督教会第拾壹会大会記録』)。
(20)『資料集』第一六集、註26－53参照。
(21) 長谷川峰吉(はせがわ　みねきち＊　一八六九－没年未詳)
徳島県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九三(明治二六)年九月明治学院神学部に入学。保証人は小林格。「卒業後の居所」欄には「金沢市官吏」と記されているが、『福音新報』四〇号(一八九六年四月三日)では長谷川

の任地を「山口県岩国」とする。一八九六年四月九日に長谷川の結婚式が九十九里教会で執り行われた。幸三も出席しており、その時の様子が幸三の日記（本資料集56頁）に詳しく記されている。

(22)『明治二十年十月日本基督一致東京第一中会記録』・『明治二十八年四月日本基督教会第一東京中会記録』・『第一東京中会記録　自明治二十二年　至明治二十五年』参照。

(23) 日記明治二八年一〇月二〇日条、『資料集』第一七集、一七五頁参照。

(24) 井深梶之助の赤坂教会での説教については、当館所蔵「〔井深梶之助講述録集〕」（ID: 1201610196・1201610216）、「〔井深梶之助説教講話草稿集〕」（ID: 1201610247）などにその草稿が残る。

(25) 日記明治二八年一〇月二六日・一一月三〇日・明治二九年一〇月二四日など。

(26)『福音新報』第八六号（一八九七年二月一九日）には、当時の赤坂教会の会衆や求道者について次のように報告されている。「昨年伝道者河合氏を失ひて以来兎角捗々敷進歩もなく礼拝の会衆は平均二十九名、小児日曜学校は平均三十名、日曜日夜分の説教会には十人許なり。金曜の祈祷会は五名位の集にて猶ほ毎月一回の婦人祈祷会は概八人位なり。求道者は目今十人許は是あるべしと云ふ」。

(27) 日記明治二九年二月二日・同七日・三月一日・六月七日・七月五日・一一月八日・一二月六日など。

(28) 日記明治二九年三月三〇日条に「今日午后二時頃より梶氏を訪問し梅太郎氏及びクラ〻姉に面会」とある。当時梅太郎とクララは、海舟が赤坂氷川町内に建ててくれた家に住んでいた（一又民子ほか訳『勝海舟の嫁クララの明治日記　上』中央公論社、一九九六年、二二頁）。

(29)『資料集』第一六集、註26－26参照。

(30)『資料集』第一六集、註26－24参照。

(31) 日記明治三〇年五月二日条には、梶氏宅での婦人会（婦人祈祷会ヵ）に行ったところ、事前の案内を怠っていたため人が集まらず、幸三は一先ず帰宅するが、諸姉は赤坂病院の集りに行ったことが記されており、赤坂教会の教会員たちが赤坂病院の集りにも参加していた様子がうかがえる。また、同年五月一八日条では幸三も「ホイトニー氏の集り」に出向いた様子がうかがえる。現在の赤坂教会は一九四五年の空襲で会堂が全焼したため、歴史的

な資料は残っていないとのことである。『赤坂教会創立一三〇周年記念アルバム』（日本基督教団赤坂教会編刊、二〇一六年）参照。

(32) 山田家文書、目録番号F－23「〔山田幸三戸籍〕」。

(33) 『宣教百周年』（日本キリスト教団九十九里教会編刊、一九八一年）四一頁および五二頁。

(34) 前掲『宣教百周年』六八～七〇頁。

(35) 山田家文書、目録番号C－1－16。このほか、山田家の菓子製造に関する資料として、「〔和菓子製造法〕」（山田家文書、目録番号D－2－13）があり、仮綴じされた冊子の表紙には「麺包製造ニ関スル書類　明治二十二年十二月」と書かれている。また、幸律の日記「乙未明治二十八稔日誌」（山田家文書、目録番号E－12）一月一二日条には「菓子製造売高調等役場へ差出申候」と記されている。

(36) 『醤油菓子税則』（鯉淵忠補編刊、一八八五年）による。

(37) 山田家文書、目録番号E－13「丙申明治二十九稔日誌」。

(38) 山田家文書、目録番号E－14「丁酉明治三十年日誌」、四月二八日。

(39) 山武市歴史民俗資料館所蔵。

(40) 山田家文書、目録番号G－9「〔写真〕（山田家、里見純吉外）」のうち。

(41) 山田家文書、目録番号E－14「丁酉明治三十年日誌」、五月五日。

(42) 山田家文書、目録番号E－14「丁酉明治三十年日誌」、六月一〇日。

東雲生記

明治二十九年　　神武天皇紀元二千五百五十六年
　　耶蘇基督紀元一千八百九十六年

一月

一日　晴天　水曜日　四方拝

午前六時半起床、高田教会・九十九里教会・秋葉太平二[29—1]・同良平氏連名、伊志田平三郎[29—2]氏へ里見[29—3]と連名、小林格[29—4]・中村一良次・桜井亮海・早川重三・奥平敏子・小田新次郎・田中貞次・新島善直[29—5]の諸氏へ賀状差出す、尚森山夫婦・野口敏子へ書簡にて認む、午前近所廻りを年賀し、午后より森田・里見の両氏と築地ヤングマン[29—6]姉を年賀、八年ぶりにて会す、先方にては無論知らざりけり、されど里見の宅も余が家をも知り居りき、彼女はリウマチにて身体少々自由ならず、為に日本家に座すること叶わざれば従て訪問も出来ず云々と、茶菓の馳走になり去る、森田氏に別れ田中を年賀し渡辺氏に会す、福島を年賀し雑煮の馳走になり日暮て去り、小石川関谷へ七時頃到り、とその馳走と飯の馳走になる、帰路九時頃なりしが植村氏へ年賀し十一時半頃帰校せり、福島にて原田由利氏に会す、氏は老て益々壮なり、浜田佳澄・山内益太郎・渡辺六郎[29—7]・早川順、

二日　晴天

昨夜雨降る、今朝六時半起床、田村直臣[29—8]・峰尾次平・大森□[鐘カ]一・渡辺嘉夫、午前十一時頃より麻布へ年賀に参り、波多野にて午飯馳走になり年賀状を書て助く、四時半頃去り小倉氏へ寄りし

るこの馳走になり、尚、柏井・田中・小田・島田・大原・平井の諸氏相会し十二時頃までかるた・トランプを遊ぶ、

三日　晴天

午前六時半起床、大関和[29—9]・宮崎八太・安田退三[29—10]の諸氏に年賀状出す、清水源三・白石喜之助[29—11]・近藤虎馬[29—12]・大関和・峰尾次平・奥平敏子の諸氏より来状、昨日の残りを廻らん為先づ銀座の高田氏を年賀し、赤阪[赤坂]河井・田中・清水・牧の諸氏を年賀し六時帰校、一寸秋葉氏へ行き、帰路石原氏へより鵜野・宮川の両氏のあるに会し、其内に秋葉氏も来り十時過までかるた会ありき、帰校着床せしは十二時過なりき、台湾人周添祐[29—13]入学、山野と居る

四日　晴天

午前六時五十分起床、清水源蔵・白石喜之助・同小滝・近藤虎馬・山田幸律・同良・長谷川峰吉[29—14]君へ年賀差出す、山田良一・渡辺嘉夫の諸氏より年賀来る、午前入浴、午后三田へ散歩に行く

五日　晴天　安息日

午前七時起床、大急に出発、教会へいたる、百合園[29—15]生徒在らず、しかも十三四人の小供集り、余点灯の比喩を以て基督の教の無限なるを話す、礼拝式に会するもの十七人、河合氏[29—16]説教さる、「わか名によりて父の遣さんとする訓慰師すなはち聖霊は衆の理を爾曹に教へ、亦わが凡て爾曹に言ひしことを爾曹に憶起せしむべし」約翰十四の二十六、夜分も亦同氏の説教あり、「なんぢの信、なんぢを救へり」馬可十の五十二、会するもの七人

六日　曇天

〔欄外〕「初週祈祷会」

午前八時起床、昨夜帰路波多野へ寄り二三番かるたを遊び純吉氏と共に十一時過帰校、同氏宿る、森山信一[29-17]氏・田中貞次氏・山田幸律・矢島宇吉[29-18]氏より来状、月曜日、感謝及謙遜、詩百三の二・同百十六の十二・以弗所五の二十・歴代二十九の十二・黙二の四・三の十五・使后三の十八・詩二十五の七、七時半開会、河合氏司会、集るもの五人、九時半帰校、厳寒染む、

七日　晴天

〔欄外〕「東京市日本基督教会聯合大祈祷会」

昨日奥平姉へ手紙差出す、午前七時起床、昨夜はよもすがら足冷へ寝寒を感じたり、火曜日、公同教会、祈祷＝総ての基督教会のため、教会が一層基督の中に根底を固らせんこと、聖霊の感化により信仰及知識の一致実会に発達せんこと、又た「悪き者」に属する世界より分離せんこと、今や大に行はるゝ唯理説、迷信等の励服せられん為、教会が主の再臨を歓迎するの準備をなさんがため（以弗所三〇十四－十九・加拉太五の二十二）、午后二時より開会の新栄教会の聯合大祈祷会に出席す、主意は万国同盟祈祷の目録と同じ、石原氏[29-19]司会、重[主]に教会の一致を励む、次に貴山氏の感話、教会の一致及会員の親睦等に就て滔々と励めらる、次に今中氏の感話にキリストを基礎とせざるべからず、其次に藤田氏、教師等各教会に働くものは牧師の周施[周旋]を願わしと大に願求せらる、河合氏其他一人の祈あり、閉会時は四時少し過きなりき、メリケン[29-20]姉及従妹見ゆ、夜分また教会に至る、河合氏司会、四人の集りなりき、築地の集会七十人は少数なれど報告漏な

りといふ、若林芳郎[29—21]君昨日帰京せりと、里見叔母よりの手紙を持来る、

八日　晴天

午前六時半起床、荒木信実・野口敏より年賀状来る、国沢君へ某、年賀状出す、水曜日、国民及執政者、感謝＝過る五十年間各国に於て基督教会が享たる特別の恩寵に就き（詩九十五の一—七）、国の主権者及び法律を制定し且つ之を執行する者のため、祈祷（提前書二の一—四）、各国臣民の為の祈祷、主の日を守り神を尊敬せんが為、国民たるの義務を尽さんが為、飲酒の弊を驕[矯カ]め男女間の清潔を増進せしめんがため、特にキリストの為に遭難せる人々のため、万国に於て正義の重んぜられんため、斯くて全世界に平和の日来らんがため（提多三の一・ロマ十三の七・彼得后[後]一の五、六・ロマ十二の十—十五・イザヤ二の十四）、鈴木寿君と教会に到る、余司会、重[主]に初の主意に就て励む、会するもの十名、帰路波多野へ寄りかるたを取り十二時過まで遊ぶ、下女しげ誤て妻の手を啗む、一時過帰校す

九日　晴天

午前七時半起床、午前入浴す、長谷川君昨夜帰京、河合氏方へ泊りし由、今日来校せり、木曜日、外国伝道、讃美＝基督教会の諸宗派を通じては外国伝道の義務をます〳〵承認するに至りしこと、各個人に於ては聖霊の招きに服従する心の増加せしこと、或は死を以て忠節を全ふせし者ありしこと、神の恩寵の門戸開らけ其の徴多きこと（黙示七〇九至十七）、祈祷＝「教会の使者等」のため聖霊の現在と権能の著しく顕はれんため、宣教師を派遣するの責任を負へる凡ての人のため、内国教会に於て義捐の精神と同情の増さん為（約[ママ]三の六—八）、午后新島善直君来訪、

夕飯后秋葉なる長谷川君を誘ひ赤坂教会に祈会の為に行き、長谷川君司会、集るもの八人、帰路田中太郎氏の寓に依り、あへかはの馳走になり人名簿を借り来る、長谷川また学校に来り添寝す、矢島君小金井より帰校、小田厚太郎君の送別会あり、行かず、

十日　晴天

午前七時起床、昨夜は三回程地震振ふ、金曜日、内国伝道及猶太人、讃美＝内国伝道に対する熱心の増せしこと及該事業に伴ひし恩寵に対て（馬可十二の三十六・三十七）、祈祷＝凡ての基督教伝道者のため、市内宣教師の為、聖書販売者のため、軍人及海員間の伝道事業のため（馬太二十二の九・十）、神の撰民以色列のため特別祈祷、即ち異邦人の伝道完成を告ぐるに至り全イスラエル民族の救はれん日の来る以前に尚ほ其中に所謂「遺りの者」多く救はるゝことあらんため（羅馬十一の七－八・二十六－廿七）、河合氏司会、七人集る、午后一時より開校式あり、植村先生の確なる信仰てふ説教[29-22]ありき、石原氏に第二日曜日の晩餐式の司会を依頼す、

十一日　晴天

五時二十分品川発の汽車にて小田厚太郎君帰郷の途に就きぬ、余も五時少し過より送りに行く、但し六時出発のことならんと思ひ緩歩せし為后る、土曜日、家庭、及学校、讃美＝家庭の祝福に就き、主に心を捧げたる青年に付き、提後一〇一－五、二の一－二、祈祷＝基督信徒と称する家庭が皆恩恵・智慧及び謙遜を与へられ、且神を愛することを畏るゝこととを教養せられたる子女等に約束の祝福豊に加はらんがため（創十八の十九・提后三の十四－十七）、又た日曜学校・諸種の青年会・小学校及中学校・高等学校・大学校の為、午后長谷川氏と番町に至り、村上□次郎

氏を訪ふ、長谷川氏は女子学院に行きたり、午前長谷川氏と共にウエスト嬢(29—23)を訪ひ、婦人伝道者を頼む、則ち酒井姉を遣さる、長山万次君(29—24)水戸より帰校す、

十二日　晴天　安息日

長谷川君と九時出発、河合氏の説教あり、会するもの二十人、日曜日、説教、寧ろ我力によりて我とやはらぎを結べ、われと平和を求むべし（イザヤ二十七の五）、此うち尤も大なるものは愛なり（哥林前十三の十三）、中台勝二氏を見舞、不在なりき、夜分説教、河合氏話さる、聴衆七人、

十三日　晴天

野村直彦君(29—25)一番汽車にて伝道の為帰国の途に就かる、午前入浴す、今日より実際授業始まる、午后秋葉氏へかるた会に招かれ十時半開散(解散)す、

十四日　晴天

ミロル氏(29—26)欠席され午后休業、則ち一時過より三田松山病院に到り福島於菟吉氏の病を見舞ふ寺岡の老人かへり話す、病人追々快方にて三日従前より粥を一杯賞するよし、其故か三十一度の熱となりしと、是ころは三十七度二部位にてありし由、伊皿子阪(坂)上にて散髪、最端(短)髪となる、蓋し感寒には閉口なり、朝七時半よりマコーレーの会話の稽古あり、

十五日　曇天

十六日　晴天

〔欄外〕「クラスミーチング」

午后二時よりクラスミーチングを長山氏の室に開き、委員芝山[ママ]・村松の両氏、□走者のことゝて会費五銭にて歓を尽して散会せしは十時二十分前、今宵司会者は芝山[ママ]君にしてフレンドシップの話起る、終にはトランプ、花合、百人一首等の遊ありき、午后入浴す、奥平姉より来状、長老職の事に就き勧め来る、姉も亦益友なり、

十七日　晴天

〔欄外〕「晩餐会食／塚本道遠・石坂正信両教授送別会[29-27]」

午前七時起床、昨夜山野[29-28]氏麻布の知己より牡鶏を犬に頭を食われたりとて持来り、今晩之を同級生一同にて会食せんとの相談整ひ、委員を別つこと左の如し、明治廿九年一月十七日晩餐会食献立委員・毛むしり委員に郡山[29-29]・村松[29-30]、割肉委員長山、菜掛り兼鍋掛り委員に清水[29-31]・山田・千磐[29-32]・柴山[29-33]、飯并茶碗・茶湯＝賄交渉委員には和田[29-34]・小野・矢島、会計には河野君とせり、余は河野氏より会計を受取り石井八百屋に至り、千磐氏に醤油・磋塘[砂糖]を持せ、自は秋葉に到り鍋を借り序に芋とねぎを切り来る、斯て芝山[ママ]氏も鍋を持来り、二の鍋にて煮出す、五時半頃

奥平姉の寄贈に係る長老職に就ての注意、

……教会に於ては牧師と教会員の間に度々の不平をきゝ、ずいぶん一方の悪きことも御座候はんと存候へども、御互でありながら牧師に重々せきにんをのみおわせて、不平のみなき教会も御座候やうなることもあるやに承り居りし事も御座候、付ては牧師は直接に曰ひにくきこともあり、又会員にも同じく直接にうちあかさずして、かげにて不平を申居る事も御座候とか申事も承り居候事に御座候、付ては其の中間にありて互の中[仲]を和げ、相方[双方]宜しき

明治二九年一月

やうとりなし、教会を盛に為し、真に一家族の如き楽しき幸なる教会を作り出すは、ずいぶん長老の御職中にこもり居るやの様にも考へ候（加拉太六章一－二）

に及で全く整ふ、則ち清水氏の祷りを以て箸を取り初む、蓋し同級生十一人に加ふるに台湾人周添祐もあり、都合十二人にて十二分に喫したり、賄よりもけんちん様の采を持来りき、六時頃散会す、会費金一銭、今宵は赤坂教会の祈会に出席せんとせしも、空模様悪しく且つ六時よりサンダム館にて塚本・石坂両教授の送別会あり、殊に石坂氏は直接に余等を訓董（薫陶カ）せられし関係あれば、交誼上は会へ出席すべきは当然なりと思ひ、急に赤坂行を見合せ、委員の許を受け右送別会に出席す、六時会開（ママ）と聞きしに未だ塚本・石坂の両氏とも見ず、聞ば石坂氏は所用あり不参の筈、塚本氏は来会の返書来りたれば程なく来るべしと語り合ふ間に七時頃愈々待厭（飽）きたる頃漸く来館さる、篠原耐（29－35）君司会、讃美、井深氏の祈、篠原君の開会の辞、三年級総代の送辞若林君、四年級総代の送辞里見君、五年級総代の送辞文章戸田君、高等科の総代送辞森田君等にて、最后に塚本氏の答辞に更ゆるてふ前提にて、来校と退校の以所（ママ）を話されぬ、贈物として箱を遣す、后茶菓出で八時半閉会す、会費金七銭なりき、因に記す、塚本氏は同志社へ招れしなり、

十八日　晴天

午前六時起床、八時半頃より先づ日影町田中へ行き採影、それより警醒社にて長山の本を求ぬ、三十間堀の山内氏を尋ね不在、丸善にて社会学の着荷を問ふに未着の由、則ち小川町を経小石川関谷に到り午飯を喫し、赤坂河合氏を訪ふに誰も出ず、去りて清水・村井・梶氏を尋ね、明日晩餐式執行の報知を為し、一寸里見へ依（寄）り帰校す、聖阪（坂）にて足袋を求む、

十九日　曇天　安息日

午前六時帰床〔起床〕、長谷川君寝過ぎ為に一歩先発、九時少し過教会に着、則ち日曜学校已に始まれり、今日より来初めし酒井くまよ姉も已にあり甲斐〳〵しく教へ居りき、当日は晩餐式の備あり、石原牧師来り司式さる、説教には創世記二十五章のアブラハム其子イサクを犠牲としてはふらんとする処を説明せられしにありき、蓋し聴衆何れも感涙にむせびしもの〻如し、集るもの三十五人、近頃にまれなる盛会なりし、

二十日　晴天

今朝サッポートを取らんとして、昨暮の試験不合格の趣にてミシヨン会議を経ざれば重円〔拾円カ〕に附難成由、閉口〳〵

二十一日　晴天

二十二日　晴天

二十三日　晴天

〔欄外〕「河合義信氏逝く」

河合氏より男児義信氏事、去る十九日頃より病に罹り義生〔養生カ〕不叶、昨日午后四時永眠せりと報じ来る、驚愕三番！則ち長谷川君と共に不取敢河合家に到り見舞ふ、妻君は勿論亀輔氏の愁傷一方ならざりき、祈祷会を開き嬰児の既に棺に始〔ママ〕めたるを拝見す、色こそ変りたれ顔容生前と更に異ならず、十一時過帰校す、是より前去る十九日生〔小生カ〕の見舞し時、同児不例なりしが、其后の経過を承るに当夜は熱度三十八度程にて婦人医大村姉も大に安からぬ診断にて、何れ明日更に診察すべし

と風薬を呉れしと、其翌廿日には病勢益々加はり、石川博士の診断を煩さんと頼みしも故ありて間に合ず、遂に他の医に見せしが、誰も心付かざることには同児の病因は実に丹毒[29—36]といふべきにて、廿一日の朝始て首に赤き星を見付け、如何にも不思議なりしも夜服にて磨擦[摩擦]せしなりなぞ語ろう間に益々苦痛を感ずるもゝ如き有様となり、さる程に右赤星は二十四時間にして背部及胸部に蔓慢[ママ]し遂に二十二日の午后四時を以て眠たりといふ、承五郎[29—37]氏三井銀行本店支配人となる、

二十四日　晴天

午后ワイコフ氏を訪ひ昨暮の試験の成績を見るに、則ち歴史（教会）九十点、哥林書[哥林多書]註八十一点、神学八十五点、創世記註三十六、約新[新約]緒論五十三、説教学六十六点、平均六十八点強、但し最后の三科はミロル氏の受持なり、蓋し不合格者は二年三年に過半を占む、特にミロル氏の科に不合格点多し、教て厳ならざるは師の怠と謂ふ乎如何、午后祈祷会へ行んと中村兄と三田まで同行、氏も亦組しなき男なり、氏曰く昨夏計画したる氏の妹夫婦を其儘中村家へ呼入るゝ策は母君の破壊するところとなりしとぞ、されば氏は来る夏より一端[一旦]は帰国し、専ら家族伝道を心掛け、行〳〵は母君及妹君を携て出京にて大に為すあらん積なりと、氏は神の御摂理を好く服膺する人なり、祈祷会には長谷川・新島と三人なりき、祈会后和田氏に到り、長谷川君明日葬式の説教を依頼す、則ち諾さる、それより河合氏方へ行き、新島氏と家人とにて葬式の飾に輪と十字架を榊にて作る、今宵は夜侍をなさんとして十二時頃より眠込む、蓋し着衣のまゝごろ寝なれば不快、午前十時より一時間ランヂス氏の哲学講義あり、ペルソナリチーに就て話さる、但し緒論

二十五日　晴天

〔欄外〕「河合義信氏の葬式」

午前七時半起床、朝飯前より棺蓋の切を取にとて北郷氏方へ行き、亦標木をけづらす、食后三人にて入浴す、十一時過より波多野へ行く、承五郎氏此頃諸所の宴会にて夜更を為し其の□にや風邪の気味なりとて着床されき、午飯馳走、一時少し前退く、長谷川君の司会の下に一時少し過より河合義信氏の葬式開会、一、讃美、二、新島氏の祈祷、三、自分聖書朗読（撒母耳後書十二章三節より二十三節まで）、〔ママ〕讃美、五、和田秀豊氏説教――ダビデの信仰に就き父母への励を第一に説き、次に信徒及未信徒の為に未来の再会及其幸福に就き励めらる、六、同氏祈祷、七、讃美、八、祝祷にて了る、余蓋を取り亡児の顔を見せ暫にして釘にて再び打付き人足に渡す、二人の人足棺を負〔担〕ぎ一人標木を持つ、会葬者無慮三十五六名なりき、二時半頃出棺、立山埋葬地に埋む、但し埋葬地にては休憩某屋にて式を済せ、穴にては定式を為さず、此時秋葉氏司式、則ち讃美・聖書朗読・祈祷・讃美にて了る、后同日の菓子及茶出ず、穴に送るもの二十名許なりき、

二十六日　晴天　安息日

秋葉氏説教さる、即ち約翰伝十二章一節より十二節の中節より一節までを題詞としマリヤとユダてふ主意にて説明されぬ、波多野にて弁当を使用す、承五郎氏通じの薬に中てられ朝より腹痛に絶ずと苦しかられ居りき、女子学院の音楽教授に就き語らんとするも不例の折柄故老母に告げ相間〔合間〕に承五郎氏に計らしむ、則ち彼の学院にて楽器の都合悪しければ波多野の方へ来りて教授せば如何と、就ては謝礼として四円程出しては如何といふにあり、午后貫一氏と永田町辺まで波多

野の宿を尋ね別れ、余は日影町田中に至り写真を撮る、序に井田氏を見舞ふ、同様なりと、山内側にて河合の両母に会ひ牛に牽れて善光寺的に丸山及び増上寺辺を徘徊し鶯谷山下に別れ、一直線に河合氏へ行き午飯の替にパンを(ママ)を食ひ、河合氏同道教会に行く、河合氏説教す、聴衆十人、長谷川氏と帰校、九時半頃なりき、白石氏・近藤氏・国元等へ写真送る、

二十七日　雨天

細川(29—38)瀏氏此度横浜海岸教会の牧師とならるゝに就き、就職式の為臨時東京第一中会を芝教会に開く、河合氏行く、午后波多野へ行き音楽教授の談般(談判)を為す

二十八日　晴天

〔欄外〕「渡辺六郎氏上京」

越后高田より渡辺六郎君来る、二十六日に来りしなりと、氏此度修業の為出京、今や植村氏方に在りと、六時頃より赤坂辺まで送る、ランヂス氏病篤(29—39)く為に午后祈祷会を開く

二十九日　晴天

昨日午后一時よりは例により祈祷会あり、ミロル氏司会、教授者の自任てふことを勧めらる、漸くサッポートを受取、ワイコフ氏曰く次回よりは注意して勉強せよ云々

三十日　晴天　孝明天皇祭

波多野へ頼む音楽教授の件に付き岡本薫姉に交渉す、一時頃渡辺六郎君来校、植村氏も大に困まり山田氏に計れと申されたれば来たり云々と、則ち高山医院の規則書を取り、片岡氏にも談合し山内・井田氏を見舞、飯倉にて渡辺氏と別る、今朝国元より小包郵便来り、棉(綿)入羽織と菓子、若

林よりの割餅等送らる、菓子は自分独りにて大概食ふ、（机の下に置き一つ二つと不知〳〵平ぐ）、渡辺氏と別れてより河合氏・波多野を経て帰路十番にて最上□黒すし屋に入り八つ程摘む、秋葉氏へ行き遊ぶ、長山・宮川・伊藤と帰校す

三十一日　晴天

昨日午后三時頃理吉来りし由で丁度若林芳郎氏在り、里見純吉氏の寓へも携れられ夕飯后帰されたりといふ、遺憾なりし、金曜会の演説会に出席、当夜は早川氏の過去の日本基督教会及未来の日本基督教会を中途にして止められ、村松氏の伝道者と社界〔社会〕通に和田氏のナポレヲンとバイロン論あり、千磐・杉本・川添の批評あり、随分盛んなりき、また関氏も批評として気烟を吐れたり、会するもの二十人、

二月

一日　晴天

〔欄外〕「井口峰子」

正午頃渡辺六郎氏来校、中山氏へ行きたれど不在にて去り来ると、蓋し余昨日同氏の事に付き早川氏に計りしに早川氏は之を中山氏に計りしにて、中山氏は直に植村氏へ交渉せしものとみゆ、則ち一時頃より渡辺氏と同道麻布まで行き、余は波多野へ行く、井口姉への謝礼月四円の割にて相当ならんと告げ伯母も承認され、余は峰子を携れ車にて女子学院に到る、岡本姉も井口姉も在り、井口姉の室に案内さる、室は手狭なりしも整然たる処、女生徒丈と見へたり、思ふに寝室も

勉強室も兼対〔兼帯〕と見ゆ、岡本姉の照介〔紹介〕にて井口姉に会す、一見悲想を顕せり、されど品高潔・性温順なるところ、岡本姉の学友として正に斯くあるべき乎、姉は横浜フェリス女学校(29—40)の撰科卒業、昨年の秋当院へ入学せしなりと、則ち今は当院幼稚園の教師たり、波多野へ来るべきは毎週三日の事にて当分は赤阪〔赤坂〕教会より借用の旨話し来る、両姉余等を案内されて、教場・チヤペル及五階の見物なぞを見せらる、此日寒気烈しく大に染みたり、彼これ一時間程話し四時少し過去りぬ、時に両姉門前まで見送らる、波多野にて夕飯の馳走になり五時過去る、かねて招かれたれば河合氏へ行く、則ち長谷川君先づ在り再び夕飯す、豕〔豚〕の馳走なりき、是より前磋塘〔砂糖〕三斤を求め長谷川と連名にて河合氏へ遣す、蓋し過日来幸不幸の御祝儀・御見舞を送りし為、今日何となく実用物を送りしなり、十一時過まで話し、余司会にて祈祷会を開き、十二時頃長谷川君と共に添寝す、着床后長谷川氏尚好く談ず、斯く全く就眠せしは二時過と覚ゆ、今日三河台町より番町まで上下の車代二人前四十銭なりき、

二日　晴天　安息日

七時過起床、九時過教会に行く、日曜学校生徒集会二十五人、礼拝式二十七人、教会の婦人祈祷会を梶氏(29—41)方に開く、聖書学館(29—42)より酒井・遠藤の両姉来られ十人程の集会なりしが如し、但し未だ開会の前、余と長谷川は梶婦人(29—43)を見舞ひ、今日初て長谷川に照会〔紹介〕されて相知る、姉も亦感すべき婦人なり、帰路三田松山の福島於菟吉氏を見舞ひ、国より送られし見舞料金壱円を渡す、既に学校に近かんとして四宮龍雄氏に会ひ呼で夕飯を与へ数時談合し七時頃去らる、立石家へ養子となる、今日かねて奥平姉より訪問せられよとの岩佐兄弟を麻布三河台町二番に尋ねしに何れも

不在なりき、

三日　晴天

近藤氏より来状、渡辺六郎氏中山氏の周旋にて菅沼医院へ入る、午后長谷川君と散歩して二本榎辺に杖を曳き、奥平の梅屋敷に至り観梅の先鞭を着く、一二本開蕾せる景色一入の見物なりき、

四日　曇天

井口峰子音楽教授の為今日より波多野へ来らる、但し一週三日則ち火・木・金の三日なりと、

五日　晴天

図書館(29—44)今日より開館、例の如く三冊づゝ貸与さる、但し印証を要することゝなりぬ、余はブルースのパラボリックチーチングヲブゴスペル(29—45)とチーチング(ママ)をぶクライスト(29—46)（二冊）を借る、

六日　晴天

七日　晴天

越后高田の宮崎八太氏逝去の旨、中村茂策氏より伝承、蓋し去る二日のことなりといふ、

八日　晴天

午前芝口郵便局にて近藤氏の為替五拾銭受取、同氏よりの依頼により聖書を求め、了町の菅沼歯科医に渡辺氏を尋ね、同氏より同氏が近藤氏より貰ひ来りし聖書を送らす、渡辺顕氏を訪ひ不在、河合氏にて弁当を使用し、番町深尾氏を見舞んとして不在、五時頃帰校す、但し村井光姉を訪問す、

九日　雨天

長谷川氏寝后にて麻布材木町の講義所に寄ると、日曜学校九人、礼拝説教に十五人、河合氏の信徒の献身てふ主意の説教ありき、午后河合・新島の両氏と清水由松氏の寓を訪ふ、来客あり意の如く語らず、夜分長谷川氏説教す、四人集る、但朝来の雨やまず、台町教会にては昨夜より今夜にかけ説教会あり、昨夜は山本・アレキサンドル両氏話さる、山本氏は信者のため、

十日　晴天

余昨夜教会より帰校后、“I jumped to the conclusion about O.K. Is it righteousness ?”と、薫子氏曰く可ならん、要は其の方法なり、考へ見んと、永井氏九十九里行に就てアレキサンドル氏に聞く、曰く代理さへ出来なば今月中に行かるべし、何れ后〔遅〕ても来月は行くならんと、余頃日長谷川氏の借り来りしJames Dennyの著に係る“Studies in Theology”を読みつゝあり、大体に於は基督を土台としたる単編〔短編〕の神学書にして一寸弁理なる書なり、思ふに“Return to Christ”,“Back to Christ”〔Back〕等の語は現今の神学界に於ける警話と見ゆ、昨日大関和子より来状、中村君に鳩翁道話(29—47)と駿台雑話(29—48)を遣す、后者は秋葉氏より無心せり、

十一日　晴天　紀元節

朝来唐風すさまじ、学校にては例の通り紀元節の祝会ありし由、余デニーの神学入門(29—49)を読み半日籠宿、午后一時より麻布波多野へ行く、串戸・堀内万吉の両氏あり、其内に千葉よりの来客松下弥兵衛、早川・松下を携て来り、松下在塾の保証を承五郎氏に依頼せらる、音楽教授井口姉には節句にも不拘来らる、不会、

十二日　晴天
植村先生風邪の由にて欠席さる、岩本善治氏〔巌本〕(29—50)の妻君かし子(29—51)事には、去る十日逝去し、岩本氏〔巌本〕尚病床にありと、氏の為惻隠に不堪、長谷川氏昨夜の会に就て物語らる、

十三日　雪天
夜もすがら寝床寒けきは其筈なりけり、今朝は平常より物騒しき風情なれば、何事ならんと起き見れば雪ぶりにて早や満目銀世界にて、幼年生徒の珍らしかる有様を見るにつけ、過ぎこし方の故里のことゝも忍れて一入思案に暮にけり、今日中山氏より渡辺氏の事に就き聞か如くんば、菅沼氏の手紙に渡辺氏は未だ学力に於ても実地に於ても極く幼稚なれば、此后受検せんまでには幾多の歳月を要するなるべきも、当人事には余り斯道の確品に就き充分なる覚悟なきものゝ如し、如斯有様にては充分なる世話も当方は出来ず——衣服・小遣の世話は出来ずとのこと——と、余早速渡辺氏に注意の書面認む、

十四日　晴天
渡辺氏より反書〔返書〕来る、午前散髪入浴、渡辺氏の話に大関姉は十七日頃上京さる由、午后長谷川氏と赤阪〔赤坂〕教会に祈会の為行く、新島・田中の両氏来る、河合氏来客にて不参、

十五日　晴天
白石君より来信、午后近藤君より来信、則ち渡辺君の事に就て万事依頼すと、宮崎ヤス子へ弔辞の音信を出す、白石君の話に氏は来月早々宮崎へ移り、ヤス子は上京後、前の如くツル(29—52)ー婦人の許に働く由

明治二九年二月

十六日　晴天　安息日

日曜学校二十五人、礼拝式に二十五人の集会なりき、河合氏愛の二方面あり、幸福と艱難是なりと説教さる、余午后里見老母を誘ひ北郷氏の講義所へ行く、集るもの十人、尚波多野に行き夕飯馳走になり、六時半頃教会に至り三十分間略問答を講義することを初め余之に任じ、后三十分間説教あり、河合氏為さる、六人集りき

十七日　晴天

〔欄外〕「ランヂス氏一家及び中村茂策(29—53)氏の送別会」

若林芳郎氏風邪の気味にて、余品川へ医を聘招(ママ)に行く、夜分来り源三郎氏と薬を取に行きぬ、昨日より厳寒腸腑に徹す、ランヂス一家及中村茂策氏の為に今宵六時半頃より送別の宴を開かれ、井深氏司会にて熊野春江(29—54)氏の英文にての送辞は普通学部を代表したるものあり、次に杉本君先づランヂス氏へ英語にて送辞を延(述)べられ、次に邦語にて中村氏に送辞あり——キリストを以て生命とせよ——后里見純吉君学院青年会を代表して中村君を送る辞を延(述)べられ、後井深氏の指□的送辞あり、最后に菓子出づ、六時五十分開会八時閉会、因に記す、ランヂス氏への送り物(29—55)は桜花の掛物（十円位）と花生（五円位）なり、生徒の会費十銭にて、内五銭を送物の費に充てたりといふ、多分の費用は教授連より出でしものと見ゆ、

十八日　晴天

大関和子及令嬢無事着京せし由、六郎氏より来信、午后芳郎氏の為品川へ薬取に行く、氏も今日は起床せり、

十九日　晴天

渡辺六郎氏事菅沼氏の気に入らず、昨夜同家の母なるもの手詰の談般〔談判〕を中山氏へ申来りし由、中山氏より申さる、サッポート受取る、

二十日　雪天

〔欄外〕「ランヂス氏一族並に中村茂策氏の洋行」

ランヂス一族及び中村茂策氏には午后一時半の列車にて横浜へ立つ、品川まで送る、蓋し明日夕乗船、明后日離浜の筈なりと、炭を取寄す（三十五銭）

二十一日　晴天

金曜会弁士の□〔都カ〕合により祷会とす、会するもの余と矢島氏のみ、則相共に祈て去る、

二十二日　晴天

頃日活ける基督に就き感する所あり、日本評論中の歴史上の基督と現今の基督を一読、デールの活ける基督と四福音書(29—57)あるを知り、直に図書館より借る

二十三日　晴天　安息日

日曜学校生徒の集り二十七人、礼拝式に二十一人、午后京橋の菅沼氏なる渡辺氏を尋ね、修学上少しく忠告する所あり、祈祷を為して去る、序に同氏の所有に係り其時丁度机上に開きありし日本文学史の下巻(29—58)を借り来る、蓋し此時余は渡辺氏に喩すに歯科修学中は専門以外の読書は宜しく割愛すべしと呉々も念したるを以てなり（今日始て申上たるに非ず、実に高田にある頃よりも再々申上、亦此間も手紙にて申送りたりき）、是より前長谷川君と長田〔永田〕町にて別れ、同氏は麹町

の岡本姉を訪問に行けり、薫子の話に井口姉事には波多野の様子万事都合宜しき故喜ひ居ると、殊に老婆の会釈周到懇切なる難有き次第なり云々と申し居らる由、薫子も家兄の身上に就き心労せる由、夜分は五人集る中未信者二人、又村上の信者なりとて老婆来る、

二十四日　雨天

長谷川氏の母君、同氏の為に羽織及着物を送らる（一昨日）、長谷川氏昨日早速着す、而て河合氏にて弁当を使用するに際し、氏は袖よりハンケチを出し之を膝の上に置きたり、余思はず冷かす、氏真面目に謂て曰く、親た難有ものだ、僕が知で居たら送て呉れた…それだもの少は大切にせにやならぬ云々と、嗚呼是れ氏の行儀としては特筆大書すべき珍事奇行と謂ふべし、昨日酒井姉の申さるやふ、今朝ウエスト姉妾を呼で河合姉には最早力付き、且つ嬰児もなきことなれば教会の為め働き得べし、就ては御身には今月一杯にて赤坂行は止にせよかしとの由にて、河合氏を初め教会員の困配〔困憊〕するところとなり、遂に余は右に就きウエスト姉への談般〔談判〕方と委任さる、扨て今日朝八時頃ウエスト姉を訪ひ、先づ酒井姉をして赤坂行を止めしむるは他に赤坂より窮迫の働き場ありてか、又は河合姉の病痾平癒と気候温和とにより、同氏の働き出さんことを促す為に出しやと問ふに、全く河合姉の為に同氏の働きを促すなりと、而して右に就き種々異例を挙て牧会学的談儀〔談義〕を聞かされぬ、余は河合姉の未たに尚弱身なりと話すも、更に聞入れず、何れ不日ウエスト姉は河合氏を見舞に行くと斯て詰り、談般〔談判〕は曖昧にして九部〔分〕九厘酒井姉の引挙げを主張せられき、余も又敢て嘆請せず、河合氏も又午后行けり、

二十五日　晴天

中山氏来り曰く、渡辺氏事菅沼氏にても到底見限りなれば、手詰の談般〔談判〕に被及度と菅沼氏よりの申越なりと、六時より六号室にてクラスミーチングにて郡山・河野委員、郡山司会し例の如く祈会后トランプの遊戯あり、特に二組混合にて総勢十人にて仕合たることにて、此の外の興ありき、山野氏不快にて欠席、

二十六日　晴天

渡辺氏の為、一応退館の不得止事を促す、則ち夜分来訪され懇々念する処ありたり、福島三造氏此度社用にて長崎勤務の事となり廿八日夜出発すと、

二十七日　晴天

昨日は夕方御殿山へ散歩し、亦今朝は五時半起床、潔身の后五層楼にて祈祷す、長谷川君病み高山医に掛る、並の風邪なりと、

二十八日　晴天

〔欄外〕「福島三造君長崎の支店に移る」

夕方波多野へ行き承五郎氏より福島氏の為に長崎三井銀行支店長村上定氏へ招介〔紹介〕状を貰ひ、九時五十分発の福島三造氏を新橋停車場に送る、純吉氏来る、福島より叔父も来らる、尚菅沼氏へ渡辺氏を見舞ひ金三十銭小使として遣したり、又嶋田〔　〕作夫氏と申す同窓の友人とも近き氏にも呉々渡辺氏の後策を依頼し来やる、氏は福井の人にして甲斐〳〵敷人物なり、十二時頃帰校す、

二十九日　雨天

原三都子今日朝八時頃横浜着の由、昨夜電報来り、則ち長谷川氏六時頃横浜まで向(迎)ひに行く、午后四時頃秋葉へ来らる、薫氏の兄君の為め早川に問合す、渡辺氏愈々菅沼氏を去る、昨夜波多野にて中野のおば様に面会し、福島於菟吉氏の様子を聞くに、元来於兎吉氏の病気に就ては医師も不例の病症なりとて暫く病名も附せられず、又治療も唯一時の弥縫的に止まりしが、是より前医者はもし梅毒の気味あらずや、其の感染を受る機会ありしや如何と語りしに、本人は初め之を答て決して然るべき機会なしといふにぞ、医者も如何にも新らしき病気なる哉と不思議に致せし程に、此頃不図本人も右梅毒の感染を受くべき機会の覚へある旨を白状に及び、初て其の手筈を為に至りしなりと、されど最早少〳〵手遅れとなり、松山氏は生命の程は請合叶ざる由、依て波多野は高田氏をして見舞に遣したり、

三月

一日　晴天　安息日

礼拝式に会するもの二十七人、今日は大島婦人の洗礼式ある為めフルベッキ氏来られ、詩篇百十九章十一節を説明的に説かれたり、波多野に行き六時半頃里見氏・中野とよ子等と帰り麻布亭に登る、今朝は寒気また〳〵しむ、梶氏に教会の婦人祈祷会開かる、

二日　晴天

渡辺六郎氏には一昨日植村氏の宅へ一先づ引取りたりと、今朝一寸見へたり、原姉に托して若林

ふじ子・叔父・おふく・おわか等へ手紙認む、

三日　曇天

原三都子七時頃帰国の途に就かる、昨夜は新島君も秋葉へ来られし由、午后長谷川氏と同道、中台氏へ参上、台町への励書を渡す、

四日　雨天

五日　晴天

井口・薫の両姉に宛て文学会の入場券を送る、但し長谷川の友人山本姉のと共に三枚送る、

六日　晴天

第十四回青山明治学院文学会(29—59)開かる、プログラムは左の如し、

programme

Prayer	ガーヂナー
Address of welcome	熊野先生
Music	戸田
English Essay ——Love	ガーヂナー
邦語演説　個人性の膨腸(膨張)	青山　菱川(29—60)
English Oration ——The Greatness of Japan	森田金之助(29—61)　石川(29—62)
Instrumental music	

明治二九年三月

明治二九年三月

邦語演説　既日龍雲従之矣　　青山　小室篤次

Music　　福田夫人

English Oration —— The Grave, is it end of Human?　青山　菱沼

邦語演説　予言者を論じて国家の興廃に及ぶ　　田島進(29—63)

Music

Benediction　　井深梶之助

After the □□□□ will be the following □□□□

□□□　Brotheres　　有志者

其他——話家(噺家)の落語、茶菓出づ、六時半開会、九時閉会、植村氏方より渡辺氏の番町居処を聞に来る、

七日　晴天

矢島君総身に腫物出来閉口され居たり、午前十時より銀座三十間堀の太田氏の山内氏を尋ね、菅沼氏に行き島田氏に会し渡辺氏の宿所を聞き、日影町一丁目一番地蒔田秀雄氏方に行き一時より二時まで待つも帰らず、則ち名刺を置て去り、波多野へ行き六時頃帰校す、途にて井口姉に会す

八日　晴天　安息日

礼拝式に集るもの二十四人、徳田姉、酒井姉に更て来る、夜分五人集る、今日午后一時より河合氏と青山千駄ヶ谷なる加藤敬三氏の床を見舞ひ、帰路北郷氏の寓に訪ひ暫く談じ、再び河合氏へ到る、此后氏は去る二十六日頃御産なる産児不幸にして四日目に逝けりと、

九日　晴天

九時頃渡辺六郎氏来る、島田氏の周旋に係る方は破談となりし由にて、六郎氏の母君の知人妻君となり居る可井〔河井カ〕とか云ふ人の所を聞糺す由にて去らる

十日　晴天

十一日　晴天

〔欄外〕「種痘」

当時「ホーサウ」流行〔29―64〕する由にて、学校にても加字木〔加治木〕氏を招き種痘す、余も種て貰ひぬ、

十二日　雪天

〔欄外〕「クラスミーチング」

午后二時頃より降雪たちまち積る、矢島氏の為に品川へ薬取に行く、六時半よりクラスミーチングを開き、余と千磐と委員となり余司会、伝道者宜しく自修を怠るべからずと励む、千磐氏曰く吾人の信仰は宜しく積極的なるぞ進取的なるべしと、八時にして祈会を止め、十時まで例の如くトランプを遊ぶ、今日は山野・村松の両氏風邪にて欠席され、其余は雪を冒して会さる、今日植村先生よりデール博士の談を聞く、其の逸事にさる事ありしと、則ち彼がバーミンハム教会の牧師と撰れしとき其のカマキリの説教に於て最も理性的なる説教を為したるにぞ、其后該教会員の重役某に会し、某よりの注告〔忠告〕に他の説教はあまり六ヶ敷して聴衆は得会し得ざるべし、以后は宜しく実際的に平為〔平易〕に話されよと、デール之を容れず、依然理屈ほき説教を為し居たりといふ、蓋し彼デールの意には教会員に理性的説教を聞かするは教役者の義務にして教会の堅固是より成る

と、今宵の集にて余押〔推さ〕れて送別会の委〔委員カ〕とせられ、山野・清水の両氏を助くる事となる、彼は年少の説教を組織的に述るを例とせりといふ、福島三造氏よりはがき来る、

十三日　晴天

長谷川氏の名目なりし書籍過日にて罰金四銭とらる、今日送別会の談合あり、余と飯沼君重〔主〕に写真掛となる、

十四日　晴天

散髪せり、種痘つかず、今までの賄清水は今日限にて去られ、明日よりはくぼなるもの来る由

十五日　晴天　安息日

日曜学校生徒三十人、礼拝式に十九人、午后波多野の婦人連と山内を散歩し、彼等は勘考場〔勧工場〕へ、余は日影町なる写真屋より渡辺六郎氏の寓を訪ひ、不在にて河合氏方へ行く、菅子姉受洗せりしと、夜分小児等十五六人集り余讃美歌を教て帰す、河合氏放蕩息子の話を為す、

十六日　晴天

白石小滝姉出産せられし由、特に男子なる由、目出度事にこそ、

十七日　晴天

十八日　晴天

朝八時過よりブルースを持て大崎まで散歩し、大崎の村社に小憩し該社の賽銭箱前の軒にて時余読書、快絶いわん方なかりき、午后二時より写真採影の積なりしに写真屋遅参、三時頃採影す、余委員にて独り奔走す、植村先生は何か気の向かぬ事ありてにや出席を拒まれ、余は神学部の前

庭にて押合ひたれど遂に来らざりき、岡山孤児院年報(29—65)二十八年分郵送し来る、今宵之を読むに感する事少からず、

十九日　晴天

二十日　曇天

〔欄外〕「卒業生送別会」

卒業生送別会を新聞縦覧所に午后一時より開会、清水君(司会カ)司にて千磐氏・伊東氏・ミロル氏の送辞あり、后北野氏の答辞あり、最后に井深氏の祝祷あり、三時閉式、直に高輪なる浴亭に移る、則ち菓子及すしの馳走あり、入浴して午后五時散会す、此日集るもの三十人、費用五円余、但し内半分は生徒一人前十銭づゝ出せし分、(卒業生は取除きにて)

二十一日　曇天

長谷川氏の為里見叔父に司会を依頼し送る、

二十二日　晴天　安息日

八時より日影町の渡辺六郎氏を見舞ふ、同氏の話に大関姉にはツルー姉の看病に来り居りしに、一夜越后より送られし雪を某より受取り其者を送り出で誤て倒(転)び胸部を衝ち手を傷け、加ふるに手の傷に虫毒を起し、為に看病の任に不耐、自分看病を要するに至らん事を恐れ、昨朝植村氏と同道帰越の途に就かれし由、但し植村先生は信州へ伝道の為め出張されしなり、波多野にて力掃除を為し、夜は教会にて二三の小供に話を為す、長谷川氏説教せり、午前礼拝式には二十人、小児集りは二十九人なりし由、鈴木寿氏に携れらし□、渡辺氏を青年会にやる、里見の老母風邪に

て臥せりと

二十三日　曇天

明日松本氏に托すべき白石氏への手紙を認む、夜分降雨盛なり、

二十四日　雨天

〔欄外〕「春期休業始ル」

五時頃起床、蓋し松本・岡本の両氏の帰国を送らんとして品川へ行きしも遅れたり、学校今日にて休業、春期休業始まる、午前小倉様へ小供の小試験参観に行く、

二十五日　晴天

午后久しぶりにてベースボールを為したり、蓋し休みたる故甘(上手)く出来ず、

二十六日　晴天

〔欄外〕「ハリス館(29-66)へ移転ス」

此度神学生はハリス館へ移る事となり、昨日闘を引き余は第二号室に当り、宮川氏をも招き、今日移転し半日此が為に費ゆ、午后運動旁〳〵波多野へ行き井口姉に面会し、同姉に学院卒業式挙行の招待状二枚を遣す、デニーの神学を読むに自考と符合し大に快なり、田中より写真来りぬ、四ツ切り三枚一組二円に一枚の焼増二十銭にて十二枚、都合十五枚の四円四十銭払ふ、

二十七日　晴天

午后曇る、但し謂ゆる花曇りといふべき乎、夜分大雨となる、

二十八日　晴天

〔欄外〕「明治学院第十一回卒業式(29-67)、卒業生、神学部、本科、長谷川峰吉・川添満寿衛(29-68)・北野高弥(29-69)・国沢篤実(29-70)・野村直彦・島田正七(29-71)・杉本栄太郎(29-72)、別科、本川次郎(29-73)・小河内碧(29-74)・関力之助(29-75)、普通科、石川林四郎・南廉平(29-76)・森田金之助・中根欽次郎(29-77)・田島進」

五時起床、満天かき曇り降雨尚不止、洗面整髪せし頃晴る、即ち里見を起して七時過より波多野へ行く、蓋し引越を手伝はん為なり、行ば即ち今日は休み明日に延したりと、中野・堀内氏ありき、余は華族女学校(29-78)の容子を調べん為に純吉氏と該校に行き規則書を貰ひ、応接の婦人二人に談合せしも更に容量(要領)を得ずして去る、明治学院第十一回卒業式を午后二時より開会、余之が接待員の一人となりうるさかりし、井口みね子も友人一人を携て来会されき、また同姉の談に岡本姉は都合ありて来会せざる事となりし由、又大森みき子には態々郵便にて断り来る、蓋しいたく来会を臨(望)みしも風邪の気味にて叶わず云々と、授与式の順序及卒業生の姓名左の如し、奏楽、一、聖書朗読、一、祈祷、奏楽、一、演説（天然の声、英語）普通学部卒業生石川林四郎、一、演説、伝道の困難、神学部北野高弥、奏楽、卒業証書授与、井深梶之助、一、卒業生総代、普通学部中根欽次郎・同神学部島田正七、奏楽、一、演説、貴族院議員従三位辻新次(29-79)（不参）、同氏は手紙を以て急に断り来り、井深氏朗読す、其替(代わり)りに珍客フイヤデルフ井ヤの大学教授パークフアスト氏一場の演説を為さる、氏は医学博士にて八十程の老人なり、奏楽、祝祷（稲垣氏）、此日会するもの無慮三百、茶菓を呈するに貴男貴女及卒業生は神学部に整備せる茶室に招き、其の他は講堂にてパん菓子を配附す（五銭、袋なりし）、余役目を済し、運動場に在るや長山来り神学

部の残り物に与らずやと、余是は妙なりと即ち行く、パんや取治め最中余三四の洋菓を摘む、パんや曰く皆持行れよと、即ち一ト皿さらい来りぬ、残りものに幸かあるとは此事なりと意気揚々持来る菓子は洋菓子にて一個三銭四銭位なるを十余個持来る、

二十九日　晴天

五時頃起床、里見・若林と波多野の引越を助け午后六時半頃悉皆整ふ、今日助人は高田の書生、青山幸三郎・中野成夫、其余は三井の出入なりき、午後七時頃帰路に就き、諸氏を永田町まで迷わせ、余は日影町にて基督教道徳[29-80]と講談越后伝吉[29-81]を求む、波多野の番地は一番町三十九番地なり、

三十日　晴天　安息日

昨日こそ安息日にて、昨日二十九日の波多〔波多野〕の引越の記事は今日の事なり、本日集るもの、礼拝式に十六名、今日午后二時頃より梶氏を訪問し梅太郎氏及びクラゝ姉に面会、両氏に津田姉[29-82]への招会状〔紹介状〕を依頼せしに、クラゝ姉快く諾され直に採筆一信を与へらる、

三十一日　晴天

〔欄外〕「津田梅子を訪ふ」

午后は藁履掛にて出発、日影町辺より赤坂河合氏へより、波多野にて下駄・足袋等を借り、四時頃津田梅子を下二番町二十六番地の寓に訪ふ、不在にて再来を約して来る、即ち小倉氏の下宿を訪ひ、同所にて弘松氏に暫くにて面会、暫く話し茶菓馳走となり五時過なり、一寸波多野へ帰り、再び津田姉を訪しは六時過にて先方に至れは既に点灯にて客間に案内さる、間なく主婦梅子

入来、躯体矮にして容貌美ならずと雖も品高きものありき、居座挙動談話の体裁存外日本風なりき、

四月

一日　雨天

六時起床、関谷にて唐傘を借り腰弁当にて下東の途に就きしは八時頃にて、午后六時千葉早川へ着す、此日朝来雨しきりに降り、特に東南の横吹にて困りはてたり、加ふるに傘の柄□に肩に滋気を受け、何となく心気悪かりし、元来本所より千葉間の道は謂ゆる長丁曲歩の旅路にてほとんど閉口せり、途中市川の西一里ばかりの処に憩み弁当を遣ひ、わらんじ共茶代三銭置く、藁履を千葉までに二足替ゆ、関谷叔母より松尾母へとて呉れたりし洋甘〔マヽ〕を早川の子供に与ふ、叔父との談話に福島於兎吉氏の事出で、余は兼て同伯母及中野の叔母様の伝言を逐一相語りしに、叔父は福島叔母の食糧の一分〔部〕費として壱円を出す由に申されたり、十一時頃着床、

二日　晴天

〔欄外〕「帰省」

八時半頃早川を出発、二時頃八街にて早川叔母の与へられたるすしの弁当を使用、わらんじを一足取り五銭投ず、斯て午后六時半頃無事着松、夜里見叔・若林祖父来談、何れも十時過ぎ帰らる、十二時過着床、一時過就寝、俊三事先月の大試験に優等せりと、さては今年は優等中〔当たり〕り年にや、先づ東京にては秋葉せい子・関谷力、千葉にては早川の修ちゃん・泰ちゃん・里見の重ちゃ

ん・上の餅屋の豊太、また伊志田氏の小供某も優等なりと、宮川・矢島へ同封、白石氏へ一封出信す、

三日　晴天　神武天皇祭

昨夜里見叔父との談話に叔父曰く、

現今日本伝道策の上に於て欠点といふべきは教規のあまり自由放任に流れ居ることにて、此は米国風に教会に自治制を行はんとするものならんが、余の思考にては自治制は日本の教会には未だ高尚過るといふべきか、兎に角叶わぬもの〻如し、如何となれば今や政治上の自治制にても実際行れ得ざるなり、小きことなるが市町村制も郡役所なく郡長なくんば紛離極まるものとなること事実なり、然らば市町村制を履行すべき我々日本人が修へる教会なれば、教会の自治制と又実行し難きは其筈なり、故に日本伝道の法方（方法）は監督政治的なるを策の得たるものなり云々、

此日十一時頃より須貝・若林・鈴木氏等を訪ふ、若林にて午飯馳走さる、話鳥羽氏[29-83]の事に及び同氏より年賀状来り拝見す、目下左の所に在り、爪哇ソロバヤ市チヤンテアン、ギドル鳥羽鳴皐ー

M.Toba
Japanese Artist
Street Tantean Kedoel
Sorobaya

里見純吉・森田金之助・富沢清斎(29―84)の三氏午后六時頃来松、拙宅にて夕飯進呈、十一時過ぎ里見へ行かる、今宵須貝・若林来食、須貝よりすしを送らる、

四日　晴天

午前十時頃里見へ行き午飯にでんがくの馳走に相成り、四郎吉・俊三等を相手に餅草を摘み来る、今宵は若林にて鯛の馳走あり、里見の親子京・容・拙宅親子三人・福及秋葉氏招かれ、十時過退く、秋葉氏は今日帰省せしなりと

五日　晴天　安息日

日曜学校に小供等三十人程集り九時半より開会、余司会となり先づ初に讃美を稽古し、后余は基督の光なる例説々明を為し、十時半頃より秋葉氏の説教なり、午后は大人の聖書研究会あり、輪侍(臨時カ)の講義を秋葉持ち、ルカ伝の輪講を里見叔持つ、礼拝式に二十三人、聖書研究会に三十人集りき、

六日　晴天

朝九時頃より会堂掃除の為、親父・里見叔・鈴木次郎・川島太三郎・犬塚まさ氏等と草取りし午后四時頃了る、昨日捕りし草にて草団子出来大に満腹、里見にすしの馳走あり、親子五人にて行く、秋葉氏も行き十一時過き退き、秋葉氏拙家へ泊る、里見の連中浜見物に行れき、

七日　雨天

午后風雨となる、長谷川君朝来松、正午頃入来、丁度里見叔も在り秋葉氏も在り直に打合を為し、長谷川氏は再び津辺なる原総一郎氏の所に行き夜帰松、挙式の日を来る九日とせり、夜分里

見の連中来り長谷川氏の招待状を認めて深更二時半頃に及び遠隔へ郵便にて五十本、教会員へ四十本程認む、

八日　晴天

朝長谷川の招待状を郵送すること四十八信、他に五六ありき、午后専ら明日の仕度の為会堂装飾に掛る、生花は若林老人担任されたり、新島善直君午后五時半頃来松、一寸原氏に憩ませ、余等会堂より帰宅の時拙宅へ案内す、今宵里見に水曜日の祈会ありしも余風邪の気味を用心して不参、

九日　晴天

〔欄外〕「長谷川峰吉氏と原三都子との結婚式」

今日午后三時より長谷川峰吉君と原三都子の結婚式を九十九里教会堂に開会、里見叔父司会、讃美（五十五番、会衆一同）・祈祷・聖書朗読・讃美（二百五十二番（小女里見清子、和嘉子の外三四人）、司会より公衆への証諾申度〔渡〕、及両人への宣告・祈祷・唱歌君が代（小女等）の順序にて閉会、初より二十分間にして了る、其のあまり簡短〔簡単〕に失したるを恨むなり、ヲルガン曳〔弾〕きは大塚の娘仕らる、会するもの五十人余、后茶菓を出す、当日余は接待員兼菓子掛なりき、菓子は拙家の製〔29—85〕に掛り、巻カステーラ三つにあんぱん三つに指押三つにて、之を白袋に入れ上を巻紙にて巻きたれば体裁よかりき、散会するや余は直に五反田なる川島伝右衛門氏を訪問し種々物語り、別れに臨み簡短〔簡単〕に祈祷を為して去る、帰路若林・須貝を□して来る、今宵新島氏と里見へ泊に行く、蓋し余は里見叔母に暇乞を為し旁々談合したき事ありて行きたりしも其機なかりき、里

見純吉氏の一行今朝六時頃成田を廻て上京の途に就かる、

十日　晴天

〔欄外〕「浜見物」

昨日の夕方今日浜見物の催を約束し、里見より叔父・重吉・信吉、拙宅より親父・良一・俊三及長谷川・新島・自分、尚、須貝・青木も年賀旁々同行され、午前七時四十分頃出発、十時より前海岸に着、蓮沼にて須貝・青木・親父はおすみ姉の宅へ年賀に寄らる、此日朝またきいたく曇り二三粒は降りしやに見へしも、謂ゆる花曇なりけん、十時過きより全晴となり暖温を過き暑気を感するに至りき、十一時頃引上のひらめ五十尾曳上りしを見物し、里見叔は其の内の最も大なるもの一尾を三十銭にて求め、尚午食の弁当の菜にとて大鰯を求め、里見より用意のすみそにて生を食ふ、肉尚ほ生きたるものとて厚味いわん方なかりき、多分のむすびを全く言はじ、十二時過ぎ秋葉太平二氏の方に行く、家人の勧めにより洗足して少憩を貪らんと上り、兼て用意せしたりといふすしの馳走あり、満腹の節なりしも尚詰め込み満腹一層、其中に親父と須貝・青来〔青木カ〕り、又洗足上り暫く談し、三人は大物の捕魚を負ひ来る、大なるひらめは親父が太平二氏より貰ひし分なりしと、一同は四時退去六時頃帰松、母・親父・良一にて料理し、余は最后の整理にてさしみを造りたり、里見叔父・長谷川・新島の三人と会食、鮮魚の生其の味筆すべからず、親父事昨夜より腹痛、今日一日宜敷からず夕食も見合せり、里見と長谷川は十時頃去る、新島君寝に着く、茶の間には親父腹痛の故とて火烽の側に寝倒〔転〕び、母・良一・福・和嘉等余の廻りに座し種々相語り合ひぬ、軈て福も和嘉も寝に就きし頃父は家事の有様を打語り、少妹少弟等の所置〔処置〕なぞ語り出

でしも確たる談合もなさで止みたれど、父は今の家産を計算して示されたるが、家産の最も確かなるは地所にて現今の相場にて千円位なる地価なりといふ、其内水田十二表(畝)入は八田桜前の地所にて現今の地価にて五百円程のものなりといふ、母及良一の話も深意あるものなりしも充分なる応談もなさで止みぬ、要するに父は二女は此后相当に教育して某々適当なる家へ嫁せしめ、二男は早く養子に出し度様子なり、余は明朝出発の用意を為し寝に就きしは十二時頃なりき、

十一日　晴天

〔欄外〕「上京」

新島氏の起床に目醒め直に起き出れば丁度五時なりき、何事も早仕度にて朝飯の前に昨日余が為に態々作られたるさつまいりを二杯喫し、昨夜のひらめの煮付を菜に飯一杯喫し、父は床の上に座わり母初め弟妹等は余の側に座らせ、余先づ祈祷し、次に新島氏に祈祷り貰ひ、丁度六時に椽(縁)側を去る、此時親父も椽(縁)先まで送に出で、母・良一はじめ少妹等も見送り来り、母は尚熟□(睡)せる俊三を起し余の出発を見送らす、彼は眼を摩しつゝ余が彼を見おさむる時も尚現つなるが如くなりしも、不知彼は余が後姿を追覧せしや否や、餅屋・所屋・原氏・大塚等を暇乞し、富田にて浅野氏を訪ふに氏尚在床、特に微恙なりといふ故妻君にのみ会て去る、東金在原に来りしは丁度九時なりし、在原に寄ても謂ゆるヘーコンチワ、サイナラ的に挨拶し去る、蓋し十時四十分大網発の汽車に間に合せん積にて急ぎたればなり、是さき多田屋にても若林五郎氏に一寸会す、在原にては門口より一杯に糀箱重ねおり、余が入るや鳥とよし女は驚愕の様にて急ぎ出で、甲斐〳〵しき挨拶に余は久しぶりにもあり且つ兼て無沙汰勝なりしを以て如何に挨拶すべき乎殆ど言葉を知

らず、碌々に挨拶もせで去りしは如何に忙かばとて千万残念なりき、斯て東金より一里二十丁なりといふ大網に着せしは実に十時にして、ステーションには秋葉氏も岡本のいの氏も居りき、同行三人にて千葉まで来り、余は寒川ステーションにて二氏に別れ早川に至る、先づ不取敢洗足、午飯の馳走になり、間もなく叔父帰宅するに依り相談ず、前日談合し置きし福島へ見舞の金子金壱円を頼まれ、古履くを貰て早速穿て五時四分の汽車に投じて千葉を去り六時半本所に着、それより徒歩にて白金の学舎に帰舎せしは実に午后九時半にて、早速水浴して寝に就く、宮川氏の話に白石君は昨日の朝帰越され、矢島氏は此夏長野へ行き、長山氏は高田へ行き、河野氏は諏訪へ行く様談合整い居る由

十二日　晴天　安息日

五時起床、秋葉へ一寸行き赤坂教会へ行んとして時間遅れ、麻布メソヂスト教会へ寄りて竹田氏の説教を聞き、里見にて弁当使用、中野へ早川より依頼されし福島への見舞金を預け、一寸河合氏を訪ふに河合君不在、間もなく去り波多野へ行く、同家にてもすが子には腹部治療の為築地の病院へ入院せりと、同家を四時頃去り関谷に到る、叔母居り此度国より貫ひ来りし絹の羽織地の染方及裁縫方を依頼し、夕飯馳走となり六時頃去り、一番町教会(29-86)にて小倉氏の説教を聞き、帰路田中・新島の両氏に会し、田中氏に招かれ同氏の寓宅に行き茶菓の馳走になり、田中氏の著に係る「犯罪政治論」を貰ひ九時頃退く、番教会(一番町教会)にての集は十五六名なり、

十三日　晴天

午后御殿山見物に出掛けしに花既に散て落花だになかりし、しかも売家芸人も在り見物人も雑衆

せんばかりなりし、帰り掛に若林ふじ叔〔叔母カ〕等秋葉にて会す

十四日　雨天

今日矢島氏の話に過日中会の頃信州松本より来りし飯島氏は来る夏期には神学生のおとなしき人を周旋せられたしと頼みしにより、矢島氏は早速余を以て其の人に当てたりといふ、右に就き夕方小島清氏を招き種々彼の地の様子を尋ぬ、

十五日　雨天

今日サッポートを受取る、

十六日　曇天

〔欄外〕「川田鹿子の葬式」

一昨夜川田繁太郎[29-87]氏の祖母鹿子七十七才を一期に寄る歳浪に駆られて永眠に就かれ、今日午后二時より自宅にて葬式執行、青山墓地へ葬れり、司会は石原牧師にて、讃美二十一番・聖書詩篇九十篇朗読・祈祷・弘松氏の履歴談・石原氏の感話・小倉氏の祈祷・讃美二百十一番・牧師の祝祷にて閉会、本式に会せしもの二十二三人、野辺送せしもの十二三人余、埋葬了て茶屋に休憩を勧められ小憩し五時半頃帰舎す、当日石原氏は故ありて墓地に行かず、墓地にては島田氏司会、讃美二百五十番・祈祷・讃美にて埋葬せり、聞か如んば埋葬地の買入に一円五拾銭、整弥〔整備〕費に一円五十銭程を用せしが如し、午前奥平姉の為手紙を認め置き、夜分秋葉姉に敏子の二階より落ちて負傷せりと聞き退出す、此宵秋葉氏を訪ふに伊志田五之助氏在り、其内に長山氏来り九時過まで遊びたり、

十七日　晴天

夕飯后杖を曳て散歩旁々銀座辺へ行き、先づ築地の浦島病院に波多野すが子を見舞ふ、蓋し姉は子宮病治療の為去る六日に入院せしにて、治療后の経過非常に善く近日中に退院し得る由、帰路日影町なる渡辺六郎氏を下宿屋に訪ふ、氏は不日宿替を為すといふ、鳩居堂にて十銭の墨を贖ふ

十八日　晴天

〔欄外〕「盲唖学校／石川さの子／東京府下基督教徒聯合大親睦会執行」(29-88)

午前八時より学舎を発足、波多野へ一寸寄り十時半頃関谷に到り叔母に元久野さく事今は石川さの子への紹介状を認め貰ひ、是を以て小石川区白山御殿町なる盲唖学校(29-89)へ行く、蓋し当時同校に絵画展覧会あり、友人より右切符を貰ひ受たればなり、さすがは官立学校の事とて諸事善く整頓し、学舎の規模又見るへきものなり、受付及接待員は唖之を為し、唖生の案内にて諸絵陳列場を従覧(縦覧)す、唖生に托(託)しておさの姉へ手紙を届く、唖生諾して隣の官舎に行きたるものと見へ、おさの姉来り、彼は余を知り居りし由にていと馴〳〵敷挨拶され暫く案内され、余は彼女の多忙を推量し堅く案内を断りしに彼女は去りき、斯て余は各陳品室を従覧(縦覧)し、最后に盲生及唖生の教授する模様を見物して十二時頃退校、其節一寸おさの姉に暇乞を為せしに、彼の女は御飯時なればとて、たって食事を進められしも余は遠慮して去る、おさの姉の良人を倉次といふ、蓋し不会、尚同家に永江さと子在りき、再び関谷に来り午飯馳走となり一時頃上野に向て出づ、二時上野に着、兼て計画されし東京基督信徒大懇親会は同園東北隅の鶯坂上の鶯亭庭園に開会され、余の来りし頃は既に満場の人衆にて三時頃より開会されたり、司会者津田仙君(29-90)、一歌、聖書外山孝平

君、祈祷奥野昌綱[29-91]君、二歌、開会趣旨（論文朗読）巌本善治君・植村正久（欠席）、演説江原素六[29-92]君（欠席）・山田寅之助[29-93]君、三歌、演説松村介石[29-94]君・高野重三君・左乙女豊秋[29-95]君（欠席）、一歌、臨時演説（名士紹介の予定なりしも誰も出ず）、一有志演説・詩・歌・文（何もなかりし）、四歌、祝祷、君ケ代、余興として年少音楽隊・提灯競争・フートボール・スプーンレース・競走・綱引・盲目拾珠・撃剣・剣舞・其他数番して午后四時半頃閉会せりき、会費金三銭、当日会するもの二千二百人余なりしといふ、

十九日　雨天　安息日

礼拝式に集る者二十人、河合氏使徒行伝二十章二十八節后半を以て教会の為尽力すべき様奨励さる、河合氏に行き午飯の弁当使用、尚夕も遣ひ六時半頃去り、今夕河合氏不快にて余夜の説教を托され来りしも、降雨甚しき為来衆なく八時頃空しく退堂、雨を冒して帰校

二十日　晴天

〔欄外〕「ツルー夫人の死去[29-96]」

米国婦人宣教師ツルー姉は兼て病気の処養生不相叶、一昨夜八時三十五分愈々逝去の籍に就かれ、今日午后二時半より角筈村自宅にて葬式執行されし由、今日午前飯倉辺まで行き福[29-97]に半勝、わかれリボン、良一[29-98]にヨウジを貰ひ来りぬ、

二十一日　曇天

渡辺六郎氏日影町の下宿屋止宿都合悪しとて来校、当舎に暫時止宿せん事を語り止宿さす、午后秋葉氏へ行き里見叔父の来れるに会し、矢島氏と九時過きまで談合す、冷寒甚たし、五十五度

二十二日　雨天
明日ふじ子六本木に行き、明后日帰国の筈故かつ子の発意にて祈祷会開かる
二十三日　晴天
晩方麻布へ行き小形の聖書（新約）を求む、里見貫一氏を訪ひ中野氏にも会し九時頃帰校す、一日脳の具合悪しかりしは此頃過食にて胃を損ひたるものと見ゆ、
二十四日　晴天
午後散歩旁々六本木へ行き里見氏方にて十時過まで話し、若林純吉氏等と帰校
二十五日　曇天
時々少雨襲来、今日午后岡見氏方にて台町・品川教会合併の親睦会開会されし由、午后一時よりベースボールを初め、余三ベースを務め、二任合にて初は十五の勝となり、后は二の勝となりき、時に南風に誘れて襲撃せる降雨中々すさまじかりしも遂に堪へ通したる程に、夕方に及び快晴とはなりき、今宵一時頃兼て弛みつゝありし奥歯一葉〔歯〕を抜取す、蓋し初抜なりとす、
二十六日　晴天
〔欄外〕「福田錠二氏教師となる」(29—99)
礼拝式に集るもの十五人、午后一時頃より浜町講義所に於て執行さる福田錠二氏の就任式に出席す、アレキサンドル・マクネヤの両氏及原沢紀堂(29—100)の司式の下に無事了式せり、蓋し原沢氏は司会なりき、終て茶菓の饗応ありき、帰路長山と新橋まで鉄道に乗り、雨に降られ渡辺氏にて傘を借り、赤坂河合へ帰り夜終〔終夜〕問答を話し（三人）、雨を冒して九時過帰校

二十七日　晴天

昨日奥平姉及長谷川君より来状、奥平姉には余が問合せたる返事にて、松本の事情精しく申来らる、長崎の福島氏へ手紙認む、夜分里見貫一君来る、余既就床失敬せり、

二十八日　晴天

里見鋭子聖書学館にありて兼て不批評の処、一昨夜一時頃急に講堂を掃除せしとかを幾分狂気沙汰と見られ、ウエスト嬢には同姉の引取方を秋葉氏に申込たりといふ、

二十九日　晴天

二三日此方と無く口中及び脳の具合悪敷、昨日はミロル氏の組に欠席したり、昨日矢島氏より通じの薬をもらひ服薬今朝通ず、今朝高輪の塩湯に入らんとして六時頃至りしに、塩湯は朝は湧さずとの事にて白湯に入来る、井口姉へ払ふべき謝礼二円にしては如何と先づ薫姉に計る

三十日　晴天

今日も稽古休む、白石氏より来状、

五月

一日　晴天

井深先生細君を大磯に向に行かれ[29-迎]欠席す、蓋級長まで試験問題教会歴史二十ヶ条程出さる、国元親父へ長谷川祐氏の人為及同氏招聘に就き意見を申述ふ、又歯入の金子談合す、白石君に書信認む、

二日　晴天

〔欄外〕「聖書之友春季大親睦会」

波多野へ行き井口姉の謝礼の件に付き細君に談じ、午后一時女子学院に薫姉を訪ひ、前日書面にて交渉せし事の結果を糺す、察する所彼の女は彼の事を井口姉の談合するまでには非常なる躊躇を経、漸く今朝申出しなりと、然して井口姉もどうせ自分の稽古ともなること故、謝礼は如幾何にても可なりと答へられし由、帰路材木町の佐藤氏に居る波多野の老母に会し、此月より二円五十銭差上べき様申来る、夫より本村町渡部大臣別邸なる聖書の友親睦会に臨場、五時頃帰校す、

三日　晴天　安息日

礼拝に集るもの二十人、夜分十人、夜降雨、降られて帰校、此日小石川関谷に行き、はをりの染代一円二十五銭を置く

四日　晴天

五日　晴天

渡辺六郎氏は今日午后番町の方へ越さる、但し生の留守に行かる、

六日　晴天

長谷川君昨日上京せりと秋葉氏にて会す、今夕は柴山氏へ泊ると、学校へは一寸面目なくてにや、午后柴山氏の宅を訪問し令閨及令嬢に会す、嬢名を桂といふ、六才

明治二九年五月

七日　雨天
　新約書緒論の試験ありき
八日　晴天
　ミロル氏の創世記及説教学の試験ありき
九日　晴天
　十二時頃長谷川氏来り泊す、
十日　晴天　安息日
　特別なる精神上の都合あり赤坂行止め台町教会に行く、集会満場、石原氏は小児バプテスマの当然なることを説かる、
十一日　晴天
　アレキサンドル氏の神学の試験あり、自分は「ナザレの耶蘇と活ける基督」を論ず、今日より基督教倫理を読む、論理整然、実以て愉快の極めなりき、
十二日　雨天
　国元父より来状、彼は去月三十日より風邪に罹り昨今漸く少々快し云々、須貝春子には去月五日頃より胚胎〔妊娠〕中病気に罹り居りしに、去る八日午前一時遂に永眠せられし由、午后七時よりクラスミーチング開会せりき、
十三日　雨天
　井深氏の教会歴史の試験ありき、

十四日　晴天

午后二時植村氏へ招かれ三年生一同強行き、茶菓・すし等馳走となり四時半頃散退す、今宵河合方に長谷川氏の送別会ありし由、帰校后八時頃鈴木氏より聞きたり、

十五日　曇天

〔欄外〕「親睦会並にミロル氏の送別会」

午前芝今入町十一番地の歯科医に至り診察を受く、但し主任不在にて明日再来を約し去る、午后一時より閉校式兼祈祷会あり、又二時半より学院西隣の種屋の座敷を借り親睦会兼ミロル氏の送別会開会す、蓋しミロル氏は教師会あり四時頃来会、其際既に親睦会相済み、数名（過半）帰散せし后なりしも、柴山氏に礼の言葉を語らせ四時半頃散会す、会費三銭、但し金曜会の金を操出す、当日矢島氏司会にて二三の祈るものあり、后一二の余興ありき、福引もありき

十六日　雨天

〔欄外〕「歯の治療」

午后一時半過頃榎本に行く、主医あり、先づ前歯四枚を入替ることゝし、今日は前歯二枚を抜き（上）、前歯（下）の掃除を為す、蓋し前歯二校を抜きし時少々無感の気味となり発汗甚しきは幾分脳貧血の模様にて、本日は其侭にて置き、含嗽液を貰て去る、

十七日　晴天　安息日

午后一時榎本へ行き治療を受く、今日は血石除去と左右の前歯二枚抜き取る、昨日呉れたる約束証に治術料即納とありし故、今日聞けば矢張払ふことゝ見へ、抜歯料四ヶ所・血石除去料・含嗽

薬一ビン昨日と今日分一円書出され直に払ひぬ、今日整歯及血石除去の后直にろうを持来り上向の口中に押し込み二三分置き、以て入歯の次度〔支度カ〕を為されたり、帰路中野へ一寸より五時頃帰校

十八日　晴天

午后一時過榎本に行き血石除去に入歯の仕度を為さる、今日の治療費十五銭（含薬も）

十九日　晴天

村松・郡山の両氏は今朝六時二十分の品川発の汽車にて帰国の途に就かる、余送る、午后六時秋葉へ招かれすしの馳走になる、矢島・長山・宮川も共なり、長谷川婦夫には十時四分の夜汽車にて広島へ出発又送る、新島氏も来り寄宿舎に泊らす、余は純吉氏の床にもぐりき、親父へ送金を促したるに目下金作〔金策〕不都合なり、波多野にて借りよと申来る、

二十日　曇天

四時半起床、新島氏を送て目黒に行き、同氏は五時二十分の汽車に投ず、山野氏の品川へ来りしに会す、又同八時二十分には矢島・長山の両氏出発の途に就くを以て品川に送る、二時頃歯医榎本に行く、血石除去及入歯を為さる、今日の治療費十五銭（含嗽とも）、入歯の具合頗る悪く物もろくに言へす、とかく上より下り来り、此様子にては何時並に言し得る乎、殆ど希望なきが如し

二十一日　雨天

朝飯島氏へ手紙出し今月の末頃出張の旨通知す、今朝は深津・島村の諸氏出発せり、今日午后徒然なるまゝに、平素はあまり嗜まぬ小説を手に採るに、昨年の暮博文館より出てたる閨秀小説〔29―102〕

とて端篇〔短編〕小説数種集めたるものにして、其の口かきに中島歌子〔29―103〕の「花といふ花をあつめしこゝちしてみるふみいかにたのしかるらん」とある如くにいと〳〵うるはしき文字なり、中に就きいたく感しいりたるは若松賤子のものせし「わすれがたみ」にぞなりける、蓋し賤子如き乎になりしものは何れも潔白・有情・無邪気・活気の風趣に富み、且つ重〔主〕に家庭の事に係りたることゝて家庭の為にはいとも有益なるものどもになんなんめり、されど其他の輩々のものは至て下品にて不潔と殺風景とにみち、理想以外のものどもにて少女少年等の読まざるを好しとす、明日理吉へ手紙出し招きたるに、目下仕事多忙にて遠方の所来られずと、而して関谷位までなら一寸御面会までに上るべし云々と返書来る、蓋し生は父よりの手数により、彼に面談し度事ありて招きしなり、去る十八日父よりの手紙に左の如くありき、

理吉の手紙を見た所がやっぱり金子を貰ひ度云々なり、同人申越に先頃中より悪敷事とは知りながらよからぬ事に迷ひ、知りつゝ少々金を遣たり、自分の前方より少々づゝためたる金を遣ひ、亦衣類を二三枚質入抔に倣、今更悔語〔悔悟〕なしたる故困難至極たるや主人不在故主人に知られぬ中に衣服を出し度き故金三円送り貰ひ度由、里江及小生へも只管申越候なり、矢張先般中金子の入用抔とか申た頃から、何だの彼だのと虚言を関谷叔母へも申て、其頃より銭を遣ひ込たる次第と存、追々遊抔に迷后来大関係を来すときは実に困た次第に候、最早年季明にも近寄り大事なる時、亦あぶない年頃とはいゝ年頃といゝ位置といゝ甚だ心配に存候、未だ小供にはづれものは出来ないがと思中に、若し彼がはづれた時は実に残念でもあるし、亦困却もするならむと存候、此度の事は亦々気の毒でも関谷おばへ申遣し、理吉へも小生よ

明治二九年五月

り手紙を遣し、同家へ参り叔母より猶事情を聞き、事情によりて后来全く悔改る様であるなら、としより小生へ願て金を遣すとか何とか致方宜敷からんと被存候、御勘考被下度候、是も一治療せねばならぬ事に候」云々

二十二日　雨天

朝程ワイコフ氏より来月分のサラリー受取る序に油代二十銭も払ふ、宮川氏は八時二十五分の汽車にて品川発桐生へ行く、自分雨を冒して送る、蓋し彼も又見掛けによらぬ有情家なり、午后榎本へ行き、血石除去並に修歯を為し治療費十銭と義歯料六円を払ふ、

二十三日　晴天

朝程曇りたれど上りぬ、今朝飯島氏へ往復はがきにて旅費の事問合す、午后波多野より関谷に到り波多野の衆は歌舞伎座に行かれ留守、余借用金の事に就き承五郎氏に書置き、関谷に泊る、今午后一時はがきを出し置きたりし故理吉来訪さる、是より少刻前叔母よりも理吉の様子を聞き居たれは如何処置せんものと思案最中早くも八時頃彼は来りぬ、彼の入来后一時間余は余も何とて語り出でず只普通の挨拶に言あしらひ居りしも、時移る故序にと彼が身上に及びぬ、彼の白状には此の春主人留守に乗し先輩番頭某と共に〇〇に遊び、其遺跡として某に二円七十銭の借財と自分の夜服数点を一円七十銭にて質入せり、されど今は悔改したり、依て主借財返済及質物返戻の為め金子無心に及ぶなりと、余は国本〔国元〕にても時下送に相計はぬ由なれど自分も困る由に告げ、結局壱円当座にて呉れ、質物の中半分を受出さす、而して彼の申出には只今皆悉く受出し置かば、彼の事件も主人に明らざれば大事に至らで事済むべしと、余は之に全く反対に申聞せ、結局第

一、ありし事共今主夫婦在京の折柄一部不残皆うち明し、第二に質入の衣服を受出し、第三に某の借財を払ふ手筈を為すべしと注意し、彼も此義納得の上午后十一時四十分頃去らる、波多野へ行く前河合氏へ寄りしに、氏は大会伝道局の命により台湾へ渡行の積にて来月早々出発の予定なりと

二十四日　晴天　安息日

昨夜一時頃着床し、今朝七時起床、赤坂教会に行く、集るもの二十三人、午后榎本へ行き除血石と入歯を見て貰ひ含嗽薬を取り十銭払ふ、三時波多野へ行くに衆皆な三田慶応義塾へ運動会に行て不在、串戸氏に氏の朋友の電信学校(29—104)へ入学せしものゝ紹介状を依頼するの書付を置て去り、一寸河合氏へより里見へ来り、路にて求めしパんを夕飯の弁当にして食ひ、九時頃帰校す、関谷にては老母事樋口氏を温泉に案内して帰国（十五日頃）せりといふ、

二十五日　雨天

本日午后三時より石原氏方に教役者祈祷会並に松永（渡米）・河合（台湾行）両氏の送別会あり、其途次河合氏来校、氏ノ後任として余に赤阪(赤坂)に止まらん事を促す、余敢て進みも辞退もせずミシヨンの指図に従ふ、要は只信州松本と比較上必用の急切なる方に行んとせり、今日郡山・国ノ父・母・飯島の諸氏より来状、父及母より余の歯及夏着の事心配し来る、又特に理吉の為に

二十六日　晴天

午后榎本へ行き血石除去及含嗽薬をもらひ来る、入歯の少し弛みたるは肉の縮まりたる為にて、不日愈よ堅まりたる時ゴムを増附する由、河合氏へ行き暫時談合、時に脳の具合宜しからず、当

夏季を東京にて暮さん事の実に困難なるを思ふ、波多野へ行き真佐樹氏にも乞ひ電信学校の生徒の紹介状を貰ひ、当家より金拾円借用して八時頃去る、帰路河合氏へ寄る、田中・新島の両氏在り、将に小会を開かんとせり、余即ち列して共に計り語り、河合氏の台湾渡行の留守は同氏休職として受入、其后任者は大会伝道局へ周旋の労を依頼することなり、余田中氏へ依り氏の起草の書面にて去る、蓋諸氏余に止らん事を促す、余自身の便宜にて松本行を望み止京を辞す、帰校せしは十二時過なりき

二十七日　晴天

今朝石原氏より聞くに矢島氏は越后新潟へ行く事にせりと、余則ち郷里の矢島氏へ一報す、

二十八日　晴天

午前柴山氏を訪ひ時余話す、午后榎本へ行き薬のみ貰ひ来る、蓋し昨今口中より脳にかけ具合事〔殊〕の外悪ければ治術は見合せたり、今日一昨日の分とも二十五銭払ふ、矢島君へ自分事東京城留守居を知す、河合氏・田中氏へ寄り田中氏に合〔会〕ひ自分二ヶ月も松本へ行く事にでもすべき乎と話して去る、

二十九日　晴天

〔欄外〕「青木まさ子／金子民三郎」

午后赤坂新町の野津氏方岩井氏の寓に居る沢辺氏を訪ひ、串戸氏の紹介状を以て会はんとせしも不在なりき、四ッ谷に至り青木すみ子を訪問し、すみ子尚佐倉より帰京せず、其の娘まさ子に遭ひ種々柴山氏の事談合せしに、すみ子姉佐倉の親妻多用にてよく考ふるの段もなく、又平川町の

島田氏実際動き呉るにや否や不判明故今一応よく御聞き申て父母帰京せねばわからぬとの事にて、余は事面倒故断全〔断然〕柴山氏の留京を受容れ談合取消して去る、青木まさ子姉とは初会なり、姉は才三十五六、未婚の婦人、諸所に学校を教へたる事あり、此一月までフレンド女学校(29—105)にありしも非戦論事件にて意当校の外人と会ずして去りしといふ、霧雨を犯して関谷に至り夕飯馳走、八時少し前去り赤坂河合氏へ寄り宿泊す、今日青木氏方にて杉田氏事金子民三郎氏に初て会す、宮川・郡山へはがき出す、

三十日　晴天

学院に於ては今日午后四時より卒業生及該校と親密なる関係者を集め晩餐の馳走あり、総理は学校の方針に付き諸氏に計る所ありしに(29—106)、何れもミシヨンスクールの本色を維持し行くこそ得策なりとの説満場一致の如し

三十一日　晴天　安息日

〔欄外〕「小川正氏受洗」

午前礼拝式に十九人集り、小川正氏マコーレー氏より受洗、河合氏台湾行の事を話す、后総会を開かんとせしも人残らざれば流会とす、夜分十二三人集り余軽恙を冒して説教す（宗教の必要）、去て新島氏と河合氏の寓に行き話す、河合氏十時頃帰て、井田氏河合氏の台湾行に関し其の席次、挙動に就て大に不服を唱へ、既に退会届を田中氏まで出されたりといふ、

六月

一日　晴天

午前井田道寿氏を山内九山下の寓に訪ふ、談河合氏の台湾行及び次で教会の事に亘る、是より前昨夜河合氏の話に井田氏は田中氏へ向け退会届を出されたりと、余之を今日井田氏に其の理由とする所を訪ひしに、当日本基督教会の施政意を得ざる事は其の重〔主〕なる源因〔原因〕にして、又赤坂教会は遠方なれば小供等の往復に不便、さりとて芝教会へ移るも変なり、故に一層退会せんとす、但し此の教を止るに非ず（あるいは他に行くやも不知と）、右の外に教会の不振に堪へかねて自退して敢て係するなきの気楽を計らんとする念慮なきにも非ざるが如し、とにかく余は退会は勿論教会転会も暫く思留まらん事を促し去る、河合氏二本榎元町〔本町〕十三番地石本氏の前の家に移転す、余歯の為め含嗽薬を小川氏より三包の粉にして求む、

二日　晴天

午后河合氏へ行き直く用足を為し、其内に約の如く新島君来り里見・鈴木・若林・石本婦人等会し、十一時過に到り送別の祈会を開会、十二時過去り帰校、着床せしは一時なりき、新島氏泊る、今宵十五銭程餅菓子を取り祈会の了りに開く、自分又河合氏の為に「キナエン」(29—107)二拾銭を遣す、河野氏へはかき出す、

三日　晴天

〔欄外〕「河合亀輔氏台湾へ行く(29—108)／赤坂教会求道者」

四時半起床、河合氏の六時半品川発を送る、氏は明后五日の便船にて渡台の途に就かるゝなり、

河合氏より赤坂教会に属する求道者を聞き置く、左の如し、

大島善四郎　　山田〔　　〕
福田松五郎　　丹后町安藤邸の裏　　大野正弘
同よね　　田中正
一ツ木八番地　　西尾三郎　　梶梅太郎氏の下女　　石渡さく
牧長三（ヲサミツ）

四日　晴天
昨日小川氏（老人）より葡萄酒の天然製を取り養生の為め昨夜より使用す、今宵銀座にて神の自啓（29—109）及女子教育（29—110）（成瀬氏（29—111）著）を買ふ、

五日　晴天
午后河合氏の為に明治生命保険会社に行き彼の保険約証を為し、五月五日より六月五日までの保険料二円五十三銭を払ひ来る（但し、千円取りの保険なり、又河合氏の二十九年に四年増の割合にて）、夜分祈祷会に先じ谷町の百合園を訪ふ、車屋の二階四畳間三間は其間に荒壁の境界あり、天井は直に屋根にして然も背低なる生も頭頂を屋根に圧せらるゝばかり、此日頃は氷川神社の祭礼にて男子は主て人十五六名、女子は十名ばかりありき、祈会は生と新島氏のみ、

六日　晴天

七日　晴天　安息日

〔欄外〕「赤坂教会婦人祈祷会」

明治二九年六月

午前九時出堂、徳田姉既に小児を教へつゝあり、其内に新島氏来り、十時より礼拝式を開き余之が任に当る、蓋し秋葉都合悪くして来られざればなり、余は「基督の試誘」に就て語る、日曜学校に十五人、礼拝式に二十人ばかり集りき、今日総会を開かんとせしも、昨日河合氏大坂より教職辞職の願書来り、尚一応小会の協義〔協議〕もあり旁々総会の定則に従はん為に、来る二十日の日曜まで延期す、夜分は秋葉氏来り、約三〔約翰〕の十六に就て話する、来衆十一人、今日午后梶氏方にて婦人祈祷会あり、余も列席、徳田姉司会、余も台湾伝道のことに就て所感を延ぶ、会するもの六人、去て丸善にて「ソシアルエボリウシヨン」を求め小石川関谷にて夕飯馳走となり、七時半教会に来る、今日大野正弘氏に面会し置く

八日　雨天

宮川巳作氏より来状、氏は脚気不相変宜敷からずと、

九日　雨天

陶山賦次郎〔賦〕君昨日帰せし由にて今日秋葉氏にて面会す、氏は米国プリンストン神学部に於て重〔主〕に比較宗教学及び聖書神学を研究せられたりといふ、成瀬氏の女子教育を読了て大に思ふ、

十日　晴天

〔欄外〕「近藤虎馬君上京す」

午前和田氏に頼まんとて国元鈴木二郎氏・若林・里見叔母、又、二妹等に手紙を書く、午后歯科医榎本に至り義歯の修膳〔修繕〕を為さしむ、近藤虎馬氏本郷森川町一番地須田氏へ来れりとの報来る、蓋し氏は今月一杯滞京の積なりと、午后秋葉氏へ行き谷口直吉氏に会す、氏は不日渡米すと、

河合氏は大坂にて大なる同情を受けつゝありと、又出帆は来る十五日となりし由、

十一日　晴天

十二日　晴天

午后歯科医榎本へ行き義歯の修膳〔修繕〕せるを貰ひ来る、落付悪しければ尚一日試て来るべしと約して去る、小川氏方へ行き紙を貰ひ新島氏へ今宵祈会欠席の旨書置して去る、

十三日　晴天

明日の説教「活ける基督」に就き起稿す、学院ベースボール大会あり、午后は賑かなりき、

十四日　晴天　安息日

〔欄外〕「痔病萌起す」

午前七時半より出校、八時半着堂、既に新島氏小児に説話最中、聞く目下は八時より日曜学校開会し居ると、集るもの十五六名、十時より礼拝式開会、余「活ける基督」を話す、会するもの十三人、是より前教会へ近く事一丁ばかりにして痔瘤出で辛して着堂、説教最中尚治まらず、軈て帰校せんと歩き出すやまた得歩けず、三河台より乗車（十銭）十二時半帰校、食后秋葉氏へ行き今宵の説教を頼まんとせしに氏も不例なりと帰る、銓方尽て里見君に頼む、彼れ直に応せらる、痔には湯こそよけれと聞き入湯、其途次柴山氏を見舞ふ、主人未帰妻君桂子と相語り三十分邪魔して去る、純吉氏は哥林多前十三の愛の話を為したりと、会するもの十人、内に塚本姉とて赤十字社の看護婦にして元当教会に属せしもの来り話したりといふ、余乗車して尚苦痛を感じ閉口したり、

明治二九年六月

十五日　晴天

〔欄外〕「東奥大海嘯(29—14)」

疾勢変化なし、午后秋葉姉に妙薬霊術以て治むべき方法なきやと問ふ、夕方今□してパップを送らる、直に試む、この日東奥大海嘯起る、

十六日　晴天

〔欄外〕「辞職御届、私儀今般之理由のあるありて辞任仕り度由、此為御届及び候也、第一、今は市内伝道運働(運動)用意の柄にて此際主任者を欠きおること赤阪(赤坂)教会の為めならずと考られ候、第二、小生の健康上台湾の気候に堪られ又主が小生をして台湾伝道に従事することを許し与へ候はじ、小生は永く台湾に従事する覚悟に御座候、十二月まで教会が小生を御待ち被下候ても其折果して教会に止るや否やまだ確定致さぬ事に候、自己に確定致さぬことによりて此好時職を受任者なく御待被下候事を求むるは小生の出来難きことに候、第三、此外にも此度兎も角も職を辞するは教会の為めならむと思われ候事も感られ候、河合亀助(ママ)㊞、赤阪(赤坂)教会御中」

昨夜は蚊に攻められ殆んど落々睡まず、疾勢少しも不変、パップ一日試も其功なし、矢島と北島氏へはがき出す、今日より夕の牛乳一合を増す、

十七日　晴天

今日加字木(加治木)氏を招き応診、膏薬を呉れたり、秋葉氏見舞に来る

十八日　晴天

午前新島氏来訪間もなく去らる、氏も目下卒業論文起稿最中、野口氏の葬式を周旋さるゝ事とて

気の毒千万なり、長山氏へ仏教管見[29—115]を郵送す、自分、白石小滝・奥平敏・宮川巳作[29—116]、村松米太郎等の諸氏へ手紙を認む、近藤氏は大学撰科薬剤科入学試験受験の為上京、目下合戦最中なりと申来れり、

十九日　晴天

長山氏より来状、大に快愉らしき文面なりき、紅葉館に明治女学校[29—117]の為の慈善市あり、学校の連中行く、

二十日　雨天

午前柴山君来談、里見もおり柴山氏菓子を驕らる、本日野口氏の葬式あるべき筈、新島氏の多忙思やる、去る十一日長山君より送られたる消息に左の如く申越れき、

…当教会は委しく御案内の方なれば別に一報申上ることも無之候も、近来は白石兄と昨年の九月より来られしフインチ[29—118]と申洋婦人及女書生の数人か伝道を扶助せられ候に由り、教会の朝夕の集会も格別に賑かになり、又フインチ嬢の熱心誠実信切（親切）なることに小生等は大に鼓舞奨励せられ候、フインチ嬢ども当地に居られさる様に相成り候ハヾ、実に寂寞に堪さることに候半とも存申候、小生は実にフインチ嬢にラブ致し居り候、彼の花や玉の如き二十六才の妙齢の婦人にして、加之信切（親切）誠実なる御方に有之候により、一度言葉をかけられ候ときには小生の魂も飛び出しさうに御座候、同嬢の家には一週には三回は必ず参り申候、彼の女を見んが為に用事もなきことなれど故いに事故を作りて参りし事も度々有之候、然るに彼の女は丁寧に小生の如きものを待遇し、度々翁飴や翁羊羹などの御馳走を被致候に由り、尚ほ

明治二九年六月

明治二九年六月

〳〵可愛に相成申候、過日は又殊別〔特別カ〕に晩餐の御馳走に相成り申候、同夜は種々の雑談や遊戯などの〔ママ〕致して十一時に帰り申候、又度々二人にて近郊を散歩致し申候、其の楽しさ何んとも言はん方なく候、天女に引かれて参るか如き心地も被致候、彼と彼の家族と小生との間には面白きこと、又秘密なることも有之候も、之は泄らす可き限りに無之候に由り、以上の簡短〔簡単〕なる通信により天眼通を以て御推料〔推量〕の程奉願上候云々、

氏が恋愛の花、今やまさに咲かんとす、夜具の洗濯を頼みたる女蕪木なかなるもの夜具を持来り襟取代たればとて三拾五銭取らる、説法して去らす、今日里見純吉君長々と横臥種々胸襟を開て互に相語り合ふ、話柄は伝道に関する事、個人的処世法、社交等の事なりしに、純吉氏もなか〳〵諸事に就ても一見識を□かるゝこそ甲斐〳〵しけれ、彼が主義は謂ゆる精神的なり、殊に伝道に就て然りと、又彼は伝道上にあるいは教育上に於ても、家庭の事を大に注意するものゝ如し、是れ余の宿説、彼は云へり、西国の人は一風我々とは異なれり、彼等は伝道も政略的・計画的になすものゝ如し、余は寧ろ事業的・精神的になさんとす、故に其方法は講壇上より花々しく絶叫せむ事を重〔主〕に勤むるより訪問・交際等を為し、重〔主〕には面談・面接して無覚の中に人を感化するの勝るを思ふと、要するに彼が主義たる実に余が宿説と符合すること妙なり、彼は読書家よりも事業家なり、換言せば書籍に得たる真理を縦横に応用話使するの人なり、今日、国元親父へ病気沙汰申遣す

二十一日　晴天　安息日

今日教会は礼拝式に北郷氏を頼みたれば行れしならん、又総会もありし筈なれど如何せしやら

ん、午后加治木氏来訪、幾分か快方なりと申さる、尚内用薬を呉れる由、芳郎氏して取に遣す、午后河合婦人・石原婦人等見舞呉るゝ、河合姉・奥平敏子を藤村太平氏の令息某へ縁談周旋を試みむとて番地を尋ね来る

二十二日　晴天

午前渡辺六郎氏来訪、氏は不日郷里下野国那須郡黒羽町渡辺豊綱氏方へ帰省する筈なりと（一時）、豊綱氏は氏の実父にて、其令室は渡辺氏の異母にして其の異母の子女四五人あり、渡辺氏は其の異母兄弟の中の一人にて兄姉二人づゝ位ありといふ、是により大関姉の兄の有様知らる、而して大関姉は名義上実娘信子を一人引取て別れしものゝ如し、今日朝夕と灸を両足三里へ一ヶ所づゝ焼く、夜分通じあり行く、可なり固くとぎれて出ず、後の心地大に悪しく且つ薬を付て寝しに夜中今迄になき痛快を感ず、今宵日暮方蕪木なか来り、過日の礼の為にやびわ二房以て見舞に来る、余又説くに教話を以てす、彼女又一時間余り在て去らる、有会の讃美歌を遣す、純吉氏に托して里見叔父及父へ同封にて一書、長山・長谷川へはがき二本及長山へ秋葉氏より借たる世界三大宗教[29—19]を郵便にて送る、徒然の余り読史余論[29—20]を読む、白石も又論客なり、殊に称すべきは其文の平なるにあり、千磐武雄氏小用ありとて上京、来院暫く話す

二十三日　雨天

〔欄外〕「灸を焼て痔瘤治まる」

痔瘤の腫れ大に減ぜり、今朝父より来書、痔瘤にはひるを付ければ妙なり云々と、金沢の村松君より来状、曰く彼の地の教状に大なる変更あり、官民傾聴の有様在にて過日フルベッキ氏来沢、

数夜演説会を開きしに毎夜五百名余集り未曾有の盛会なりし由、夜分に及び痔瘤殆んど平ぐ、即ち床上に奥座す、扨て此の回復の事たる其の元因〔原因〕昨朝夕の灸の功には非りしや、昨夜灸を焼て便所に行きしは十時、便堅〔固〕くして切〳〵に出づ、床に着くも尚痛み殆んどヲールスルウザナイト痛む、明方余り痛む故、膏薬を取らむとせしに思いきや瘤殆んど無きが如し、余私に忻ぶ、軈て夜明け起きしは五時半、見るに瘤七部〔分〕方滅少せりそれより朝また灸し膏薬を附し一日着床、而して夜に入るの頃は殆んど平ぐに至る、余は之を灸の効能に帰するを辞せさるなり、是れ余が実験なり、今日午后芳郎氏を頼て加治木より内用薬取寄す、夜分ラムネを驕る、消化器を助けん積りなり、

二十四日　晴天

堪へかねて小使して金子より蚊屋〔蚊帳〕一張一人前なるを借る、蓋し一晩一銭五厘なり、午后入浴す、

二十五日　晴天

〔欄外〕「川島源三郎氏の渡米」

川島源三郎氏は兼て渡米を企て田舎にて其手続を願出しに、其筋にて之を受付ず為に横浜の某氏方へ寄留し、同所にて保証人も出来、昨日午后三時とやらに旅行免状下りし由、洋服は石本氏の分を其侭譲り受け、又陶山氏の周旋にて買物なぞ整ひ大に好都合にて十時過秋葉氏方にて余の送別の祈りを以て別る、若林・里見・今関・栗林・長山・南・田島・陶山氏等と品川に送る、荷物の都合あり上等汽車に乗る、マクネヤ氏横浜に行く所にて彼婦人を携へ中等に乗りき、十一時発車、陶山氏学校へ本を借に来り、川田氏又来、余氏に昼飯進め暫く米国の話を送りぬ、正直にし

て健康なる者は米国に渡航の上乗策たるを思ふ、

二十六日　晴天

〔欄外〕「谷口直吉氏の渡米／奥平敏子帰京」

川島氏及谷口氏は今朝八時□縦の汽船にて横浜出発、渡米の途に就かるゝ筈、秋葉・今関の両氏は昨夜横浜へ行きたりし由、手島氏に托して岡本薫姉に不日面談の為機会を問合す、蓋し婦人伝道者承諾請求の談合故なり、近藤氏へはかきにて試験了らば来院を促す、又国へ病阿〔病痾〕快復の報出す、午后マコーレー氏より来七月分の給料金八円受取る、学院セカンドチヤンピヲン連牛込の某仲間とベースベール〔ママ〕マッチを為し、十六に五の差にて十一の勝ちとなりし由、蓋し若林ピッチヤー・森田キャチヤー・富沢フアーストなりし由、奥平敏子本日午后六時半帰校せし由、今江姉先頃負傷したれはウエスト保養せしむるため呼たるなりと、

二十七日　晴天

五時起床、午后聖書学館に奥平姉を訪ふ、久しぶりの面会なりしもあまり談柄ふです、大普通の挨拶にして二十分談話し去る、其時兄君より福音新報の通信と大会伝道局への寄附金を依嘱されぬ、姉も大にふけたり、併し未だ乙女の容あり、老ほれ婦人とは其比に非ず、

二十八日　晴天

八時十分教会に到り十時より青山学院の菅又熊之助氏[29-121]の説教あり、余司会せり、礼拝式に十八人、日曜学校に十五名程集りき、昼飯に帰校、午后七時より出堂、八時より説教「人の重〔主〕なる目的」を話す、会するもの八九人、閉会后小石川関谷を起し宿泊、着床せしは十一時過なりき

二十九日　雨天

〔欄外〕「聖書学館卒業式」

午前八時頃本郷森川町一番地須田方止宿の近藤虎馬氏を訪ふ、在り、大学試験も無事合格となりし由語らる、菓子馳走、積もる談合凡十二時まで話し、昼飯馳走、午后同出、生は相通し上山□にて白地一反（八十七銭）とキャラコのシャツ地五尺（三十一銭）を求め、近藤氏の区役所に在るを待ち、共に牛込停車場に来りしは二時頃にて三時乗車、新橋にて半時待ち乗替へ四時半目黒へ着、彼是五時頃着校す、夕後は暫時休息、其内に柴山氏来り三人にて聖書学館の卒業式に行く、教会の大頭連も多く見受たり、植村氏も在りき、卒業生は、森田・和知・酒井・遠藤・鈴木の諸姉なりき、説教には和田氏愛の事（ヨハネ伝最后の章のキリストを愛する乎てふ日）及タムソン氏のエルサレム実見談[29-122]等ありき、秋葉氏司会たりしが最后に曰く昨今は東奥海嘯沙汰にて人心焦愁する際故茶菓は一切見合せたり云々と、或は可ならむ、秋葉氏より聞くに今日午后井深氏宅に同志会の集会[29-123]あり、重なる議談は来年の大会開会の頃には日本基督教会健設（建設）二十五年祝を執行し、又其の紀念物として一万余円の会館設立の件をも植村・井深の諸氏に依て発議され、中には余りのらぬ輩もありし由、人は感心し時節柄管らぬ事を計企むものもあればあるものよ、聖書学館より帰路近藤氏と一寸秋葉へ依（寄）り直に帰る、其の帰路河合夫人の病み居るを見る友人ありとて后訪を石本姉に告て去る、

三十日　雨天

九時頃近藤氏を品川まで送る、帰路河合夫人の病を見舞ふ、姉懐妊して四ヶ月目なり、謂ゆる

「つわり」ならむ、田島・南の両氏千葉へ出発せり、今宵秋葉氏へ招かれ夕飯馳走となる、同呼者には里見・若林・小野もの両氏在りき、

七月

一日　晴天

午后波多野・関谷へ行く、波多野にては老母とみね子逗子へ老人会の為朝より出掛けられし由、門内にて午后姉に会す、姉はヲルガン教授の為たりき、聞く薫子は脚気なりと、関谷へ行き掛飯田町にて□ジヤ□（五拾銭）を求めたり、関谷にて夕飯馳走、六時去り波多野へ来り、承五郎氏将晩餐に及ばんとする時にも〔ママ〕、余も西洋料理フラヒ馳走となり勧により宿泊す、今宵宗教談及文学談あり、承五郎氏得意の気焔を吐れたり、蓋し氏は自然神教の如き信□〔仰カ〕家にして、しかも楽天家を以て気取る、在野人の謂ゆる心広く体裕なる事こそ願はしけれ云々、文学の粋は八面麗路〔玲瓏〕玉の如きこそよけれ、極端なる感情を奮起して一時の好気〔好奇〕心を促すは文学の欠点なり云々

二日　晴天

〔欄外〕「高田さく子小快」

承五郎氏今朝も宗教談あり、彼は信仰と徳行を別事として今の教会にて信仰を奨励するも道徳を解き実地の奨励を怠るは如何はしき事なり、家人の徳行不活なる実に受洗の功能何処にあるかを疑ふと、其後九時半頃出社、余は十時頃去り富永徳慰氏の下宿を尋ね茶し渡辺氏の事に就き話す、氏には初会なり、再び波多野へ行き飯を馳走となり是より前菅子に聞き高田さく子病阿〔病痾〕にて

見舞呉れゝは難有と聞き、十二時過銀座に行く、おさく姉を見舞て四時過去る、

三日　雨天

午後雨を冒して青山に下宿を尋ね、数時間迷ひ漸く明りしも宿狭にして陋、迚も堪へらるべきに非と思ひ見合せ、信濃町停車場より牛込まで汽車に投じ女子学院に行きしは六時頃なりき、同院にて岡本姉を訪ひ、赤坂教会日曜学校受持呉るゝや否やを申せしに、姉は軽井沢へ行くとかの事にて辞さる、姉は尚ほ在京の方にて適当なる人あるや否やを尋ね置かん云々と申さる、姉脚気を煩ひつゝあり、余見舞として高田の飴を遣す、同院を辞しそばやに入り盛二杯・掛二杯を喫す、但し離れへ通り八銭取らる、一寸波多野へ行き七時半教会祈会に行き再び波多野へ泊す、蓋し同家不人故なり、祈会には余及田中・小川・山崎姉の四人なりき、

四日　雨天

〔欄外〕「里見純吉名古屋に趣〔赴〕く」

里見純吉五時発の汽車にて名古屋へ出立の事故四時に起むと心組み、明方眼を醒すに三時なり、尚一時間睡まむと遂に四時半に起く、新橋まで半時間にて行む事到底能ふべきに非ず、即ち平然帰校す、里見横浜より奥平氏の令嬢を携れ行く筈、互に知ざる人、令嬢の眼一盲なるを相図〔合図〕とする積なりと、学院賄今日限にて罷む、

五日　晴天　安息日

〔欄外〕「赤坂教会婦人会」

八時半より日曜学校開会、重〔主〕に百合園生徒集る、十五人、十時より秋葉氏説教せらる（神の声－

約翰十の四)、午后二時より梶氏方にて例の通り婦人祈祷会開会、余司会となり「家庭と基督教」及び「信仰の旅路」に就て勤む、会するもの九人、大須賀・志佐・大島・高井の諸姉も見へき、午后七時頃一寸波多野へ行き直に去り、八時より説教開会「基督教の中心」を話す、会するもの十人、東北海嘯義捐の為十銭投ず、

六日　雨天

秋葉氏にて朝飯馳走、十時より波多野へ行き午飯馳走、おはさん(おば)高田氏へ行き不在、菅子に余夏中同家の奥座敷へ置かれ度旨申述べ家人と相談されむ事を願ふ、三時頃去て関谷に到り夕飯馳走、兼て頼み置きし夏もゝひきと白地の単衣を貰ひ来る、名古屋なる山内益太郎氏へ里見を招介(紹介)す、蓋し山内氏は去月三井名古屋製糸所へ入られしなり、関谷より帰て波多野へ泊る、

七日　雨天

九時頃波多野を去り赤坂田町一丁目十一番地の松田氏方に渡辺兄よほ子を訪問し暫く話し去る、それより六本木に行き里見にて午飯馳走暫く話し帰校、秋葉へ行き夕飯馳走、奥平姉に会す、富山市に洪水起れり(29—124)と通信来れり、奥平姉は秋葉氏に伝道者老化の準備なかるべからずと説かれ、やれ小学校教師たる検定試験を受くべきか、他に何か仕事を覚へ置くべき乎なぞ種々物語り居られき、尚姉は縁談今ありても余程技量ある者ならでは行かぬ由、秋葉婦夫曰く奥平姉は余り所望高し云々

八日　曇天

〔欄外〕「波多野氏方へ移転す」

明治二九年七月

朝飯秋葉にて馳走、午后三時過ぎ愈々番丁〔町〕波多野へ引移る、亀外一人にて二丁車を頼み（三十銭）四時半頃波多野へ来着

九日　曇天

午前読書に暮す、里見のおばさん入来午后まで話さる、但し当家のおばさん朝程より高田氏へ行き夕帰宅せらる、余午后二時より富永氏を尋ね不在、小倉氏を訪ふ、氏即ち昨日より吐血床に在り、無口を務め姉荃子看病し居り、弘松氏在り其内に川田氏も来られき、二時半去り、平川町の渡辺六郎氏を下宿屋に訪ひ暫く話し去り、小川・飯田・清水・田中の諸氏を訪問して六時過帰宿す、尚小竹氏へも寄りたり、息子を安氏といふ、前日の日曜日に秋葉氏の説教を聞き大に感じたりといふ、此日里見純吉氏よりはかき来る、

十日　晴天

午前は高田へ帰る永野姉に托さんとて長山・清水・近藤・永野の諸氏へ手紙を認む、午后は女子学院へ永野・井口の両姉を訪問し、それより小倉氏を見舞、姉荃子のみに会し去る、銀座高田氏方へおさく様を見舞、聖書朗読（哥林多十二三章）祈祷して去る、時に承五郎氏曽て尚□□にて盗取されたる靴出で赤坂警察署に行き請取る、数寄屋町より警察まで五銭、警察より番丁〔町〕まて五銭、代書に三通四校で八銭取らる、夜分祈祷会に後れ新島・田中両氏に会し、其足にて田中氏に話し十時過去る、

十一日　雲天〔ママ〕

〔欄外〕「泉岳寺墓地に迷ふ／河合亀輔氏台湾に安着」

午后梶・大須賀・小川・中島の諸家を巡訪す、中島氏にてはまつ子永らく病床にありしも此頃は大に快方にて、今日近傍へ運動旁〳〵出掛たりと、姉の母君も此五日前より床にあり、今日ぶら〳〵し居らる、陶山氏明日の説教相出来かねる由午后報知あり、余は今宵井深氏許問ひ請求したるに差遣〔支〕へありて断らる、時は十時少し前なりき、余は近途を取り仙岳寺〔泉岳寺〕の裏より大壇林の門へ出むと墓場の中頃に来りしに、暗夜なる上に樹木鬱蒼と茂り寸前を別たず、あるいは大杉に突当り、あるは墓石の角にて眉を衝ち、度々戻りては進み進みては戻り三度試みるも遂に正路を尋ねかね、先方薮影木の間に透ける寺燈の光線を見つゝ得行き得さりしは残念、遂に再び仙岳寺〔泉岳寺〕門を出で高輪通りより西方に登り二本榎に出づ、秋葉に止れば皆着床、秋葉□□眠入居と、即ち泊す、秋葉氏に明日の説教を頼むも容れず、河合亀輔氏は先月二十八日無事台湾基隆へ着せりといふ、

十二日　雨天　安息日

五時半起床、七時秋葉氏を去り学校、河合氏へ寄り赤坂教会へ九時着、秋葉氏説教をなさる、即ち基督教道徳（馬太伝五章四十八節）、日曜学校九人、礼拝式に二十六人、今日は梶婦人ヲルガンを曳〔弾〕かる、当教会にて集めたる罹災救助義捐金は今日までに四円五拾銭集る、本日は他教会の人多く見ゆ、時計の進みたるに心を緩せしと道路悪しきにより教堂着遅刻す、即ち田中太郎氏余に更て説教せらる、会するもの十四人、兼て岡本姉に教会日曜学校受持呉る、姉妹周旋方頼み置しか何分無之旨返事来る、

十三日　晴天

午前奥平姉の軽井沢にあるにはがき出す、午后三田へ為替を取に行きしに此の一日より朝八時より十二時限なりとて不受取、即ち陶山氏へ寄り秋葉姉及せい子在り、共に二本榎へ行き一寸話し去る、痲気の気味乎空腹の勢か腹痛頻にして得歩けず、則ち魚覧（魚籃）坂下より鳥井（鳥居）坂まて乗車、市兵衛町より番町まで六時（ママ）にて乗車、其途中車上にて菓子パンを喫す、知人フルベツキ・山□の両氏に会す、具合少々不宜、背に腹は替へられむ、

十四日　晴天

昨日より今日に掛け華族学校[29-125]に入学試験あり、峰子昨日は婆御と行きしが今日は余に東道し呉れとの事にて携れ行く、八時より十一時まで掛りぬ、今日の試験は理科・作文・算術・画等なり、昨日は地理・読書・裁縫・書取・習字等ありし由、

十五日　晴天

午后夕立頻に下る、高田様より小松氏入院せる故、病院へ生なり亀右エ門なりに行て呉れと頼み来る、余即ち東京病院に行く、小松貞雄氏は奥の二階の一間に中野氏の看護を受つゝあり、聞く脚気昂進して其の症不宜、二三日の所危険なりと、余は三田に行き桜井氏よりの為替金五円受取り、余それより馬車に乗り京橋の高田氏へ行く、十一時頃なりき、病人の模様一寸話し、今日一日同家に滞在の談合なし、おさく様の枕辺に侍く、四時頃波多野より三人人来、彼等は八時頃雨を冒して帰宅、余は高田氏方へ泊る、

十六日　晴天

八時頃築地へアレキサンドル氏を問ふに氏は一両日前既に箱根の方へ避暑に行きたりと、それより日本橋区通り壱丁目壱番地近江屋といふ畳表屋へ行き琉球表十枚二円八拾〔ママ〕なるを買ひ上総へ送らす、峰子試験合格にて中等科三年級へ入学せらる、午后一寸波多野へ来り小憩、再び高田氏方へ行き今宵も一泊す、小松氏不宜、氏の厳君上京せり、

十七日　晴天

〔欄外〕「小松貞雄氏死去」

午前七時小松貞雄氏絶命の報あり、高田氏早速行かる、氏帰て告て曰く小松氏も絶命に先つ十分頃枕辺の者に向て「皆様（さん）サヤウナラ」と言れたりとぞ、氏は高知県人にて今年十九才、躯体肥大、性状温厚、人の愛顧を受る不浅、一朝脚気に襲れ他界の人となる悲哉、希くは神彼を祝し玉へ、午前十一時過和田に托して去る、

十八日　晴天

〔欄外〕「高田教会の受洗者／華族女学校卒業式」

昨夜八時より金曜祈会開会、余司会、説話ヨハネの誤信に就て勤む、会するもの六人、長山君より来状、長々と認め来る、去る十二日の日曜日にはマクネヤ氏行き野口・寺田・染葉・南様の令息の諸兄姉受洗せりといふ、矢島君へはかき出す、又里見と国父へも一葉づゝ認む、華族女学校卒業式あり、家婆行く、余も一枚切〔切符〕附余まれりしとて貰ひ参観す、満員にて式場に入るを得ず廊下に佇立す、皇后陛下講壇の真中に安座さるゝも単に洋装のアウトラインを拝するのみにて、御

姿を拝すること能はざりき、明治二十九年七月華族女学校生徒卒業証書授与式次第、一、午前九時三十分皇后陛下御臨校（此時奏楽）、諸人門内に奉迎、次御休憩、校長細川[29-126]第十一学年生徒成績表を奉献せり、一、午前十時生徒式場着席、次参観人式場着席、次来賓式場着席、次皇后陛下式場臨御（此時奏楽）、生徒唱歌（皇后御製歌）、次校長全科卒業生に証書授与及各級卒業証書授与（総代）（此間奏楽）、次校長式辞（校員生徒起立）、卒業生総代謝辞（卒業生徒起立）、次生徒箏・洋琴・唱歌、次皇后陛下入御（此時奏楽）、次来賓復席、次参観人退場、次生徒退場、次皇后陛下還御（諸人門内に奉送、此時奏楽）、次来賓食堂着席、全科卒業生姓[ママ]、星野つる・井上若菜・相良貞・土方玉・辻村たへ・古荘清・三島鶴・森乙女、別科卒業生、田島秀・秋月順の諸姉なり、因に記す、参観人への馳走は乾菓子のせんべいと氷の塊を一皿に盛られたるを随意に採り食ふにありき、会衆は生徒・参観人・来賓共に無慮三百人位と覚へたり、因に記す、卒業生及生徒何れも粗服にて確しか振袖なぞ見へざりしが如し、

十九日　晴天

寒暖計八十五度、暑威甚しきも風あり凌ぐ、夕立盛に降りき、日曜学校（小児）十人、礼拝式十三人、説教は自分「基督の感化」を話す、夜分は、「基督教の最大奇跡」を話す、会するもの七人、午后高田氏・里見氏来り囲碁せり、里見泊る、奥平姉より来状、不恙の由、山暮しの快き由、高田氏おさく様を逗子へつれて行れよと頼む、家人之を辞さむとし暫く談合ありき

二十日　雨天

〔欄外〕「慈善事業の危機／誕生」

昨日風強きが上に雨加わり不穏、さながら八九月二百十日の危日とでも謂わむかの如き気ともなり、家娘峰子茶の湯の試みあり客となる、蓋半月程前より稽古せるなりと、今月発兌の婦人新報[29-127]に東北海嘯救恤奨励の記事中左の文言あり、世間の人のよくいふ事柄なれど矯風会間に人の徳義心を支配せんとする彼の人々が言葉としては、いと〳〵不感服極[ママ]またる文句あり、

……慈善の事業といふものは婦人の心掛けによること多し、家に人を救ふべき余資の存すると存せざるとは男子よりも寧ろ婦人の責任に帰すべき事多し、此度の事も平生奢侈なれば救恤も不如意なること共多かるべし、我等が平生倹約を論ずるは此辺のことを思へばなり、兎に角[ママ]く今は一刻も猶予すべきにあらねば節し得らるゝだけの費用を節し、此人々の救助に尽力せられ度し、(以上は可なり宜しく心掛くべし)、我会員の中には不用に属したる古着、或は小切等を集めて衣服を調製し、彼地に送るの挙ありといへり、誠に時にとりての良案と申すべし、志ある者は必ず手段あり、云々……(消極的の慈善事業とやいはむ、寧ろなさざるに不如)

又同新報に「古着会社の事」てふ記事あり、曰く、

西洋には貴婦人の仲間の同盟して成れる古着会社と云ものあり、古着をあつめ、之を引ときて新しき衣服となし、廉価にて貧民に売り与ふることなり、我矯風会などにてもかゝる美挙にならゐ[ひ]会員并に有志者たちの着古したる古衣の如き者を集め、真の手数料のみにて貧民に売捌き、品によりては施与することなどしたらむには其効至て多かるべしと思はる、兎に角貧民の衣食の事を念頭より忘れぬが我等の世に対し人に対し大切なる義務なるべけれ、と、

明治二九年七月

又近頃の福音新報[29-128]に芝の聖書学館にても同館生徒諸姉が襦袢・シヤツ・腰巻・蚊帳・手拭の雑品廿八種二百八十二点（何れも古物多きを占む）を集め、之にトラクト数百十枚を挿入し菰包三個にして送れりと、消極的の慈善不可なるに非ず、蓋之を以て慈善の能事了れりとせむは扨〳〵心得ぬ話とやいわむ、斯ては慈善事業も又下落したりと謂わざるべからず、不知、西洋に慈善音楽会や慈善ザバー〔ママ〕・慈善演劇なぞの起りし由来は、思ふに慈善事業衰微の時代に（精心〔ママ〕的）非るなきか、誰かものしりに問はまほしきことにこそ、噫今や慈善事業の危機なる哉、午后家娘みね子の為に渡辺政子を訪ひ、華族学校の月謝一円以上三円以下とあるは波多野なぞにては如何程出すべきやと問合せ、大概一円又一円五拾銭、某家族〔華族カ〕も一円なりと聞き、尚家主に計り一円の謝金を出すことゝし、余は保証書及印鑑届等と共に該校へ届たり、且序に松田トマノ姉の宅を見舞一時間の余話す、渡辺姉は余と入替に授持の産家へ出掛たり、主婦とは重〔主〕に世間話にて教会の事柄に及て切〔　　〕祈祷して去る、息女十七いは東京高等女学校に通学せる由にて、種々勝手向にて立廻り居られたり、主婦は過日より脚気の気味合にて悩み居る由、容子如何にも悄然たるものあり、不日千葉へ転校する由、四時過き退く、蓋し息女まだ斯道に入らず、○今日は余が誕生日にして今より廿三年前の今月今日正后十二時こそ余が出生の時なり、午后八時頃小林格氏来訪九時半まで話さる、氏は明后日頃九十九里へ出発の筈なりと、

二十一日　雨天

〔欄外〕「各地方の洪水沙汰」

午前芝秋葉氏を訪ふ、妻君今朝明方より腹具合悪しき由にて着床され、秋葉氏午食の仕度なぞせ

られたり、午后まで話し河合氏へ寄り学校寄宿舎へ寄り野熊様へ一寸見舞ふ、午后六時半頃番へ帰る、岐阜・群馬・青森・富山・愛知・福井・長野・新潟諸県より洪水沙汰の飛電頻りなり、新聞紙に細なり、

二十二日　晴天

暑気甚だし、午后八十六度、中野武夫氏入来、夜分まで遊び行かる、

二十三日　晴天

〔欄外〕「逗子」

午前六時十五分発の新橋より西行列車に投じ逗子に行く、同勢は隠居・峰子・中野・下女わか及余の五人、……大船にて乗替へ八時過逗子着、停車場より五六丁にして柳屋といふ小飲食店に着、此家今の様に至て小店なれと昔は此辺の門閥家たりしと見ゆ、柳屋の本家六丈二間は高原某の先来の客にて充ち、残り八丈三間は則ち波多野にて借り受る間なりとす、着後休憩暫く先づ持参の荷を解き室内の整理をなし、午后三時余は再び帰京の途に就き六時頃帰宅す、今日の費用左の如し、但し荷物は中等切符ありて無賃なり、

一、金二円七拾二銭　　新橋より逗子汽車賃　中等三枚下等二枚、
一、金二拾四銭　　逗子停車場より柳屋まで人力車三台
一、金五拾銭　　自分逗子より帰京の費用、
〆金三円四拾六銭也

二十四日　晴天

暑気酷だし、午后九十度強、微風だに来らず殆ど困却す、四時起床、承五郎氏は銀行用にて名古屋へ、おさく様は真佐樹氏と逗子へ帰れと六時少し前出発、七時半の汽車に乗れりと、蓋し六時二十分の分は後れしなり、兼て約束したることゝて手島君午后一時半頃入来、不敢取餅菓子・氷等を馳走す、夕飯と入浴后手島氏一端（一旦）帰校（女子学院）、余は七時より赤坂教会祈祷会に行く、会するもの五人、新島氏司会、余が「信仰上心経（神経）作用の注意すべき事」の植村氏の説話を招介（紹介）す、帰路女子学院へ寄り手島氏を誘ひ同泊せしむ、矢島氏より来信無事なりと、今日午前川崎巳之太郎氏(29—129)を牛込の寓宿に訪ひ、明后日の説教を頼まんとせしに生憎市ヶ谷の時間とかち合断らる、小倉鋭喜(29—130)君は昨日白金の自宅へ帰移せし由、今日富永氏より聞く、高田さく子・直ちゃん・女中三人にて今夜十時過入来、少々車にさわり氷にて冷せしも大した事はなかりき

二十五日　晴天

寒暖計九十二度に達す、高田氏診察の為入来、手島君午后八時頃帰校さる、新刊の「世界之日本」(29—131)を求む、かなり宜ろし、代七銭なり、

二十六日　晴天　安息日

日曜学校小児部四人、大人部七人、礼拝式に十八人、余説教す、「偶像礼拝を慎しむべき事」に就て話す、又夜分は新島君話さる、会するもの八人、庄田姉来りヲルガンを曳（弾）かる、蓋し新島氏依頼せしによる、酷暑甚しく流石の巨宅に身の置き所なきが如し、寒暖計九十二度強、秋葉氏のは九十四度なりし由、

二十七日　曇天

午前麹町役所に行き承五郎の所得税の事に就き交渉し尚名古屋の本人に交渉す、三田に行き若林の送りし為替金五拾銭受取り、尚里見へ三円五拾銭為替にて差遣す、秋葉氏へ行き午后まで遊び、学院にて諸氏に会し、熊野氏にくやみ申し六時頃帰る、微雨霏々、然も甚しからず、秋葉氏は明日帰国するなりと、

二十八日　曇天

少雨だになし、余昨夜より風気なり、昨夜は女中りんに葡萄酒を調せしむ、今日終日頭重し、河合氏の為鈴木しほ子の履歴を問はんとて仙台の浅井さく子に渉介（照会）す、

二十九日　晴天

寒暖計八十八度、午后運動の為庭園を掃く、今日河野君へ暑中見舞の手紙認む、風気味にて心気不快、

三十日　晴天

午前田中・牧・小川・松田氏等を訪問す、田中氏役所へ行き不在、母君に遺言するに、此次の日曜日礼拝説教者を周旋し呉るゝ様田中氏に伝言せしむ、牧氏に行く、妻君と小供在り、妻君種々教会の話しなさる、姉は京都洛陽教会（組合）に籍を置けりと、姉は厳君の未信者なるに大に困り居り、且つ小供等の朋友に干渉されて日曜学校に出席せざるを悲み居らる、小川氏にて暫く話し風薬にアンチヘブリン三服貰ひ（一銭五厘）去る、其途次松田姉の跡を訪ふに誰も居ず、門札他人の名あり、遺族は他に移りしものと見ゆ、蓋し松田姉は脚気の為め千葉町に転地療養にとて

去る日曜の夜汽車にて出発せられしなり、今朝渡辺六郎氏を訪ふ、氏は熱閙蒸殺せられんかと思るゝ下宿に在り、徒寝徒食に日を暮し居るものゝ如し、午后一時半頃より小川氏の薬を飲むにたちまちにして汗発総身より流出する事淋漓たり、一時間にして洗身、葡萄酒を喫す、幾分快気せり、今日関谷叔母ふみ子を携て入来、夜八時頃去らる、此日午前飯田氏へ寄り吉田末吉氏に会す、氏は元下谷教会にて入会せしものゝ如し、蓋し明治学院にも折々入来せし事あり、充分教会員としては古老経たるものと見ゆ、帰路島田君を訪ひ小話暫くして去る、今朝は午前五時少し前起床、五時より庭園の掃除に掛り、洗足清身等までに二時間を費しぬ、心気頓に革まる、夕方福音新報紙上山本淑子の就眠始末[29-132]を読み大に感ず、特に同姉の遺物なる「所感録」の中に左の記事あり、以て平生の心掛けの深きを推すべしと（新報五十六号）

二月二十日、「我を産みし真の母は今は早や此世を下に見つゝあるなり」

二月二十二日、「嗚呼、神は婢が弱く又鈍き信仰を憐れみ玉ひ、聖前に近つけて如何なる艱にも喜んで聖旨を成させ給ふべし」

又去春日みまかりし岩本かし子の遺言は左の如し

「終りまで基督のめぐみを暁り居りたる婦人」

仰信〔ママ〕厚きものゝ遺言概ね如斯、余は思ふ、勿論余は未だ死を味ひたるものに非ず、されど其の恐るべく且つ寂寥憂愁之に過るものなけんと信ず、而て此の死の針は早晩自身の頭上に迫るものたる事は明なり、然ば余は如何にして此の死の瞬間を経過すべき、余は幸にして主によりて左の信仰を保有せり、「自分等の先輩＝先逝の親友・愛人＝の彼岩〔彼岸カ〕にて余等を待ちつゝある事、特に主

キリストの喜んで我を迎へ玉ふ事」

三十一日　晴天

所得税の事に就き波多野氏より（名古屋）来信、今朝区役所へ届く、事済む、今朝も五時半起床、直に裏の掃除に一時間余働く、心気為に活く、

八月

一日　晴天

華氏寒暖計八十九度、「文明之弊及其救治」(29—133)を読て大に学ぶ、立論明確、意味深重、特に科学の弊を撃つ所心地善し、読来り読去るに律々鞠すべきの趣味あり、心胸不宜、夜富士見町の薬舗にて重ソウとシセキ散を求め来る

二日　晴天　安息日

〔欄外〕「赤坂婦人祈祷会」

微恙により籠居、教会に出ず、蓋し昨日田中・新島氏へ断信出せり、聞が如んば礼拝説教は美々教会の白鳥君相務められ、会するもの十七八人なりし由、又午后二時よりの例会、赤坂婦人祈祷会は司会者新島氏にして大島・山崎の両姉会されし由、夜分は新島氏説教され十人程集りし由、午前渡辺力雄氏亀右衛門を尋ねて入来、余に友なるの故を以て会釈、数時間に亘る、餅菓子を饗す、氏小石川の兵器製造所に入舎さる、時間に限ありとて十一時頃去らる、今日遠藤秀三郎氏(29—134)の著に係る「教育家としての孔夫子」(29—135)を読で大に学ぶ、孔夫子は宗教の開祖に非ず、又道徳的

法規の起作家にも非ず、彼は自ら「吾は先王の道を述て敢て自ら作り設けず、信じて古を好む」と謂れし如く、孔子以前の法規を祖述実践せむと心掛たるに外ならず、其の必生の目的は身を修め徳を高くし治国の道を講ぜしむるに在りしのみ、換言せば彼は宗教家といはんより寧ろ教育家なりし、否な単に教育家といはむより寧ろ政治家的教育家たりしなり、然も現世的政治家なりし、以て其の世界観・人世観〔人生観カ〕知るべきなり、手島君メリケン姉と会し明日相州へ出達〔出立〕する由、

三日　晴天

午前新島君見舞に来らる、氏に教会にて集たる来年の大会費、第一回分の中九十四銭を渡す、余昨夜シセキ散と重ソウを求め服薬す、其勢か今日は大に快し、おさく様昨朝鎗矢町へ一寸談合の為□行れしが其勢か今日一日具合不宜旨聞及ぶ、二三日此方蝉声頻に聞へ八釜敷ばかりなり、田中氏よりはがき来り、加藤敬三氏には今夜九時四十九分の神戸行列車にて公務を負び〔帯び〕、沖縄県下に出発する旨報じ来る、蓋し当人より宜敷伝言ありし由、されど微恙の為新橋までも不送、後日消息を差上むとす、夕方伊志田平三郎氏入来八時過まで話し行かる、四方山の話柄あり、了に氏曰く自分現妻と契縁の前曽て一度ミス若林にプロポースせしかの様の風評あるかの如し、則ちミセス里見の口に出しをミセス実際聞入たりのと〔ママ〕事より大に心慮掛かる云々、余其の謬聞なる事を謂ふ、勿論愚父・秋葉氏に於ては曽一度は右等の談合もありたらむも、そは伊志田氏に交渉せざる時の事故、伊志田氏に於て何の関すなきを以て念慮に掛けざらむ事を語る、今日長田偶得の著「林子平」(29—136)を読で得る所あり、且つ彼を知り得なり、蓋し彼はあまり歴史家より謬解せられざる人物なりしと見ゆ

四日　晴天

過日問合せたる鈴木志穂子の履歴に就き、仙台の宮城女学校なる浅井さく子[29—137]より婦人矯風会雑誌第二十八号送与され、又はがきに同姉の鈴木姉の七年季[ママ]を想ふとて追弔の和歌を送らる、

五日　晴天

逗子へ砂糖テンコ五百目・白二百目に菓子四拾銭を小包郵便にて送る、但し郵税三十二銭、夜分高田氏入来おさく姉を診察す、おさく様とかく会釈を惜む、否至極く不気元〔機嫌〕、□□良人の談柄を取合ず、良人呆然、他人なる余等に其の困訴に及ばる、余等只おさく姉の狭量を惜むのみ、高田氏八時頃来て十時過去る、今日尾崎行雄の「内治外交」[29—138]を見るに、議論薄弱・着眼狭浅共に談ずるに足らず、辛口紆文の流暢平易なる処流石新聞屋の筆跡と知らるゝ、蓋し文学上の価直〔価値〕なきは勿論なり、余が斯る書を通覧して見むとするは我国政治界の名士たる彼の所説を見、又彼の説を喜んで傾耳する我国人の思向を窺はんとするにあるのみ、

六日　晴天

寒暖計八十二度強、蓋し此の二三日来幾分か暑気弱まる、午后小野・宮川の両氏へ暑中見舞状遣す、

七日　晴天

おすが様真佐樹氏と午后零時帰京、高田群司[29—139]氏夕方来訪、午後七時より教会へ祈会の為出堂、会するもの小川・山崎の両氏のみ、余司会す、

八日　晴天
　寒暖計八十九度、
九日　晴天　安息日
　日曜学校小児部三人、人少に付き新島氏の組見合せ、大人七人、去月二十六日よりはじめたる路加伝講義を為す、今日本文に掛る、自分礼拝説教に「慈善の精神」を話す、午后八時より自分説教馬太伝五章三節を題□として「謙遜」の徳を話す、論旨不明・渋舌なる、十三人の聴衆如何なる感想を乎起せしぞ、今宵十時過承五郎氏関西より帰京せらる、此日午后三時頃日蝕あり、八分通り缺く、
十日　晴天
十一日　晴天
十二日　曇天
　午后三時頃より驟雨盛なり、此日蒸し暑し、高田さく子・直之助氏等逗子へ出張するとて今朝四時頃一先づ銀座へ帰らる、当家承五郎氏・菅子も高田氏一家と今朝七時半の汽車にて逗子へ向け出発す、此日午前より波多野を出で明治生命保険会社にて河合氏の保険料を七八月分五円六銭を払ひ、三田にて散髪し、井深氏へ訪ひ月末の説教を頼むとして断らる、蓋し氏は明日房州保田辺へ避暑に行き直に帰京すと、秋葉氏へ行き秋良氏及おさく様に会す、午飯の代りにそばを馳走となる、河合きく子を訪ひ石本夫人等と談じ五時頃まで遊び、里見へ寄り夕飯馳走九時頃帰宅す、

十三日　晴天

午后岩本善治氏を中六番町に訪ふ、鈴木しほ子の碑文依嘱の件に就てなり、蓋し岩本氏とは初会なり、余は浅井氏の起稿に係るしほ子の履歴ある婦人矯風会雑誌を渡す、先生は尚女子学院及師範学校の人々に押探ね、然る后起稿すべしとの事にて、就ては日数も用すべければ何日頃までに碑を建つるや、又其大さ等に就きなほ問合られよとの御話にて別る、

十四日　晴天

昨日国元両親・福・和嘉・秋葉氏等へ同封にて手紙差出す、承五郎氏等逗子より帰京、力及教会の人の娘某も帰宅、

十五日　晴天

午前力を送て小石川へ行き、序に三並氏を尋ね氏留守にて夫人に会ひ、おさく様より頼れたる大学生小川某の住所を聞き帰る

十六日　晴天　安息日

八時半頃出堂、日曜学校小児十名・大人七名、礼拝式に二十人、自分「信者の馳場」に就て話す、午后八時よりは「貴をはかる事」に就て話す、会するもの七人、自分今朝より又〳〵痔質〔痔疾〕の気味萌しぬ、

十七日　雨天

〔欄外〕「逗子行」

家人との相談の上、自分今日逗子へ行く事となり十一時出門、英国公使館前にて驟雨に遭ひ二十

分余待ち合せ、通行の挽〔腕車〕車を雇ひ新橋まで乗る、但し高田氏へ一寸寄り十二時半出の汽車に丁度間に合ふ、同二時半逗子へ着、徒歩にて柳屋に来る、列車内にても堪へ来りし程の痔病大に困却したり、柳屋へ来れば家人皆鎌倉見物に出掛け真佐樹氏の書置きありき、是より前番町を出掛に福田経二氏より来る日曜さし支来られぬ由返事来る、蓋し昨日問合せたるなり、同氏か飯沼氏の内何れ乎都合相つくべしと思入しに意外なりき、されば右の事情新島氏に告げ、万事同氏に宜敷様依頼し送る、又昨日大島姉態々某の許へ訪問に来られよとの事にて余も約束したれど、当地へ来れるを以て延期の断り状出す、

十八日　晴天

今日もなほ痔疾不快、午前は家人と海岸まで行く、午后も一寸行き養神亭[29—140]にて塩浴に入る、おさく様おばさまと徳富氏老人の日本外史の講義を聞きに行かる、おさく姉の快癒著しきものにして、昨日の如き鎌倉へ行て平気、又此頃は毎朝早起にて海岸へ散歩を為す由、此分にては逗子へ来りし甲斐充分あるべし、自分今朝灸を焼く、真佐樹氏は午后四時過の列車にて帰京の途に就かる、葉山の手島氏へ自分来逗の通知す、今日は海荒るゝ事近頃に稀なる由、

十九日　晴天

自ら綽号して孤月と称す[29—141]、在来の東雲は産地に関し、此度考出の孤月は理想に関る、東雲の孤月は所謂二十六夜の月に当る

二十日　晴天

〔欄外〕「横浜見物」

昨日真佐樹氏より来状、明朝□〔八カ〕時半までに横浜へ行くべし、逗子よりも同刻頃来横すべしと、余則ち峰子と七時半の列車にて横浜に行き、ステーションにて真佐樹氏を尋る事一時間余にして遂に会す、同〔同氏カ〕の着せしは余等が八時四十分着せしより十分前なりしも、同氏は市中を徘徊して余等に空しく待たせしぞ酷なりき、斯て余等は真佐樹氏を案内者として先づ不老町辺の公園に遊び、茶亭に休みラムネ二本喫し十銭置き、茶婦に訪て午餐に恰好なる料理屋を聞き、港橋辺の「よしかね」こそ宜敷あらむの話により同料理屋に登る、則ち純然たる仕出し屋的料理屋なり、女来り注文を促す、三人相談の上「わんもり」・「あらい」・「やきざかな」を命ず、暫くして膳部出づ、かなり佳なり、食後真佐樹氏逗子へ行くに付き東京番町へ通知の為電話を利用す、費用六拾一銭、電話料十五銭置て去る、出て外国居留地の内にても支那人の町こそ見ものならむと真佐樹氏を案内に本目〔本牧〕の山ぎはまで通りぬけ、海岸を通てステーションに来りしは三時頃なりし、同十五分の下列車に搭しで〔ママ〕逗子に還りぬ、

二十一日　晴天

〔欄外〕「横須賀造船所／吉野艦」

藤井較一氏の周施〔周旋〕にて横須賀造船所を縦覧し得る事となり、波多野より串戸・おさく子・直ちゃん・お竹女・おわか女・自分及隣の下女・直方氏の八人と、外に徳富氏より小供及親類・大久保氏等十人、都合十八人にて八時逗子発十時頃まで鎮守府前に徘徊、十時頃藤井氏の案内にて先づ造船所を大略見物し、后氏の書生に案内され軍艦吉野艦に入り、内部の装飾及各機関部を見物し、十二時過ぎ帰途に付き、一時二十分の列車にて帰逗子す、

二十二日　晴天

〔欄外〕「江の島」

今朝六時十五分の上り汽車にて江の島見物と出掛く、一行は老隠居・おさく子・直之助氏・串戸氏・峰子及余と隣の下女なり、鎌倉にて老隠居とおさく子・直之助は車にて先行、余等は徒歩にて徐々とたどる、由井ヶ浜・七里ヶ浜・腰越・片瀬を経て江の島に着せしは九時半なりき、是より前片瀬の饅頭屋翁屋に休み、串戸氏の注文にて饅頭の出来たてのほや〳〵を喫す、聞く是れ片瀬の饅頭とは此東海界わいの名代ものなりと、道理で佳味、実に自身の歩き疲れの附帯に□過せり、店傍に車屋あり、御隠居と奥様御待なりと、蓋し先行の方直之助氏を余等に渡さむとて待されられしなり、余等彼の問を受てなほ休憩する事暫にして、眼前一丘山をなせる有名なる白虎山龍口寺に詣で、寺院の后背なる丘の頂上に到り数刻休憩かねで携帯し来れる遠眼鏡にて近くは左に江の島、右に藤沢駅を見下し、遠く富士箱根の佳を眺望し、今迄談話や画にて見聞せし空景を実観し得たりしは近頃の快事、山を下て近路を採り片瀬より江の島の浜に出んとする、小丘に開ける砂坂五拾間ばかりあり、しかも俊急歩を出て歩を退くの難場を経て辛し〔ママ〕で江の島の浜に出ぬ

二十三日　晴天

朝大松堂来り求む、値五拾三銭、午后二時頃高田様来訪、食事の后葉山に蜂須賀氏の見舞にと出掛、承五郎氏は老隠居・おすが様・峰子等と五時五拾七分の汽車にて帰京さる、但しわかも同行、而しておさく様は余等と今月一杯在逗の事となる、高田氏午后七時頃葉山より帰逗、衆既に上京せしに呆然たり、蓋し先行の衆と同行すべかりしに、老隠居早きを望み、承五郎氏は孝なら

むとせば忠ならず、如何せん孝道に行かむと、さては高田氏を置て先行されしなり、波多野の衆出立の節は峰子の夏中教師たりしといふ藤本姉及園田姉とやらむも送りに来□られき、斯て高田氏は早々に汽車に後れざらむとして去りぬ、彼は午后中松魚三拾五銭なるをヒッ下て行かれたり、竹女夕飯の支度出来ず、不得止余と串戸氏下手して先づ不完全なる晩餐を喫しぬ、

二十四日　晴天

私用あり上京せむと六時十五分に搭車する積にて食事前に出発、停車場近場にて時間替り七時半の二番に搭車するの不得止事となり、門の休茶屋に寄り饅頭の乾たるを二銭・卵二個（六銭）を喫し七時半搭車、一寸高田氏へ寄り築地貴山氏を尋ね妻君に会ひ、来る日曜拝礼〔礼拝〕の説教を主人に依頼を求めに来れりと告るに、姉の如才なき一考の上渡辺氏こそ好都合ならむ、両人に話し見て早速反事〔返事〕すべしとの事にて、余は万事委せて去りぬ、波多野へ着せしは十二時過なりし、妻君一度食事最中にて余も早速喫食、暫く休むで岩本氏を六番町に訪ふに不在、即ち鈴木しほ子碑文依嘱の事に関し鈴木氏より送られし手紙を置て去る、波多野より□□□る品物をカバンに入れ腕車にて駆去、五時廿拾〔ママ〕七分新橋発の列車に搭ず、此日波多野にては老隠居と峰子関谷へ行て不在、妻君のみ在り、帰り掛に承五郎氏の銀行より帰しに会したりき、

二十五日　晴天

午前八時頃よりお隣りの衆と一同にて葉山見物に出掛く、余と串戸氏一歩後れて行き、森戸明神の辺にて会合し同所に休む事暫くして去り、門前にて余と串戸氏とは別れるとなしに別れ、八兵衛殿の手島氏を訪ひ小話暫くして去り、衆の帰下せしに追付かむものと急き帰逗して見れば誰も

帰らず、即ち彼等ののろまを笑ひながら柳屋にてあぢを買ひ、外に芋及茄子等を煮て彼等の帰りを待つ、余り遅ければとて二人にてはじめつゝある所へ衆帰家せり、夜分手島氏来る、而て曰く藤本の所に永野つね子来り居り鎌倉へ行く同行者を尋ね居ると、是より前余等も明日は鎌倉見物の催を計画中なりければ、彼女も一行に加へやらむ乎とは余が思付なりき、今宵手島氏と養神亭の裏手をパんを喫しながら散歩数刻、養神亭前にてラムネ二本喫し来る、此時藤本・永野等の寓を見届置く、敢て見舞ざりしは遠慮する所あればなり、

二十六日　晴天

〔欄外〕「鎌倉」

永野姉を同伴者とすべき事を昨夜おさく様にも相談せしに、姉にそはお互に幸(好)都合なりとの事にて、姉は今朝四時前起き余を起されたり、余は起床先づ便場の厄を済しヨウジを后にして、少寒き荒風に吹れつゝ霏然たる微雨の紅暗なる雲間より二三粒したゝるを心配して、雲間より漏れし月影を翫で路傍の草葉にすだく鈴虫の啼く音一入淋しき辺を経て、軈て昨夜心覚せし酒屋を叩けば、初は何の答もなかりしに、遂に一入高音に主人起き何処より来れりしやと答ふ、余柳屋より来りしと告く、彼曰く最早夜明けしやと上戸を引上ぐ、余程よく会釈し近頃来りし永野姉に面会したき由語る、彼未だ新客の名を知らず妻婆に引合せり、余は□□て新客は越后高田の者で云々〳〵と語り出るや、永野氏は旅寝のなごり眼醒早くも自分を尋ね来し人よと寝巻のままにて出来れり、其の初は余と知り得ざりしと見へ大にいぶかりしが如く、誰にておわすの言葉切らさず、山田といへば彼直に悟り則ち改ての会釈、国より皆々宜敷云々、一人は手製のうちわを御身に与

へ呉とて托[託]されたり云々と、余は彼の会釈を差止め、今朝五時五拾七分の列車にて鎌倉行同伴は如何と促す、姉欣喜不斜、されどあまり切迫にて同僚に気の毒なればと躊躇せり、余察して七時半にて同行せんも不苦と、彼喜んで約す、最初余のみのこりて永野姉と同伴する積なりしも家人又彼此して遅刻、則ち七時半同勢六人、おさく子・直ちゃん・下女・串戸氏・永野姉及自分搭車、ステーション前におさく子は高田氏の娘の病を見舞に別る（蓋し空模様悪かりし故相偕に鎌倉見物不可なりしを以てなり）、余等は先づ八幡様を見物し、婦人二人及直氏は古物展覧会に入る（大人十銭・小供五銭の見料取らる）、それより頼朝・忠久・広元等の墓[29—142]を見、更に進で大塔の宮の穴牢を見物し三銭思召として置く、大塔宮一名鎌倉宮として知らる、穴の前二重の柵あり、更に穴口に角柱の甲子楯て切りあり、穴内すかし見て辛ふじて窺はる、鎌倉宮の辺にて永野姉足疲れたる様子見へ病気故乎又は足弱き故か外見何となく心配なれば注意せしに、姉はあまり遠路を歩みし事なき故疲れしなりと、さては全く身体肥満徒足に便ならざるの故なりしなり、余は永野姉の最初よりして鎌倉見物に余意あるに非りしやを疑ひしが、然し彼の女が頼朝の墓・大塔宮の辺にて覚帳を布留敷より取出して何か書留し所を見ば、万更ハ有難迷惑とも思わざりしものゝ如し、とにかく余は彼の女の目的地たる七里ヶ浜の方迄急ぎ由井浜辺き[近きカ]辺にておさく子に会し、当所より串戸君と彼の女と三人にて大仏・観音・星月夜井等を見物して、力餅（権五郎神社[29—143]の前にあり）の饅頭を食ひ居る所へデビス夫人の通過するに遭ふ、永野姉余等該茶亭に休憩せる所を見らるゝを恥ぢ身を抱てデビス夫人の近くを気を揉めり、而して遂に亭の台所中に身を隠すに至る、近眼なるデビス知で通過せり、斯て十二時過同姉を七里ヶ浜ヤングメンの別荘[29—144]に

明治二九年八月

送る。

二十七日　晴天

〔欄外〕「逗子引上帰京」

今日午后帰京の談纏る、隣の高原氏は今朝二番即ち七時半にて帰京さる、余串田君と荷物を方付け（片付け）、午后おさく姉の乞に応じ長寿飴を買はんが為葉山に行く、序に手島氏を訪ひ一寸面会し帰京後の往来を約して去る、斯て飴を求て帰逗するやおさく姉只今直に行く事となれりと、其時丁度四時、それより手荷物を整へ五時五拾七分の列車に搭づ、米国より「The Life of Faith（信仰の生命）」続々送附さる、着京せしは丁度七時なり、即ちおさく姉一行は迎の車にて自宅へ先行、余等は三台の車を頼み番町まで七拾二銭にて曳かす、但し鎗屋町高田氏へ一寸寄り問安して去る、波多野にても衆余等の労をいたわれ、謝礼の言実に□過せり、おば様・承五郎・峰子嬢少々づゝ障恙、

二十八日　雨天

明方より雨天、昨日の疲ありてか一日ぶら〳〵せり、午后二時より真佐樹氏と同道高田氏へ行きおさく姉を見舞、夕飯に西洋料理の馳走となる、（何か名はしらぬが四品位出たり、皆佳なり）、其足にて赤坂教会の祈祷会へ行く、会するもの田中・新島・山崎及余の四人、田中氏司会す、

二十九日　晴天

串戸君と牛込海老原武五郎氏（29—145）許行く、主人留守妻君に会す、十時去て関谷に到り丁度叔父在り話し午飯馳走、串戸氏と別れ本郷を通て向柳原の辺大学医学部第二医院に福島於兎吉氏を見舞、

父より送られし見舞料金一円差上暫く話して去る、於兔吉氏の病気は非常の好経過を呈し今は只病後の疲れあるのみなりと、永の着床ゆへ疲労の様は一見驚くへき程なるも全身全く快方に向へるものゝ如し、氏は一度松山病院にて見限られしも当院入院后治療法当り、此頃の容体とはなりしなり、医の上図〔上手〕なる誠に以て驚くべきものなり、それより福島正発氏許行く、原田の老母在り、若林の祖母は田中へ行りと、三造氏は銀行に行きて未帰らず、暫く叔母様と談じ帰りがけに病人正発氏に会す、眼光炬の如く床上に直座せる所危篤なる容体とも見ねど、肺に関係ある病とて斯かる様子にて六ヶ敷なりと、四時去る、柳原より浅草通へ出で両国を渡り本所相生町の原堂紀堂〔原沢紀堂〕氏許に行き主人在否如何と聞く、妻君らしき婦人主人入湯に行けり其内に帰るべけれは暫く待よと坐敷に通さる、待事十分紀堂氏帰宅、直に用談に入り、来る礼拝式に晩餐式挙行し呉るゝ都合如何と問ふ、彼曰く本所にても同様当日晩餐あり、遂に第二日曜に来るべき様承諾せしめて去る、

三十日　雨天　安息日

驟雨を冒して会堂へ到れは新島氏独り在るのみ、無人なれば聖書の講義を休む、其内に渡部頸氏入来、蓋しかねて約せしなり、氏は教徒の警備てふ事に就て説教さる、会するもの九人、午后尚雨止ず、竹内氏来るべきの所余断り独り出堂、九人程集る、余集会出席の徳を話す、今日渡部氏に托して大会伝道費壱円六拾五銭送附す、去る二十三日の日曜には朝夕共新島君説教され、朝も二十名程、夕も二十名程の聴衆ありし由、

三十一日　晴天

南風吹き荒るゝ事終日、しかも昨夜並今朝未明より吹すさむ、新聞にて二百十日と知らる、道理で、併し此位なら結構！

九月

一日　晴天

午前大野善四郎氏・井上治五郎・志佐のぶ子等を訪問し、十二時頃里見に行き昼飯馳走、一時頃中野を見舞、白金柴山氏を訪ふに妻君と桂氏不在、光と話す事三十分去て秋葉氏へ行き暫く話し、河合姉を見舞、佐々木姉に会し五時学院へ寄り昨日帰京せしといふ山野・早川等に会す、なほ清水氏も帰京せりといふ、三の橋先より番町まで乗車、井上氏は肺病にて着床、容体頻る悪し、婦人及三子あり、気の毒なる境界なり、夫婦とも当春よりの求道者なりと、余今日はじめて見舞ふ、串戸君帰国せり、昨日は名古屋・岐阜暴風、秋田大地震(29—146)揺ふと、

二日　晴天

朝来雲霧厚く涼しきやうにも蒸すやうにもありしが午后に至り漸く暑くなれり、午后二時頃奥平姉来訪、二時間程話されて行かる、おさく姉入来泊らる、

三日　晴天

峰子一昨日より華族学校へ通学さる、昨夜おさく姉・隠居なぞ□楽せる所にて承五郎氏今より聖書を読むとて自ら開巻、馬太伝五章山の上の説教を朗読せられ且つ解釈せられたるには恐入りた

り、氏が基督教を以て徳教視せる所福沢翁と同徴なり、午后一時半より白金辺へ行んと新橋より汽車を利用し白金猿町の陶山氏方へ三時着、主人留守、即ち留守居の婆に次の説教を主人に依頼し度と□て去り、聖書学館に奥平姉を訪ひ三十分ばかり話し柴山姉及桂子に会し去る、秋葉氏に小憩し学院より里見の夜具類を取り、六本木に投じ市兵衛町より乗車、六時半頃番町に帰宅す、夜分承五郎氏及菅子と高田様へ直之助氏及おさく様のご病気見舞に出掛く、十二時帰宅

四日　晴天

今朝八時頃起床、なほ大に疲れ居る、昨夜銀座より十二時過帰りし故ならん、昨夜は二十六夜様にて九段は人出夥しかりし、今朝陶山氏より断状来る、

五日　晴天

昨夜祈祷会の為出堂、田中・飯田・山崎・小川の諸氏会す、余司会、田中氏勧めせらる

六日　晴天　安息日

〔欄外〕「日本基督教会伝道局第二年度会計収支決算報告書（自二十八年七月至二十九年六月）／赤坂教会伝道局寄附金報告」

寒暖計八十六度強、但し南風吹けり、日曜学校小児二十五人集り大人来らず、礼拝式〔説教カ〕説田中氏話され十二人集る、井田氏新〔後ヒ〕らしく見ゆ、聞けば一昨週日曜日にも来られしなりと、教会より帰途痔病起るの萌あり、午飯午大便に行き出で来りて腫れ治まらず、則ち着床のまゝ歩行不自由となる、腫の大さ経寸、其うちに中野威夫氏入来、暫く話して去る、氏に託して田中氏へ今晩の説教宜敷依頼してはかき出す、此日承五郎氏主となりて三井銀行員無慮百三十人許を品川湾に舟遊せ

しむるとの事にて家人三人も随伴、出発せしは午前七時半頃なりしが午后五時頃帰宅、風あり浪高かりしも愉快を極めし由、后より魚沢山来り今宵は鮮魚の馳走夥多なり、是より前高田氏入来、おさく子不快なほ依然たり、「誰かお見舞に御出掛け被下度し」と遺言せらる、大島幸子入来、かねて病床にありて求道者たりし井上治五郎氏今朝三時頃就眠、永途に帰られし由にて、余に明朝五時出棺に間に合ふやう教会の司式の下に葬式を行ひ度と申来る、余痔病に托して辞し、島田正七氏に手紙を以て大島姉を紹介し宜敷依頼し遣す、但し井上氏は余四五日前一度見舞し事あり、浅信なるか信実なる求道者にして生死の覚悟は主キリストに依りて優に悟了し居るもの〻如く見受られたり、未亡人と三人の子女あり、善後策の程察し遣らる、

日本基督教会伝道局第二年度、会計収支決算報告書

（自廿八年七月至廿九年六月）

会計　貴山幸次郎(29-147)

収入の部

一、金千六百八十五円九銭五厘　　総額

内訳

金二百拾五円卅三銭二厘　　前年度繰越高

金千四百六拾九円七拾六銭三厘　　本年度寄付高

内

金八百七拾四円七拾銭三厘　　教会及講義所

金四百卅九円一銭　本邦有志者
金五拾六円五銭　外国有志者
支出の部
一、金千二百廿五円九銭五厘　総額
内訳
金六百八拾六円　謝金額
金三百六拾八円八拾六銭六厘　旅費額
金百七拾円廿二銭九厘　諸雑費
差引
一、金四百六拾円也　残額

赤坂教会伝道局集金報告（自廿八年十月至二十九年四月）

二十八年十月　同十一月　同十二月　二十九年一月　同二月　同三月　同四月　七ヶ月各計額
毎月集金総高　三円　二円十五銭　三円四拾七銭　一円八拾銭　一円五拾銭　一円九拾七銭　一円二拾銭　十六円九銭

〔欄外〕「持約人名」
中台順吉　一円　同　同　同　／　／　／　四円
河合〔　〕三拾五銭　同　同　同　〔　〕　同　同　二円十銭

明治二九年九月

明治二九年九月

清水由松	／	／	一円五拾錢	五拾錢	同	同	同	三円五十錢
加藤敬三	五拾錢	／	／	／	／	五拾錢	／	一円
志佐ノブ	／	／	／	／	／	／	一円	一円
〔欄外〕「代田村の人」								
代田村ノ人	／	／	二拾五錢	／	三拾錢	十錢	／	六拾五錢
右合計	一円八十五錢	一円三十五錢	三円十錢	一円五十錢	一円十五錢	一円四拾五錢	一円八十五錢	十二円二十五錢
第十三号	／	二十錢	／	拾錢	／	拾錢	拾錢	五拾錢
〔欄外〕「教会員」								
一号	四錢	四錢	三錢	／	一錢	二錢	／	十四錢
二	十錢	十錢	／	十錢	／	／	／	三拾錢
三	二錢	四錢	二錢	／	四錢	／	／	十二錢
四	十錢	／	十錢	／	／	／	十錢	三拾錢
五	十錢	同	同	同	同	同	／	六拾錢
八	十錢	十錢	／	／	二拾錢	二拾錢	／	六拾錢
九	五錢	五錢	／	／	／	／	／	十錢
拾	五錢	五錢	／	／	／	／	／	十錢
十一	五拾錢	／	／	／	／	／	／	五拾錢

十二　二銭　二銭　二銭　／　／　／　六銭
十四　／　／　五銭　／　／　／　十五銭　二十銭
十五　／　／　五銭　／　／　／　／　十銭

〔欄外〕「他教会員」

六　五銭　／　／　／　／　／　五銭
七　二銭　五銭　／　／　／　／　七銭
十六　／　五銭　／　／　／　五銭　十銭

右合　一円十五銭　八十銭　三十七銭　三十銭　三十銭　五十二銭　二十五銭　三円七十四銭

因に記す、右は去る四月の末までの分にて、去る五月中頃河合氏の調査せしものなり、而して其后河合氏の台湾行なぞに取まぎれ、五六月とは無収にて過き、七月に至り壱円六拾銭集り、右は八月廿日渡部顕氏を通して本局へ送れるが、右は来期の分に繰込むならむ、

七日　晴天

高田おさく子不快なりとて入駕、数日間加養する為銀座の熱閙を避くるなりと

八日　乍快晴乍驟雨

午前岩本善治氏を訪ひしに古衣屋に行て不在なりと、午后三時頃千葉県大森の鈴木葆氏入来、同氏の妹しほ子の碑文の事に就て相談に来らる、其の容貌挙動の凡ならざる、一見明治の紳仕〔紳士〕として辱しからぬ概あり、教育も頼母しきものあらむと思われ、かねて想像せし人物と正反対なりし

には意外なりき、其の言葉の陋ならざる処、其の話柄の着実なる処、殊に主話碑文依嘱の談合等正整述られて間然する処なき処感服したり、五時頃里見純吉氏入来、氏は去る五日帰京せし由にて、暫くの離別にて再会せし事とて初の程は旁互に床しき感情に取るものも取あへぬ様にて、夕飯后寝に就まで彼が西京・大坂・名古屋の土産話に傾耳したり、波多野にては海老原・植木の諸氏の為晩餐を馳走するとて大騒ぎ、今日寒暖計は八十六度強

九日　乍快晴乍驟雨

〔欄外〕「明治学院寄宿舎に環移」

昨日の如し、寒暖計八十六度強、午后三時頃愈々白金の寄宿舎へ帰校せんとて車二打を頼み積銀五拾銭とらる、長山万次氏又今日帰校さる、夜分秋葉氏及河合氏等へ行く、長山氏に越后の名物飴を馳走になる、今宵加治木氏に到り痔病不相変不宜敷、不日痔瘤切断され度旨量る、氏即諾其準備に毎朝牛乳二合と飯量の減額を告らる

十日　晴天

本日より牛乳毎日二合づゝ飲用す、又パんを食す、

十一日　晴天

十二日　晴天

午前八時より三田に行き散髪し、銀座鎗屋町高田氏方へ行き痔病の診察を受け膏薬及服薬五日分を貫ひ、十二時十五分新橋発列車に乗り帰校

十三日　晴天　安息日

痔病尚不宜敷教会欠席、今日原沢紀堂氏来られ聖晩餐式あり、来会者十六人程なりし由、又夜分は里見純吉氏に説教を頼み四人の聴衆ありし由、自分午前台町教会の礼拝式に列し陶山氏の説教拝聴す、午后は石原氏の説教ありき、昨日若林芳郎氏お祖母様と秋葉氏へ来駕、余はお祖母様を召携れ学院寄宿舎及神学部を見せ、夕飯を食堂にて差上、秋葉氏へ再びおつれ申ぬ、

十四日　晴天

自分一昨夜秋葉氏より「外教内政衝突史」(29—148)を借り今朝読了、大に得る所ありき、長山氏昨日近藤氏の寓に到り一泊今朝帰校さる、即ち近藤氏余に約束せられし安田磐子嬢(29—149)の写真を持来らる、福島正発氏昨夜八時永眠せし由、今宵石原氏及秋葉氏許訪問談話数刻、帰校せしは一時頃なりき、

十五日　雨天

〔欄外〕「福島正発氏葬式」

午后零時里見・若林の両氏と品川より一時二十分の新橋上り列車に搭じ、鉄道馬車にて草浅(浅草)橋まで行き福島に到る、時に二時半、出棺せしは一時少し過なりとの事にて余等応座に登り老婦人等輪座の所に当日の弔辞を延(述)べ、早速埋葬地駒込の大観音指して去る、当日福島にて原田・田中・渡辺・佐伯其他の婦人連に会す、期て駒込大観音に到るや葬儀既に了り、大概帰散せし処にて、余等は三造氏の案内にて叔父の暮所(墓所)を拝覧し菓子及茶の馳走になり去る、終日降雨しきりに降り来り閉口したり、小石川に泊す、

十六日　雨天

〔欄外〕「米沢鷹山公」

午前八時より本郷森下町一番地須田方に近藤氏を尋ぬ、午后まで談じ午飯なぞ馳走になり二時頃去る、今日も終日降雨絶へず閉口、小石川関谷に閉居、本日米沢鷹山公の伝(29-150)を読み大に発憤する処ありたり、彼は学者にして実地家なり、其の徳に於て強然たる宗教家たるを示す、其の主義は忠孝を以て愛国の基礎とするにありて、其の施政の方法は単に至誠に根ざせる親心を以て国民を撫育せしにあり、とにかく彼は模範的人物なり、

十七日　晴天

午前七時頃関谷を去り番町岩本氏に行き、不在にてかねて手島氏より紹介状を貰ひ居りし故メリケン姉を女子学院に訪ふ、都合好く面会を得頼むに教会日曜学校の教師派遣の事を以てす、姉即ち諾さん、何れデビス姉と相談の上誰かきめて差上べしとて難義なく諾せらる、渡辺六郎氏を尋ね遂に見出し得ず、氏の故の下宿屋森島にて聞き下二番町四十二番地川村仁三郎氏と知る、併し二度と尋ず、それより波多野へ行く、承五郎氏なほ居り、離れ屋にておさく姉・おばさん三人にておさく姉病院入院如何と承五郎氏の発意により相談最中なりとおすが姉より承る、十時頃承五郎氏出勤、其時余はおは様より冬物反物一反拝領す、蓋し余当夏中同家の留守居を為したる礼なりと、何ぞ其あべこべなる、余の此夏当家に来りしは余が方より依頼せしにて、余は未だ食料なぞ差上ぬを気の毒に思ひ居るに、反て先方より礼物を寄送されんとは、余は拙角(折角)の厚意を空ふせむも気の毒と思ひ忻で受取り、他日関谷にて調製し貰ふ為なほ同家に預く、おば様のすゝめによ

り午飯馳走となる、其のうちにおさく子の友人稲沢ゑい子入来せり、姉の名を聞くこと数年、今日初て会す、快活一個の女丈夫なり、三時頃去て鎗屋町高田氏へ行き薬価を問ふ、書生謂はず、他日礼に来る積にして去る

十八日　晴天

十九日　晴天

正午頃より若林氏を携て目黒に行き波多野と高田氏へ進物とすべき梨三十九個入を七拾銭にて求め、なほ両人して梨腹一杯食し去る、余は目黒より二時九分の下り列車に投し新橋にて一時間余まち、波多野に着せしは四時頃なりき、時に女子学院の藤本・園田の両姉居り、同間にてしるこの馳走になり両姉去り、承五郎氏帰りて直に余は高田氏へ行く、高田氏にておさく子将に波多野へ来らんとする所にて、余は梨を上て倉々〔早々〕に去り新橋より汽車に投じ七時頃帰校せり、

二十日　晴天　安息日

〔欄外〕「赤坂教会婦人祈祷会／須藤みや子」

日曜学校生徒十三人、大人の組休む、説教は長山万次君致され（約翰伝六章四十三節を題詞として愛の交りてふ事を説教せられたり）、午后八時よりは竹内虎也[29-151]君説教されたり、午前は二十人午后は十二人の集りなりき、因に記す、此前の婦人祈祷会は田中氏司会の下に開かれ六人程集りし由なり、自分今日正午頃女子学院へ行き岡本・須藤の両姉に会す、姉等食事前なりし故倉々〔早々〕にて去る、他の諸姉将に食事中の様子なりしも、さすが婦人丈にて静粛なりし、永野姉にも会んとせしに姉ははや草浅〔浅草〕教会へ出られし由、須藤姉は今日デビス嬢と当教会へ参られ、此后毎日曜引

続て来るべき様になりぬ、須藤姉名をみやといゝ青森県の人なり、小石川関谷へ一寸寄り佐久間町の理吉を訪ひ、福島於兔吉氏を見舞、国元より送られし又三の見舞金を渡し、尚近状を窺ふに病人事二三日前より足部痛み大に苦みしも今日は少々快方なりと、又向柳原の福島へ行き夕飯馳走となり、三造氏と三時半頃去り同道波多野まで来り、自分教会へ急ぐ為一寸同家へ来り居りし奥平姉のはがきを貰ひ早々去り、一度〔丁度カ〕八時赤坂教会に着す、今日理吉の所へ行ては親方ひるね最中故敢て面会せず、又同輩等にも挨拶せず、然しもちがし十銭遣しぬ、又理吉に七拾銭程の洋傘を購求させしに当時はやりの鼠色の夏向傘の極堅吊を取寄されたり、なほさるまたももらひき

二十一日　晴天

午后自分の机を取に波多野へ行き、帰路里見の夜具類を六本木より持来る、是より前行掛に永田町の井上氏の遺属〔遺族〕を見舞ひ、小供に餅菓子十銭遣し教話数該話し祈祷をして去る、今宵八時頃宮川氏帰京、夜分一寸秋葉氏へ行き太平二氏に面会す、又渡部千代子にも面会す、姉は好人物なり、高田おさく様も愈々今朝全く波多野を引上げ帰家せしといふ、今朝より大に寒くなり、朝はシヤツ・一重物・合せの羽織を着したり

二十二日　晴天　秋季皇霊祭

午前九時頃近藤虎馬君入来、午后二時頃まで長山の室にて快談、二時過より三人にて神明前田中へ行き、写真採影〔29-152〕し、長山と別れ外神田まで近藤氏と同道彼処て別れ、自分河辺方へ理吉を訪ひ洋傘を取替へさす、今日は親方にも面会せしがなか〳〵の通人にて好く話す男全然親方らしき風情なりき、夕飯馳走になり六時半頃退く、眼かねより鉄道にのり新橋より品川まで汽車を利用

し七時過帰校す、

二十三日　晴天

二十四日　晴天

午后宮川氏と三田に遊びミルクを求め来り、明日より生乳に更ゆる積なり、

二十五日　晴天

〔欄外〕「神学部開校式」

主祷の一句「我等に日用の糧を今日も与へ玉へ」〔給〕てふ言葉に就て研究す、午后五時過より三田飯倉を経て赤坂教会の祈会に出席、自分司会、会するもの三人、十一時頃帰校、本日午后二時より開校式あり、教師の交代は植村氏暫く去て、陶山・柏井・小倉・ポプン氏[29—153]等正教員となる

二十六日　曇天

昨夜聖坂下の箱屋にて個利〔行李カ〕を注文せしに、今朝持来られ六拾銭払ひぬ

二十七日　晴天　安息日

〔欄外〕「所感数件」

小児女の集会は十五名程にて、須藤姉少々飲口を損ぜし由にて姉の友某姉と二人にて来る、礼拝の集会廿九人、河野政喜氏[29—154]「哥后書五の十四を題詞として基督の愛」を説かる、夜分は宮川氏の説教「黙示録三の二十」に就て説かる、十三人集る、自分十一時頃会堂にて弁当を喫し、中島・小川・西尾・羽田・里見・中野・牧・志佐・大須賀・田中氏等を訪問せしに、羽田・里見・志佐・西尾氏等の諸氏は不在なりき、又求道者小竹安氏を訪問し初て若主人に面会、氏は同区警

明治二九年九月

察署統計局に掛りたるを以て種々話談を承る事を得たり、大須賀姉の宅にて飛田〔飛騨〕高山の信者高津とえ子及今まで牛込美以美教会の伝道者たりし原野彦太郎氏に会し、主婦共四人にて小集会を開き、余路可十章を朗読し、余と原野氏励をなし四人輪番に真摯なる祈祷を捧げ散会す、因に記す、原野氏は肋膜炎にて赤坂病院に入院せしに薬石功〔効〕あり明日退院、二週間ばかり鎌倉に遊び、后加州金沢に布教の為赴任するなりと、又今は清水氏をも見舞たるに主人不在なりき、今日自分の特更に強く感じたるは左の件々なり、浅岡氏も不在なりき、

一、訪問は牧会上唯一の要件なる事、

一、教友相集りて精神的の交通を為す必要及其の愉快なる事、

一、悔改は平安の基礎にして、又悔改より生ずる平安は必然的の結果として神を知るの機会となり、尚進で真の勇気を勃与するを得といふ事（小竹安氏の談話による）

一、所謂る俗といふ世界の万物は聖なりといふ霊界の真理に逆ふものに非ざる事、肉の糧あなかぢ〔がち〕に霊の糧にもとるものに非ず、肉の糧は是即ち霊性修養一要素一機会となるものなり、故に吾人此間の消息を了悟し現世界の万物を無下にいやしみ退くるのいわれなき事をさとりぬ、――斯くて吾人教会の員々として信者を訪問し未信者を説くに当り、あながちに世俗の談話を避け、無理に教話、否寧ろ聖語を提出する事にも及ばさる乎と思ふ――是れ牧会上特に訪問の方法として自分が今日今更の如くに感じたる所なり、

高田の永野八郎氏より送られたる扇団はつね子さんより須藤姉に托して今日会堂にて落手す、

二十八日　晴天

今日河野氏に托して大伝道局へ金三拾五銭を八月分として送金す、但し内二十五銭は代田の信者出し、十銭は赤坂教会より出せしものとす、

二十九日　晴天

午后矢島・長山三人にて三田まで行き、長山と別れ更に銀座に到り教文館を冷かし、長山への見上〔土産〕にパん・無花果を求め七時半頃帰校す、

三十日　晴天

〔欄外〕「祈祷感話会」

夜分ポツ〳〵降雨、大ならず、村松氏今朝帰校せり、昨日は終りの火曜に当り例の如く感話祈祷会あり、陶山氏司会され并に奨励的感話あり、井深・アレキサンドル・早川氏祈て、誰も祈るでもなく励むるでもなく黙慎暫く、遂に井深氏は祈祷なり励なりを催促するに至り、殺風景其の極に達し心苦しきことゝもなりき、あまり手もち不沙汰は心苦しきものなり……、以て吾人の当時に於る信仰及平□□の心状の程知られたりといふべし

十月

一日　晴天

午前銀座教文館に行き心の諸譬を三冊求む、マコーレー氏より先月分給金八円受取る、

二日　晴天

〔欄外〕「教授並に新入学生歓迎会」(29—155)

午后六時半より神学部新入教授ポピン・陶山両氏並神学生荒木・井上・高松の三人の為歓迎会の催あり、清水氏司会され早川氏神学部総代にて歓迎の辞を述べ、井深氏の神学校の性質に高等学理研究所と実地伝道者養成の二つあり、学院の方針は其の后者に属と話され、次て高松・陶山の両氏答辞あり、八時頃歓を尽して散会す、蓋し会費五銭なりしも寄附金等の為一人前十三銭程の馳走なりしも駄菓子には閉口したり、石本夫人沼津の親族に病人出来出張、余留守番として止宿に行く、蓋し河合姉微恙あり、

三日　雨天

午后説教を考出せんとて微雨を冒して三光坂上旧自営館の跡(29—156)を見舞、今昔の感にむせびて去る、午前秋葉氏を見舞、里見叔父に会す

四日　雨天

新島氏風邪の気味にて話出来ず自分話す、集るもの男女合て二十六人、女の方は須藤姉受持たる、礼拝説教は自分努めダビデの改悔を話す、会するもの無慮三十名、午后小川・梶・牧氏を訪問す、梶氏にては妻君の令妹(29—157)北海道箱館に在り、基督教会の伝道師に嫁せしもの産后の余病故昨日とやら永眠せし為、今親類一同打揃て祈会を為しつゝあり、と会弔詞を述て去る、牧姉風邪大に快方なりと、田中様にて夜分の説教を考へ夕飯弁当使用し六時頃教会に来る、一人の悔改者は九十九の義人より神の喜ふ所に就て語る、十人集る、雨を冒して帰校せしは十時、婦人祈祷会

を二時より開会し須藤・広瀬の両姉出席の筈なりしが、雨天の為にや両氏の外に二三人の来会者ありしのみなりし由、

五日　雨天

午后四時より里見と同道雨を冒して六本木に行き、九時半頃なほ降りつゝく雨を冒し泥路を踏て帰校す、

六日　晴天

午後ポペン氏のレスンを休み清水氏と銀座を経て同所に別れ、自分は佐久間町理吉の所にて洋傘を取り、関谷へ一寸寄り夕飯馳走となり、七時頃永田町の井上氏方へ行き、かねて亡主人の追弔会の祈祷を催す故来臨され度との未亡人の乞により、一族及び広川・矢島姉と一場の祷会を開き余幽明〔ママ〕異にせる彼我の精神的交通なかるべからざるを語る、会了て菓子（手製の大福）出づ、なほ余の為に氷磋糖〔砂糖〕なぞ特別に呉る、十時頃石本氏帰宅す、井上氏は先月の今日逝ぬ、

七日　雨天

石本姉帰京す、河野の友人某と台町教会の祈会に行く、会するもの三十人程、八田氏主会者〔司会カ〕なりき、

八日　晴天

午后三田にて散髪す、

九日　晴天

夜分雨る、金曜祈会の為出席せんとして途中まで出、寒さふなりし故見合せ、二本榎にて駒下駄

四十三銭なるを求む、

十日　雨天

朝より明日の説教仕度にかゝり一日費す、

十一日　晴天

日曜学校小児組二十九人、大人組休会、自分説教「勝利の福音」を述ふ（大不出来）、会するもの十八人、小林格氏来会、新島氏と共に一つ木の天〔　〕羅屋へ登り四人前取る、払三十四銭なりき、午后は会堂にて夜分の説教の仕度に費し、「パウロの祈」に就て語る事とす、夜分会するもの八人、九時半頃帰校す、美以美教会の寺村氏小女を携て来会、帰路相会し親切なる会釈に接し同氏の宅に寄らん事を勧られしも他日出堂を約して別る、氏は氷川神社のわきに居るなり、

十二日　晴天

午后三時より羽田波五紹・綱島佳吉・岩本善〔善治〕・大石保〔29—158〕の諸氏を訪ひ、岩本氏には鈴木しほ子碑文出来せるや否やと聞合に行きしに本日下総より鈴木葆氏態々出京せしとなん、暫時にして去る、蓋し先生此度の件に就き尽力至らざるなし、氏の如きは実に同情の人なりと謂つべし、綱島氏不在、両国の大石氏を尋ね不在、氏は此頃本所の方へ移転せりと聞て帰る、帰路再び綱島氏を訪ふ、氏在り、兎に角宅一、長谷川嬢居、今何れにも初て会す、即ち綱島氏に来る廿五日の説教会弁士たるの依頼を為すに、都合あり来月に延せたしとの事より詮方なく其事として去る、氏に波多野老母及すが子姉の転籍に就き依頼せしに、氏曰く僕から言出すのは少し変だからねーと、さもあらん、田中太郎氏へも一寸寄り帰校せしは十一時半頃なりき、本日アレキサンドル氏の神

学の組休む、

十三日　雨天

〔欄外〕「クラスミーチング」

午后六時よりクラスミーチングあり、深尾(29—159)・千磐の両氏委員たり、会するもの郡山氏を外に不残会す、会場は余が室、司会清水、長山氏の励め及び祷と、矢島・小野・深尾・千磐及余の祈祷等あり、散じて後菓子の馳走及トランプの遊技あり、十一時半頃まで□遊

十四日　晴天

新島氏風邪の為自分代りに百合園に行き習字・読書を習はせ、八時半頃帰校す、

十五日　晴天

河合・鈴木葆の両氏に手紙出す、

十六日　晴天

今晩も百合園に行き、七時より教会祈会に出席、会するもの三人、九時半頃帰校す、百合園へも行く、

十七日　秋季皇霊祭　晴天

〔欄外〕「明治学院と学習院・慶応義塾とのベースボールマッチ」

午前九時より明治学院と学習院とのベースボールマッチを学院運動場に開会、結局彼三入此方二入り一の負となる、又午后一時よりは慶応義塾とも有之、彼十入此方十五入にて結局五入の勝となる、奥平浩(29—160)氏今日午前十一時頃着京、午后来訪され初て会す

十八日　晴天　安息日

午前七時過より芝教会に和田氏を尋ね、来る廿四日夜の説教会来演の承諾を得、九時頃赤坂行く、小児日曜学校二十七人程集る、礼拝式に二十人、自分「基督の憂」に就て説教す、午后田中氏にて弁当使用し、小川・庄田・中島・西尾・梶・寺村・浅岡・野口等を訪問したり、夜雨り集るもの六人、自分求道者の謙遜に就て説き、村松氏天国の話を為さる、蓋し氏は少々后〔遅〕れ来りしなり、雨を冒して帰校す、夕の弁当里見にて食す、老母と貫一氏は浅草辺へ遊〔遊山〕散に出掛たりと、来る廿四、五日の説教会の広告を芝教会・麻布講義所・麹町教会に通知す、

十九日　晴天

午前九時頃より教会山崎氏に広告のふだ三枚を頼み、番町波多野を見舞、家人四人は一昨々日下野日光見物に出掛、今日午后九時頃帰京の筈なりと、串戸君留守居せられき、今日青山氏より同家の主人昨夜三時頃永眠せし由報知し来りし故、余は電報にて学校へ欠席届を出し青山氏へ罷出、波多野留守宅より訪問せし体にして何か手助も致さむとせしも、何も用なしと聞き去る、午后六時頃去る、

二十日　晴天

近頃ライマンアボットの基督教の進化〔29—161〕てふ書籍を渉猟し居り、昨今其の境佳に入り得る所少からず、

二十一日　晴天

〔欄外〕「賄対ストライキ」〔29—162〕

新島氏風邪の故を以て今宵も百合園に行く、普通学部の連中賄に対し「ストライキ」をやらかし食器を半ば破痒し、加ふるに僕婢かね女をして失神せしめ、一時は大騒きを演じたる由、井深氏来り加字木〔加治木〕氏立合ふ、

二十二日　晴天

昨夜の「ストライキ」事件よりして我々も差当りの朝飯に困りしも、幹事の周施〔周旋〕により都寿司を配附され漸く間に合ひき、ストライキの首領三人停学さる、

二十三日　晴天

午后百合園に行き七時赤坂教会に行く、誰も来らず独り祷りて去る、ストライキ首領と認られしはランプを消したる南・富沢・森田の三人、

二十四日　晴天

〔欄外〕「赤坂教会連夜説教会」

朝程より小石川関谷より波多野氏方なぞ訪問し、午后は庄田・菊地・宮崎・田中氏等訪問して今宵の説教会に出席する様促す、予期の如く七時より説教会を開く、和田・アレキサンドルの両氏六時四十分頃来会、和田氏にヲルガンを頼み、自分司会、第一席に和氏〔和田〕の「救ノ方法ナル信仰」あり、続て第二席にアレキサンドル氏の「われは道なり」てふ緻密なる説教あり、九時過ぎ無事散会せり、会するもの四十五人、婦人及び下等社会の人々多きを占めたり、此宵六時頃より一天かき雲〔曇〕り如何にも危険なる空模様となりしも幸にして雨降りともならず九時頃に至りては月明かに輝きぬ、

明治二九年一〇月

二十五日　晴天　安息日

朝の礼拝式を奥平氏に頼み同氏と同道教会に行く、日曜学校小児二十八九名会す、礼拝式に十八人、奥平氏ヨハネ第一書の五章二十節を題詞として「信者の愛交は神を愛する事に依て行る」といふ意味の説教ありき、午后は田中氏・中島氏・牧氏等を訪問す、午后七時よりは井深・陶山の両氏来席、両氏とも「我国民精神的の品格を修養せんには基督教こそ必要なり」といふ主意にて弁ぜられ両人とも得意の弁を振われたり、(29—163) 会するもの四十五人、今宵は昨夜に比して幾分か聴衆の面想中以上の連中多かりき、新島氏司会されき、

二十六日　晴天

河合氏の荷物を田川大吉郎(29—164)氏に頼まん為、午后五時三十五分目黒より乗車、六時半頃飯田町に下り一寸迷ひ、水道橋を通り富坂を上りて関谷に行き夕飯を馳走になり八時頃去り、表町百の九番の松井昇(29—165)氏方に田川氏を訪ふ、不在、妻君の妹と思しきと下女と門にて挨拶され、田川氏は富士見町より出発する故先方へ行れよと聞き、直に富士見町の河本氏に行く、門を叩て入る、妻君出づ、直に来意を告げ荷物を頼む、妻君奥に荷物をもち行き主人と語る（余は小石川松井氏にて田川氏は今日横浜に行きたれば不在なるやも不知と聞き、さだめし然らむと思込来り）、再び妻君出て案内して入らす、余入る、火鋒付きの机にて書き物を為しつゝありし磊落なる長年書生は、先づ是へ〳〵と褥にのほらせんとす、余は一通りの挨拶をなし、先づ同氏渡台の由来を問ふ、氏曰く新聞事業と其他の雑務の為、又台湾治政の方法は献身的の官吏と宗教家及教育家を俟て初て得らるべし、思ふに台湾開導の任は日本の基督教徒の責に属す、而して台湾人をして日本

化せしむるは策の拙なるものにして、宜しく世界化せしむるこそ吾人の志望なり、換言せば彼等に日本語を教ゆるよりも英語を学ばせるの可なるにしかず、日本服を奨励するよりも洋服を奨励するを可とす云々、要するに氏の台湾治政策は重(主)に世界的観念に根させるものゝ如し、又気候の事に付き邦人の考大に過愁なるものあるを嘆ぜられき、彼は朴訥なる語調にて諄々と語られ、客をして去期を得ざらしむる所、さすが新聞記者だけに豊談高論、人をして其の広識確論に服さしむるの概あり、十時過去る、斯て帰校着床せしは十二時

二十七日　晴天

早川順氏、当初夏陸軍士官学校受験、数日以前其の成績わかり首尾好く入学する事を得たりと、一昨々日関谷にて聞きたれば、今日早速当人及叔父に向て喜びの信書差出す、

二十八日　晴天

二十九日　晴天

福音新報代、六十二号より七十四号までの分二十八銭払ふ、

三十日　晴天

赤坂教会へ祈会の為行く、誰も来らず独り唱歌す、則ち山崎老人来る、余司会して開会、七時過田中・新島の両氏来会せりき、帰路里見氏へ寄る、貫一氏不在、暫く話し九時頃去る、

三十一日　曇天

〔欄外〕「京浜婦人大祈祷会」

今日午后雨る、会末石本氏(29—166)の一年紀を学院チャペルにて開く、陶山氏の石本氏逝去の有様に就

ての話あり、バラ氏の感話あり、后茶菓出で、なほ石本氏の遺物を見せられき、今日築地新栄教会に京浜婦人大祈祷会あり、午前も午後も満堂なりしといふ

十一月

一日　晴天　安息日

朝来唐風吹きすさみ寒気身に染む、今朝綿入を着初む、小児日曜学校二十九人、大人礼拝式に二十人、河野政喜氏説教「ゲッセマネ園中キリストの苦」てふ題にて説かる、大に好かりき、午后中□・庄田・大野・志佐・小川の諸家を訪問す、中島姉病尚改らず此三四年は一層不快なりと、気の毒なり、病人の求に応じ詩篇五十一篇を撰び朗読し祈て去る、大野様にては主人不在にて老母に会す、姉は基督教も仏教も語る所は一つなり云と、余之を説破したる積なれど彼なほ悟らざるもの〻如し、夜分「カイザルのものはカイザルに帰し、神のものは神に帰せ」といふ題にて、人君に事る義務と神に事ふる義務とを語る、会するもの五人、

二日　晴天

学院秋季運動会の為大遠足(29—167)を企て、今朝六時品川発の汽車にて金沢・鎌倉・江の島辺へ出掛られたり、普通科よりは大概、神学部よりは八人行く

三日　晴天　天長節

午前八時頃より青山練兵場(29—168)に至る、黒山の人中々に見るべからず、後背の土手に登ば権兵(憲兵)に叱せられ、到々(到頭)至上の帽子のみ拝して去る、牧・清水・田中・中島の諸家へ寄り聖書の友の大会入

場券を配布す、波多野に至り午飯馳走になり、午后家人及串戸・河の〔河野〕両氏等と十二社に遊び、しなのまちに出て同所にて諸氏と別れ六時頃帰校しぬ、遠足の諸早きは七時頃、遅きは九時頃帰らる、

四日　晴天

聖書の友大会の報知を代田村の信徒簑口氏に為す、又八十島姉へも報知す、なほ井田・庄田・菊地・大島・小川・浅岡・飯田の諸氏に入場券を配布し、帰路番町湯谷氏方へ寄りしに主人不在、五時頃帰校、前日の遠足の疲ありとて学校休業となる、余等実に御証〔相伴〕番なり、

五日　晴天

寒気大に感ず、

六日　晴天

午后赤坂・麻布辺の諸家を訪問す、山崎氏・志佐・広瀬・里見か姉等、国元親父へ書信出す、

七日　晴天

〔欄外〕「秋季聖書の友大会」(29—169)

午后数寄屋橋教会にて開会する第十三回聖書の友の大会に臨んとて、井田氏の小供を携れ二時頃至る、鵜飼・平岩・細川・津田等諸氏の聖書に関する感話的説教、及津田氏のアンナ姉の履歴に就ての話あり、閉会せしは四時半過なりき、予告には少年音楽隊の順備〔準備〕ありとかなりしもなかりしは遺憾なりき

八日　晴天　安息日

〔欄外〕「赤坂教会婦人祈祷会」

小供日曜学校三十人、大人礼拝式に二十七人、貴山幸二郎〔幸次郎〕氏「ヨハネとキリストの問答」に就て説教あり、伝道局の報告等もあり、一時間余の長説教なりき、午后七時より自分天国に就て話す、会するもの十一人、午后二時より梶氏の宅に婦人祈祷会あり、会するもの五人なりしと、

九日　晴天

十日　晴天

鼻より出血頻なり、脳の具合変と見ゆ、学校欠席す、午后矢島氏と秋葉に至る、太平二氏来り居りき

十一日　晴天

午后台町教会の祈会に出席す、会するもの三十五人、半分以上は学院及聖書学館の人なりし、今日学校へ出ず、

十二日　晴天

今日も学校欠席す

十三日　晴天

午后金曜会に出席す、井上氏の「肉体としての人類」、深尾氏の「講壇の調子」てふ演説あり、終にポペン氏の東プリンストン大学の講話ありき、

十四日　雨天

長谷川氏へ書簡認む、午后三田にて西郷の伝[29—170]（五十銭）と竹越氏の二千五百年史[29—171]を求（一円十銭）む、井田氏を見舞ふ

十五日　晴天　安息日

〔欄外〕「新島氏の実家」

子供日曜学校、会するもの三十人、大人礼拝式に三十人、清水氏説教さる、今日教会にて弁当使ひ新島氏と同道、中島まつ子の病気を見舞ふ、肺病の事とて吾々と交話さるゝ事に不自由なきが如きも如何にも疲労の模様と見受たり、暫く話し新島氏に祈り貰ひ、去て四ツ谷の山岡成斎氏の寓を尋ね暫く話し去る、氏は麻布の英和学校[29—172]、錦城学校[29—173]・明治義会[29—174]・独立女学校[29—175]等の画学教授たり、新島氏に携れられて氏の小石川の実家に到る、宅は小石川小日向台町十四番地に在り、位置も極閑清（閑静）にして家屋など古びたる上に庭の荘飾（装飾）等古風に仕立たるなど一風ありき、古風なる黒門をくゝるや薄暗き玄関あり、両人入るや十三四の小童出来り、新島の靴を取て奥に仕舞ふ、余新島氏の案内にて奥の茶の間に入る、是れ氏の居間と知らる、庭は軒下より檜・ちゃぼひば等並茂りて、地は赤土整平にして、ほうきの跡より外に一葉の木の葉も見へざりき、余座に着くや新島氏の母君いんぎんに初対面の挨拶をなさる、茶菓出で写真・新聞・雑誌出で、氏の会釈済方なし、余関谷へ行くを托して早く去る、道難なりとて良一君表町の大通りまで送らる、氏は高等二年新島氏の弟、新島氏の父君名は善之、弟を〔　　〕・源介・良一とて三人あり、なほ氏の姉もありと、夜の集会は無慮十四五人集り、自分「ノアと方舟」の事に就て話す、

十六日　晴天

貴山氏来校、大会伝道費壱円三十五銭渡す、但内二十五銭は九、十月分代田講義所より、六十銭は教会より、五十銭は十月分清水氏、

十七日　晴天

今朝ポペン氏の教授に係る羅馬書注釈の試験ありき、今宵村松・矢島・清水・宮川・河野等と「トランプ」を過遊、自分感ずる所あり十一時頃私に烽に投じて之を焼く、暫くして河野氏喫烟せむとて火をかき出す、何ぞ量らむ、青火を出しつゝトランプの焼つゝありとは！　彼一驚先づ清水・宮川の両氏を呼ぶ、両人床より出来り大騒ぎ！　室内為に大烟り、河野之を清水の室に持行き、清水之を宮川の室に持行く、而して遂に再び自分の室に来る、余等烟の為に不被眠、則ち蒔くものは収ると諦め土びむ〔瓶〕の水を潅で漸く眠る、

十八日　晴天

〔欄外〕「神学部各級談話会及其決議」

今宵六時より二階に寄宿舎内の大親睦会あり、来年春神学総出の大説教会を催す事、毎朝七時半より祈会を為す事等の決議あり散ず

十九日　晴天

ポペン氏旧約詩篇の試験を為さる、

二十日　晴天

二十一日　晴天
今朝秋葉太平二氏帰国の途に就かる、蓋しおさん〔ママ〕子同道、自分親父へ手紙送る、
二十二日　雨天　安息日
日曜学校三十五人程集る、礼拝式に二十五人、自分葡萄樹の譬に就て話す、田中氏へ行き弁当使用、二時頃より雨を犯して銀座鎗屋町の高田氏方へ行き鈴木氏より診察を受け下剤四日分程貰ふ、但し高田氏不在、其時波多野の老母・稲沢姉等の来客あり、承五郎氏足利地方へ巡廻に行けりとの事にて留守居旁々同家に泊る、串戸・河〔河野〕の両氏も来りて泊らる、舎内の祈会実行さる、
二十三日　晴天　新嘗祭
九時頃波多野を去り関谷へ行き、帰路中島姉を見舞、六時頃帰校す、此日学院と学習院とのベースボールマッチあり、学院二の敗となりし由、今日より市中大説教会開かる、
二十四日　晴天
午后三田より麻布霧町辺深谷氏を訪ひ、波多野婦人の霊南坂教会より中六番町教会へ転会の伝言を同氏厳父に為し来る、蓋し深谷氏不在なりき、
二十五日　晴天
台町教会に説教会あり、油谷〔湯谷〕氏とワデル氏の説教あり、無慮百五六十の聴衆ありき
二十六日　雨天
台町教会に戸川・アレキサンドル氏の説教会あり、雨天にも不拘百数中〔十〕名の聞手ありき

二十七日　晴天
　金曜会祈会あり出席す、先づ盛会なりき
二十八日　晴天
二十九日　晴天　安息日
　日曜学校小児女三十五人、礼拝式に二十五人、夜分十人、礼拝説教は長山万次君「聖霊」てふ事に就て話さる、夜分は千磐氏を頼む、蓋し自分欠席せり、今日は波多野峰子の誕生日なりとて招かれ正午頃行く、トランプ・投球・角力等を遊び夕飯の馳走になり、午后十時過散会、純吉氏と帰校せしは十二時頃なりき、此日波多野の親類の子女十数名と青年には里見貫一・中野威夫・青山兄弟・串戸・純吉及自分等なりき、高田氏夫婦も来られき、
三十日　雨天
　アレキサンドル氏信州へ行き授業休暇となる

十二月
一日　晴天
　寒気大に感ず、
　午后六時より長山・村松の両氏委員となりクラスミーチングを開かる、深尾氏の他皆会す、
二日　晴天
三日　晴天

四日　晴天

金曜会に出席す、荒木氏の演説「我国に於る吾人の責任」あり、批評沢山、氏の弁は気充ち音豊にして将来有望の弁舌家たり

五日　晴天

河野氏高輪の心源寺に引移、午后三田にてシヤツ一枚求む、価五十五銭、学院セコンドチヤンピヲンと慶応義塾のセコチャンとのベースボールマッチあり、学院事彼七に対する十四の七イーニングの勝となりし由、大森の鈴木葆氏来京、余を訪れしも不在にて不会、氏は余が為に曽て余が志穂子の石碑の事に就き少々周施（周旋）せし事ありし為、カステーラ一箱を礼として置れたり、なほ岩本氏の起稿と運筆に係る石ずりを遣さる、又氏は建碑の時に当り宗教上の司式如何と余に問ひ呉よと瀧田氏に遺言し行れしとなん、蓋し志穂子の永眠せし頃は郷家に於て誰も帰教せざりし頃とて其の葬式は仏式にて行れしとなん、

六日　晴天　安息日

〔欄外〕「赤坂教会婦人祈祷会」

日曜学校三十五人、礼拝式に十六人集る、深尾君「恩恵を知るの事」てふ事に就て説教せらる、夜分は六時半より長山君聖霊の働に就て説教せられ、十一人の聴衆ありき、自分午后、牧・小竹・飯田・田中の諸家を訪ひ、更に小石川関谷に行く、同家にて大掃除あり、早々去る、今日梶氏の宅に婦人祈会あり、九人集りしとなむ、近来の盛会なり、

七日　晴天

〔欄外〕「赤坂教会連夜説教会」(29—176)

午后六時半より市中連夜説教会の規定通り、当赤坂教会に於ては羽原亨(29—177)・ワデルの両氏説教さる、羽原氏は「イエス・キリストを衣(称カ)よ」てふ主意にて懇切なる励めあり、后ワデル氏は「かぎりなき生命」てふ題にて得意の雄弁を振われたり、斯て閉会せしは九時頃なりき、今夜集るもの三十三人、

八日　晴天

午后六時半より福田・水芦の両氏説教さる、水芦氏先づ初に保守・革新・折衷の三派てふ題にて雄舌を振はれ、次に福田氏は余が福音を伝ふる理由てふ題にて懇切なる経験的説話を為さる、閉会せしは九時少し前、今夜集るもの二十四人、帰校するや小田君越后より来り、長山の室にて十一時まで話す、

九日　晴天

今宵品川教会に連夜説教会あり、熊野・ワデルの両氏話され、百名近き聴衆ありたりとなん、

十日　晴天

今宵も品川に説教会あり、タムソン・北郷の両氏話され、六七拾名の聴衆あり、余も出席せり、今朝河合氏に出産あり女子なりと、母子共に無事、

十一日　晴天

十二日　晴天
午后二時目黒より汽車に投じ角筈村大儀見氏を尋ね、尋ね当らず空しく去て小石川関谷に行き、波多野より貰ひたる衣物仕立てありしを貰ひ、帰校せしは九時過なりき
十三日　晴天
午前七時半出校、芝山内の井田氏の小供衆を誘ふに既に先発され飯倉にて追付く、日曜学校集るもの四拾人はかり、礼拝説教は長山君天国の話あり、会するもの二十人ばかり、中島姉を訪ふ、同前、午后番町綱島氏方へ行く、夫婦とも不在、蓋し昨日も両人とも不在なりし、是れを以て見るに氏はよく訪問を務むるもの〻如し、しかも夫婦総出なるは大に余人と異る所といふべし、用事は里見の依嘱と旁々高談を承り度かりしなり、序に波多野へ寄りしに家内中不在、大森辺へ遊散〔遊山〕に出掛たるなりと、夜分の説教七時より会開〔開会〕、自分聖書の話を為す、会するもの十四五人
十四日　晴天
宮川巳作氏余室に移る、今宵井田とし子に詩篇の暗誦を差上ぐ、午后三時十五分より石原氏の牧会談〔29—178〕ありき
十五日　晴天
ポペン氏の授業はじめ諸氏の事業休む〔授業カ〕、但し試験前に托して
十六日　晴天
十七日　晴天
ポペン氏の新約羅馬書の試験ありき、今日加藤敬三・羽柴新吉の両氏へ聖書の友を進呈す、又リ

フレットを高田へ送る、

十八日　晴天

ポペン氏の旧約の試験及井深氏の教会政治の試験ありき、

十九日　晴天

〔欄外〕「志佐のふ子の送別会」

午后二時より志佐のふ子の為に梶姉の宅に送別会を開く、会するもの田中・新島の諸兄及八十島・大島・飯田・大須賀・広瀬の諸姉と主賓志佐姉及自分、都合九人の集会なりき、三時頃開会、新島氏司会、自分及田中氏送辞を述べ、八十島・田中・自分・広瀬姉等の祈祷あり、四時過閉会、后茶菓出で黄昏頃散会す、蓋し志佐姉は良人事此度丹后舞鶴へ栄転となり、今暮押つまりて出発の予定なりと

二十日　雨天　安息日

山内・井田氏を訪ひ、小供等は雨天なれば見合せしめ后日来る由申置く、八時五十分着堂、三十四五人の小児女来会、頻りにクリスマスの稽古さる、但し男子に如何にも不熱心にて新島氏大に心配せらる、秋葉氏聖霊の働に就て説教さる、会するもの十九人、午后菊地氏・庄田氏・宮崎氏等を訪問す、菊地氏にては主人公にも面会す、氏は伴直之助氏(29—179)に似たり、種々彫刻物を拝見す、今日同家の息子長雄氏にイザヤ書五十三篇の暗誦を差上ぐ、午后七時より説教会、長山君キリストの犠牲に就て話す、会するもの七人、九時頃帰校す、

二十一日　晴天

二十二日　晴天
　井深氏の教理史試験さる、
二十三日　晴天
　午前十時より教会に行き、午后まで聖誕節の仕度を為す
二十四日　晴天
　今日も午后より鈴木・若林・浅野・牧・新島・井田氏等とクリスマスの仕度を為す、品川教会のクリスマスあり、頗る盛大なりしといふ、
二十五日　晴天　聖誕節
〔欄外〕「赤坂教会クリスマス」
　午前九時頃出堂、種々クリスマスの順備〔準備〕を為し、愈々午后七時より開会、新島氏司会にて八時半頃閉会、百合園生徒並に日曜学校生徒七十人ばかり、他に大人及来賓共都合百二十人ばかりにてかなりの盛会なりき、当夜はワデル氏にかねて説教を依頼し置きしに丁度七時半に至り氏は夫人同伴にて入来、時に先客既に満場立錐の余椅〔余地〕なかりしにワデル氏婦人と共に無断にて去らる、我等其の何が故たるかを不知、あるいは夫婦の為に態々椅子をも上げざりしが之ぞ逆鱗にふれしものなるか、さるにてもさばかりの事により憤怒すべきワデル氏なるや、吾人之を思ふに苦しむ、
　赤坂教会クリスマス執行順序、
一、讃美　　三十四　　一同
一、聖書朗読　　山田幸三

明治二九年一二月

明治二九年一二月

一、祈祷　同
一、歓迎の辞並報告　新島善直
一、讃美　一同
一、暗誦　中村栄
一、暗誦　丸山はな他五人
一、同　菊地長雄
一、同　百合園生徒
一、讃美　関・野田
一、暗誦　井田亀彦
一、演説　菊地幸
一、暗誦　牧長雄
一、文章朗読　関口ゆき
一、暗誦　牧長美
一、暗誦　堀ひで

三十三

一、讃美　七十四　中村ちよ・田中末・一同
一、演説　ワデル氏
一、祈祷
一、讃美　二百六十三　一同
一、賞品授与
一、君が代　新島善直

〔二十六日から三十一日の日記本文欠〕

明治二九年一二月

明治三十年　　神武天皇紀元二千五百五十七年
　　耶蘇基督紀元一千八百九十七年

一月

一日　晴天　四方拝

七時頃起床、一同打揃て祷会を為し了て雑煮を喫し、十時頃より年賀状を認め、后若林・小林・須貝等年賀し、午后里見へ行き年賀し五時頃帰宅、今宵自宅にてかるた会あり、里見より遠藤岩太郎氏・純吉・信吉・清子来り、若林ふじ・須貝きみ・小林氏・隣の高林・酒井の小供等の諸姉も来り十二時過まで遊ぶ、此年に賀状差上たる人、左の如し、

岩本善次（巌本善治）・綱島佳吉・新島善直・田中太郎・白石喜之助・同小滝・高田教会・田村直臣・加藤敬三・近藤虎馬・大関和・広瀬梅・須藤みや・福島三造・長谷川峰吉・桜井亮海・鈴木葆・鈴木寿・滝田信太郎・岡本菫・河合亀輔・八十島ます・串戸真佐樹・若林芳郎・里見貫一・関谷勇・宮川巳作

来賀の方々

岩本善次（巌本善治）・新島善直・田中太郎・白石喜之助・広瀬むめ・福島三造・長谷川峰吉・桜井亮海・鈴木葆・岡本菫・串戸真佐樹・里見貫一・関谷勇・野口とし・庄田長代・森田金之助・榎本福一・白戸弥之助・宮川巳作

二日　晴天

午后里見へ招れすしの馳走になり、なほかるた会あり十時頃まで遊び帰宅、着床せしは十一時頃なりき、俊三熱気三十九度半あり、風邪の勢(ママ)ならん

三日　晴天　安息日

十時半頃より日曜学校はじまり、自分・ふじ・小林氏と三組に別る、三十分間にして了り、后万国同盟会の定に従ひ、哀歌三の二十五を題詞として神の愛に就て長山万次氏の説教あり、正午后十分に礼拝式を了る、更に午后二時半より祈祷会あり、小林氏の司会にて長山・山田幸律の勧めと、里見富三郎・秋葉太平二・市川・鈴木氏等の祈祷あり、后自分の感話あり、四時頃散会、日曜学校に小供二十人ばかり、礼拝式及大人聖書研究会に大人二十三人づゝ、当日は蓮沼より秋葉さく子被参、又富田よりは浅野とう子被参、午后上大蔵村に説教会あり、自分及長山・小林の三人にて一時間余話し九時半頃散会、十一時頃帰宅す、今宵の集会は至極真面目なる聴衆十五人ばかりあり、頗る甲斐〳〵しき集会なりき、是より前夕飯の時若林にてすしの馳走となる、なほ今宵はかるた会もありし由、

四日　晴天

午前九時より長山・遠藤・里見の三人と共に浜見物と出掛く、十一時半秋葉氏方へ着、同家にて午飯の馳走となり（まぐろのさしみに豆腐に山鳥の露(汁)）、二時頃まで話し、それより海岸に下り小時詠(眺)め、再び帰途に就き今関氏宅にて義一郎氏に会し直に去り五時頃帰松、夕餐にしるこの馳走あり、六時半より教会に行く、初週祈祷会今宵より始まり小林氏司会、「感謝と謙遜」てふ趣

意にて先づ盛大なる集りなりき、会するもの十五人

五日　晴天

長山氏午前より里見へ遊に行る、俊三を加藤先生に見す、風邪の為飲喉〔咽喉〕を損ひ居るなりと、今宵も教会にて祈祷会あり、「公同教会」の為に祈る、司会自分、会するもの十二三人、長山君里見へ泊る、八時半頃より里見へ行き、歌かるた会を十一時過まで遊ぶ、

六日　晴天

昨日石田氏夫婦来松、平三郎氏は今朝出京の途に就く、今日は初週祈祷会を蓮沼秋葉氏方に催され、当地よりは小林・里見純吉・同光吉・鈴木鐸の諸氏出掛られ午后五時半頃帰られたり、今日自分須貝に天ぷらの馳走に招れたれど思ふ所あり行ざりければすしを送られたり、宅にても夕餐にすし出来、若林老人・小林・里見兄弟等と共に会食す、長山は十時に、自分は十一時に寝に就く、母は羽織を仕立てんとて十二時過までも夜なべを被致たるが如し、

七日　雨天

〔欄外〕「上京」

五時頃目醒む、家人は既に起きて何呉となく居間及台所の方にて物音さす、政も和嘉も福も立ち騒きたる、長山起き自分も起き、少し雲〔曇〕り気味なれば戸外も未だ暗し、ランプにて井戸側に面を洗ひ、手荷物は昨夜ちやんと整へ置きたれば、直に食事に掛る、食事には手廻もよく豕〔豚〕肉のなべにて割合の馳走なれば心地よく喫しぬ、食事を了るや六時十五分前なり、しかも空模様如何にも覚束なし、家人は空模様に托して今一日留在せん事をいふ、余はもし雨天ならば大網より汽車に

投ぜんと心に思ふ、長山なるなら成田道へ出んと思ひたるする（ママ）程に、余は不決断は事に成非（成否）、便不便よりもなほ忌ましき根性と思ひ、六時をうつと共に父母及諸兄弟に暇乞して家を出づ、戸外も未だ薄暗く人の面も判明せざりき、和嘉・良一・福に負はれたる政も土屋の角まで見送らる、政も一同と共に左様ならと別語を投たる、余応答して顧みもせで塩見坂に曲る、是より柴山・小池・三里塚を経て成田町に着せしは丁度十一時なりき、芝山より小池へ出んとして牛熊の堤の方へ間違ひ、人に教へられて再び芝山駅を経て小池に出づ、小池にて空模様大に改まり快晴とならんかの如くなりしも、三里塚をはづれむとする頃より雨り、成田の堂の前に来るや頻りに雨り、ついに不得止唐傘を求む（二十四銭）、仁王門より堂に登り頂上の公園に行き望洋閣（30―1）に腰うち掛け、母が整へたるすしまがゐの便当（弁当）を喫す、蓋し該公園は昨年とやらの設計に係り、この望洋閣は九尺二間の手軽なる小舎にして八畳分ばかりの間あり、奇麗に掃除しあり、房の中間に望洋閣てふがくあり、公園の休憩所と知られたり（此時まだ佐倉へ泊るとも千葉へ泊るとも極まらず大概は千葉泊にせむ哉と予想し居りたり）、可なりの雨を冒して成田を出発せしは十二時十五分、時に馬車屋の人乗車を勧むるに佐倉まで二十九銭にて乗せむと、長山曰く一里八銭とは高しと拒絶す、坂町を登り詰るや、長山路の悪しきに避役（辟易）し乗たさうな容子見へき、されど町を出て村路に掛るや存外の好路にて再び安心したり、さる程に雨路なれど頗る好道路なりければ三里の歩行も長丁曲歩（長汀曲浦）の歎呟もなく三時半頃佐倉へ着す、佐倉より一里半ばかり前手（手前）にて一茶店に憩ふ、老母居り会釈す、長山団子を取る、自分又ぼたもちを喫す、三銭五厘の払ひに四銭置き得意然としてさる、是より間もなく中川村に着く、村裏に大湖を見出す、是なん所謂印旛沼なりき、中川村

の台は印旛沼を見晴らすに最も適せり、酒々井村に来り道路頗る悪く、佐倉へ着てより町の半ばまで進み左方に入り停車場に出んとするや道路また悪し、成田より来り停車場へ入らんとするまでの佐倉は頗るみばゑなき町なり、思ふに大災后の故にやあらむ哉、一時間程まちて四時半の汽車に乗らむとす、長山曰く東京まで行ふと、則ち東京行の切符（四十銭）二枚を取る（是より前柴山にて余は今日中に東京まで行ん事促せしに、長山は佐倉か千葉泊にすべし、なるべくは東京まで二泊もしたしと言れたり、而して余は佐倉の停車場へ来るまで長山は頻りに佐倉か千葉へ泊まりたがり居るなと思ひ居たり）、汽笛一声佐倉は陰雨の中に見過し去り、半時にして千葉に着き、六時十五分東京本所に着、本所立川通を両国の烟花を見ながら通り、両国にて長山が一膳めしを喫するを待ち、其の悪味を口直しせんとて辻売りのもち屋に入るを待ち、鉄道馬車に投し新橋に下り、角のしるこ屋にてまた〳〵しること雑煮を二杯づゝ喫し（六銭）、徒歩帰校せしは九時頃なりき、

八日　晴天

午前は長山と入浴し、午后六時より長山及若林等と教会の祈会に行く、会するもの田中・新島・須藤・大島・飯田・長山・若林及自分の都合九人なりき、新島君司会、内国伝道の事に就て祈る、及広瀬姉

九日　雪天

午后若林氏と教会祈祷に行く、会するもの新島・広瀬・飯田・若林及自分にて、自分司会、「学校及教育」の事に就て祈る、

十日　晴天　安息日

長山・若林氏等と教会に行く、礼拝式に会するもの二十人、長山氏同盟会定題の説教「神より出る安心」てふ主意にて説かる、夜分また自分及長山の両人にて説教す、自分は基督教は生命の源たる事に就て、長山は実験的信仰に就て説かる、今日中島・田中・大野・大島・井上・牧・飯田・小竹氏等を年賀す、里見にて夕飯馳走となり、丁度石田・里見叔父・中野威夫氏等居り囲碁なぞして去る、

十一日　晴天

年賀の為め先づ高田群司氏の宅に至る、おさく様昨暮より少々不気元〔不機嫌〕なる由、併し今日起きて居られき、当家年賀のしるしにパン二十五銭を遣す、去て番町波多野に来りしは十二時過にて、串戸・河〔河野〕の両氏にも会し、同家にて昼食馳走となり二時去て、関谷に至り雑煮の馳走となり四時同家を去り、鏡より鉄道に乗り新橋に下り、徒歩二本榎秋葉氏方へ来りしは午后六時半頃なりき、皇太后陛下〔30―2〕御危篤の由承る、昨夜広瀬姉より台町の大西氏方に居る合田姉に届くべき金子を忘れたり、今宵漸く届く、蓋し今宵は波多野にても余等の参りしを好機なりとしてかるた会等催され、関谷に行く時も叔母を態々招く様伝言を托されし位なりしに、右忘却の為不得止夕方までに帰校せんとせしなり、秋葉氏に来るや里見純吉氏及矢島・今関の諸氏も帰り居りき、長山と来り居りしが、矢島は当家へ泊り風気にて早寝し、長山は一歩先帰校され、余も若林・秋葉・今関氏等の在に□れ、純吉氏は叔父より三月以后の方針に就き手詰の談般〔談判〕に被及たり、

十二日　雨天

〔欄外〕「皇太后陛下崩薨す」

午前一寸里見叔父を秋葉氏に訪ひ托〔託〕物なし来る、彼は十時半頃帰途に着けりとなん、彼今朝も曰く純公の事に就ては困るなア、其元も大森へとはあまり陰気だなア云々被申、皇大后〔皇太后〕陛下御崩去の由発表さる、事は昨十一日午后六時なりと、学校五日間の休業となる、

十三日　曇天

午前より純吉氏と先づ六本木へ行き午飯の馳走となり、波多野へ行き家人居らず、暫し憩ひて神田錦町看護婦会に大関和を尋ね、同所にて里見に別れ、恰もよし近藤君在り、一時間ばかり話し天ぷらそばなぞ馳走となり四時半去り、近藤氏の寓に到り夕飯馳走となり、飴を貰ひ六時半頃去り、関谷へ寄り雨を冒して帰校

十四日　雪天

昨夜より雪降ること頻りにして八寸余積りたり、散髪や入浴なぞして一日ぶら〳〵暮す、

十五日　雨天

午后六時頃より三田に散歩し、赤坂へ廻らんかと思ひしかど、泥路を厭ひ見合す、

十六日　晴天

午后伊志田氏入来、秋葉せい子も同伴されパん・かたくりなぞ調へし、せい子は先に帰られ、伊志田氏は八時頃まで被遊、但し純吉・芳郎・長山等も来り囲碁す、

十七日　晴天　安息日

頃日は陛下御崩の為謹慎の折柄なれば日曜学校も遠慮の為讃美歌の稽古だけは休み、新島氏一席のお話をなされ散会となる、会するもの二十人、礼拝式は自分「弔意の精神」てふ主意にて説教す、会するもの二十人、田中様にて夕の弁当を長老宛の馳走となる、午后七時よりまた自分「聲者の眼を開きし此人にして彼を死なざらしむる事能はざるか」てふ題詞にて神の恩恵的奇跡に様々の順序あることを話す、会するもの十五人、帰路三田にて一葉全集(30—3)を求めたり、昨夜大きな地震入る、

十八日　雨天

アレキサンドル氏の新約聖書神学の講話今日より始まる、竹林寅蔵(30—4)氏、昨暮高知より福井へ転じ、今度また仙台の方へ行くなりと、今日来校、但し妻君は聖書学館へやりたりと

十九日　曇天

竹林氏には妻君・息子引携れ今宵本郷の旅宿へ行き、明后日仙台に出発するなりと、五時品川出発に際し彼処まで見送る

二十日　晴天

井深氏差支ありとて休まる、なほ今週一杯はモット(30—5)氏入来の為教授し難となん、今夕六時より当室にクラスミーチングあり、柴山・清水の両氏委員となり、清水氏司会にて矢島氏の励めと深尾・矢島・山野氏等の祷あり、七時半祈会を閉ぢ例の如く茶菓出で、あるいは囲碁するあり、あるいはトランプをするものあり、其うちに山下・鈴木寿・熊野の諸氏も飛入り十時頃まで盛に遊

興したり、当席に清水君勧て曰く「吾人出校実地運動の時機既に迫れり、宜敷千辛万苦の覚悟なかるべからず」と、又矢島君曰く「吾人は運動の計画を過大に失するの誤りに陥るべからず、宜敷謹慎以て近きより遠に及ぼすの流に出づべし」と、今朝九時過、矢島・長山の三人にて田中で写真を取る〔撮〕(30—6)、当所にて長山に別れ、矢島氏と警醒社に行き井上姉の讃美を求め、更に聖書の友の会社へ行き、親父より委任されたる聖書の友の会費一円六十五銭と矢島氏よりの委托〔委託〕金を払ひ、帰校せしは十一時半、矢島氏に托しワ井コフ氏よりサッポートを受取る、

二十一日　晴天

宮川氏と午后三田に散歩し、帰路フレンド教会の祈祷会（六時半より七時半まで）及教理講話を（七時半より八時半迄）聞き、九時頃帰校

二十二日　晴天

ポペン氏事故あり休まる、自分午后三時より三田に出でホフデングの心理学を求め、井田・梶姉等に来る日曜日の婦人会の報知を為し、会堂番山崎氏方にて夕の弁当を食し、赤坂病院の広瀬姉を訪ひ婦人会の打合を為し午后六時頃帰校、今宵神学部講堂に於て万国青年学生会の委員モット氏の青年設立〔ママ〕の奨励及其目的、現景に就て一時間余に亘る説話あり、其の大略左の如し、

World	American	1 To Unite
Student	British	2 To Win
Can	German	3 To guard
Federation	Scandinabian	4 To □□□□

明治三〇年一月

Indian　　5 To Train
Australian
South African
Chinese
Japanese —　Student young men's can
Asosiation union

二十三日　晴天
若林ふじ子は去る十一日里見純吉氏と上京、入歯の為昨今まで滞在、大に秋葉氏の厄介に相成被居しが、今度入歯も恙皆出来上りたればとて矢島氏と同道日本橋田中に行れ、二三日の中に帰国するなりと、就ては自分等へ海苔及和嘉への進物として安田姉の手簡と真影と志代子姉の手簡を送りたり、又過日近藤氏よりの到来物なる飴をも送りたり、

二十四日　晴天　安息日
〔欄外〕「赤坂婦人会及評議会」
小供二十五人程集り、大人二十人程集る、自分「全き心をもて信せば可(ママ)らん」てふ題詞に依り説教す、午后二時より梶姉の宅に赤坂教会婦人会を開く、会するもの大島・梶・大須賀・松本・高井・広瀬・八十島及梶姉の下女一人都合自分共に九人、広瀬姉司会なされ、自分先づ信者が諸集会につとめて出席する事の有益なる事に就て話し、次で左の件々を議決す、
一、婦人会開会の度数を今まで毎月一回のところ、以后は毎月二回開会すべき事、

一、第一回をば毎月第一日曜日午后二時より梶姉の宅に開会する事とし、第二回をば毎月第三日曜日午后二時より会員諸姉のお宅に於て順番に開会すること、

一、第一回の会には何か定て聖書の講義を為す事、第二回には感話及祈祷会を専らとする事、

一、年に二回ばかり婦人の為に有益なる演説講話の集りを催すべき計画を為し、又之を実行する事を以て婦人会の事業の一と為す事、

なほ此外に、ホイトニー氏[30—7]の計画に係る毎月二回木曜日の午后開会さるべき聖書研究会に本会々員にして出席されべ[ママ]き見込あるべき哉否哉に就て評議なりしに、二人の外覚束なしとの事にて此事は未決として、終りに広瀬姉の祈祷及主の祈祷を為して閉会す、時に午后四時半なりき、又当日、本会の集金箱を開きしに現在金二円五十七銭五厘なりき（但し左の如き添書ありき、曰く二十六年十二月改壱円七十銭、同二十七年十二月改二円十銭とありき）、午后七時より自分「税吏の赦罪」に就て語り、なほ長山氏も語らるべきの所時迫りたれば止たり、会するもの十二人、

二十五日

二十六日

二十七日　晴天

亜氏の日課を休み、築地のタムソン氏に教会伝道者への徐[補カ]助金談合の為訪問し、更に小石川関谷へ行き理吉に面会し、午后九時半頃帰校、蓋し理吉は今般年期[年季]奉公の期限明たれば一度帰国する由にて、種々相談の事柄あらん乎と会合せしも大した事もなく、先づ縦前[従前]の如く再び川辺氏方に

働く積になすと聞く、而して彼は明日帰国すと、又関谷の叔父は来る三十日頃国葬の為西京へ出張する筈なりと、帰路郡山氏を赤坂病院に尋んとせしも夜分なりとて面会を謝絶されき、

二十八日

二十九日　晴天

午后赤坂病院に郡山氏を訪問ふ〔ママ〕、氏は頗る経過宜敷、既に床の上に座り居りき、余祈祷して去る、教会の祈祷会に至るや間もなく季〔李〕黄相氏入来、暫く氏と談ずるに、氏未だ洗礼を受すと雖も頗る確き信仰あるもの〻如く、又性来極朴直にして手答ある晴れの人物と知らる、氏の信仰は全然実験上に根せるもの〻如し、ことに氏は昨年九月朝鮮より渡来して今日に至るまでの歴史を語りしが、其の間の万事好都合に運転せしは正しく神の大能によるならんと喜び居られき、自分司会、田中氏の励めあり、広瀬姉の祈祷ありて閉会、今宵会するもの八人、

三十日　晴天

若林君昨朝より「肋膜きんせう」に罹り大部苦み医師の注意により入院することに決し、自分午后赤十字社・慈善病院・東京病院等を問合せしに何れも首尾よく談合まとまらず、ついに赤坂病院を問合見る筈にして今日は其まゝになし置く、病人の友人諸氏の看護見舞等に懇切なるは感心したり、

三十一日　曇天　安息日

午前赤坂病院に到り若林氏入院の諸般を高井氏に計り談合纏り、去て教会に至り礼拝式に列す、会するもの十九人、長山君説教さる、余帰校三時頃より寒風を冒して芳郎氏を車に乗せ赤坂病院

に入る、途中も無事にて入院后夜分に到りても頗る好容体なりき、高井医師の診察によりても高山医師と同断肋膜に係りたるも、まだ水なぞもつ程にいたらぬ故、案しる程の事にも無之れど、今明日の看護こそ大切なりと申されたり、又入院料は今月より五十銭一日の費用なりと、午后宮川氏来り説教せらるゝに会するもの九人、小雨を冒して帰校せしは十時なりき、帰路一寸郡山芳郎氏を一寸見舞ふ、

二月

一日　雨天

矢島氏午后若林氏を見舞に行く、頗る快方なりと、

二日　晴天

芳郎氏の事に付き国元親父へ手紙出す、本日皇太后の発棺式[30-8]なり、しのゝめ停車場より御乗車被遊たりとなん、午后一時より赤坂病院に若林氏を見舞、頗る快方なるを見、三時去て中島まつ子を見舞ふ、姉は一層増病大に疲労の跡見ゆ、聖書を読み祈して去り、五時頃波多野へ行き十時頃までおはぢき・おしゃぐりなぞ遊び、真佐樹氏と共に帰去、帰校せしは十一時五十分なりき、当夜承五郎氏より金五円拝借す、当日広瀬姉若林と郡山に卵の折を見舞として遣すに余の手を経さす、蓋し他人の方を憚なり、奇特の事にこそ、

三日　晴天

四日　晴天

五日　晴天

午后五時より祈祷会の為赤坂教会に行く、会するもの七人なりき

六日　晴天

午后一時より里見と同道、先づ赤坂病院に若林氏を見舞ふ、同氏日一日と快方に赴き、今日より床上に起き隣室なぞへも遊に行る程になりしとなん、丁度今河〔河野〕の氏等もなりき〔ママ〕、当院を去て綱島氏を訪問し学院青年会へ演説に来らるべき様談合に及ひたるに、初の程は断られしが如き口ぶりなりしが、里見何か彼と談合の末、遂に月末二十七日の午后三時頃来校の承認を得、去て女子学院に石本の娘へ届物を為す、里見と牛の引かるゝ善光寺まゐりをやらかし波多野へ着せしは五時半頃なりき、当家にては老母様事、数日前より腸胃の病起り着床なされ居りき、但し大した事もなきが如し、扨て六時半よりか歌かるた会は初〔始〕まり一時に仕舞、それより入浴やら談話やらにて彼此二時過着床、二階六丈へ五人相臥せたり、今宵会合せし諸氏は次の如し、青山幸信・里見貫一・中野武夫・純吉・串戸の諸氏及中野の娘及力なりき

七日　晴天　安息日

朝九時半起床、直に駆出し教会へ着せしは十時十分、時に新島氏は講壇にありて司会の最中にてマクネヤ氏も既に在りき、マクネヤ氏は哥林太后〔哥林多後〕の四の五を以て「主なるイエス・キリスト」に忠事すべしとの説教なり、后晩餐式を執行され十一時四十五分頃全く会を散しぬ、此日会するもの二十二人、午后二時より婦人会例会を梶氏の宅に開く、会するもの須藤・広瀬・梶・大島・大須賀及自分位にて、広瀬姉は創世記を一章より三章まで講談せられたり、午后七時より長山君説

教さる、会するもの八人、
八日　晴天
埋棺式の為学校休業、(30—9)
九日　晴天
風邪の気味合なれば臥床、
十日　晴天
若林君赤坂病院より退院す、
十一日　晴天　紀元節
十二日　晴天
〔欄外〕「烈寒」
自分身体の具合宜敷からず、一日臥床、午后一時半より普通科チヤペルに於てマコーレー氏の葬式あり、了て青山へ埋葬さる、会するもの無慮二百五拾余名、此一週間の寒さは寒暖計平均三十度位なりき、(30—10)
十三日　晴天
〔欄外〕「河合亀輔氏帰京す」
今日も一日臥床、今日は大きに春めきて暖かなる天気模様なりき、河合亀輔氏帰京す、
十四日　晴天　安息日
自分なほ風気さっぱりせず、奥平氏をして教会の説教被致様依頼す、会するもの二十二人なりし

と、又夜分は矢島君説教さる、会するもの十五人程なりと、此快晴なりし故、午后河合氏を訪問し台湾の事情やら種々御高談承る、

十五日　晴天

午后五時より芝公園の井田氏及田中氏等を訪問し、河合氏招聘の為相談会を開会し度に就、時日を相談す、之れ河合氏の請求に係る、田中氏へ行く前梶氏を訪問し一時間ばかり談ず、氏今や綿布会社を去り鹿児島のある会社に招聘せられたるも事談捗取らず、自ら曰く「日本に一人の不生産的の人間か殖へた」

十六日　晴天

十七日　晴天

十八日　晴天

午后六時頃より河合氏の寓にて同氏を招聘する事に関し、教会の有志井田・田中・新島の諸氏会し午后九時までグツ〳〵間原なる談合あり、とかく捗取ざりしが、是より前自分が河合氏の意を井田・田中・新島等の諸氏に通じたると、今宵河合氏か諸氏の面前にて告白せし事と大にちかひ、今宵の所にては氏は断然渡台の決心にて、会合の目的は教会の善后策に就てなりとの事にて、一同然らば談合后日にゆずるべしとて相別れたり、北風の寒烈極て身にしみ、諸氏の為気の毒なりし、自分茶菓拾銭驕る、

十九日　雪天

〔欄外〕「雪ふる」

今日十時十五分井深先生の厳父宅右衛門氏永眠せらる、昨今と両日毎週植村先生の宗教哲学の講義ある事となり昨日より始めらる、午后一時理吉入来、夕飯を与へ其后六時頃品川より帰路につかれたり、彼は去る十七日上京せりと、二時頃より雪ふり大に積り、為に教会の祈会にも不参、

二十日　晴天

午后赤坂へ行き、飯田様へ行き婦人会の宿を頼まんとせしに、其の時より少し前に広瀬姉も来りお話あり、お受合申たり云々と、中島まつ子を見舞、玉子二十二銭五―（十五個）を見舞として遣し、遠慮して本人にあはず、四時頃赤坂病院の浅野氏を見舞ひ、せんべい五銭程遣し去る、氏の病気はレーマチにて、入院せしより捗取たる結果見へぬ由、長山の為め縁談の周施を秋葉姉奔走中なりと、教会の事やらポルフナリ・ヲブ・ヒユマン・エンド・デバインを借る手紙を長谷川氏に出す、

二十一日　晴天

〔欄外〕「赤坂教会婦人会」

日曜学校生徒四十人、礼拝式に十九人、自分路加二十一の一―四を題詞として偉大及名誉てふ説教をなす、午后二時より飯田姉方に婦人会あり、広瀬姉に万事頼む、后に聞ば会せしは広瀬・須藤・鈴木姉等を外来とし飯田様の方々等なりしと、夜分は十二三人の集りにて自分又説教す、即ち「悔改」の意義及必要をときぬ、今日矢島氏教会に来り、帰路麻布の講義所へ立寄らる、蓋し長山氏に関る事件取調の為もかねてなり、

二十二日　曇天

〔欄外〕「井深宅右衛門氏の葬式」(30—12)

井深宅右衛門氏の葬式を台町教会に執行せらる、式は一時より二時五分に了る、石原氏司会にて左の順序にて執行せらる

一、讃美歌　会衆一同
一、聖書朗読（伝道書十二章）　貴山幸二郎
一、祈祷　同
一、讃美歌　聖書学館
一、説教　石原保太郎
一、讃美歌　会衆一同
一、祝祷　和田秀豊

式了て会衆に死骸を見するに席の后部の人々より順々に見す、二三十両の車引続き内外の教会の名士百数十名随伴す、三時半頃青山墓地に着、左の順序にて埋葬す、

一、聖書朗読（哥林太前書十五章）（哥林多）　石原保太郎
一、讃美　会衆一同
一、祈祷　和田秀豊
一、讃美　会衆一同

埋葬了て茶屋に案内され、茶菓の馳走となり、帰校せしは五時半頃なりき、今宵河合氏へ晩餐の

馳走に呼れ、里見・若林・鈴木・瀧田氏等と行く、自分中頃一寸秋葉氏へ行き、一度居合たる石原・矢島の諸氏とうたがるたを二三番なし、去て再河合氏方へより十時頃まで話し、帰校し着床せしは十一時頃なりき、

二十三日　曇天

昨夜より足利教会の長老渡辺氏なるもの先づ山野氏の許に来り、山野氏の周施〔周旋〕にて長山氏に談合に及ばれ、長山氏はなほ赤坂教会に意あり、該教会より断然之沙汰なき中は渡辺氏へも返答出来ずと、自分の帰校を（昨夕）待ち居られしが、余は長山氏を以て赤坂に不適当と認め、特によし自分独り彼を受入るゝとしても即時の返答に及難れば、断然言張て足利の方へ行くべき様決定さるべき旨長山氏に申渡しぬ、而して長山氏は今朝渡辺氏に応諾の決答さる、午前秋葉姉一人なりし所にて、同姉より親しく同姉が長山氏の奔走しつゝある事情を承る、午后二時より目黒より渋谷まで汽車を利用し、新島氏を駒場の農科大学構内[30-13]の学舎に訪ふ、時に午后三時半、新島氏不在、同室の人吉田氏なるものゝ会釈を受け、夕飯なぞ馳走になり夜分まで相待つ、斯て七時頃新島氏は帰宿、余早速長山氏の事情相語り、話の序に秋葉氏の周施〔周旋〕に係る長山氏対亀井姉の縁談沙汰を物語る（余は如斯事を未だ曽て何人にも口言〔公言〕せし事なかりしが、今宵は如何なる積か知ず〳〵新島氏に話し、后にてあまり軽率の嫌ありしかと悔みぬ）、八時頃新島氏に送られて青山近くまで来り、特に野口の打ちんをまたかりして帰校せしは十時頃なりき、

二十四日　晴天

午后矢島氏と同道、銀座に散歩旁々行き九時頃帰校す、長谷川君に上京・赤坂教会に動くの意な

きや如何と問合す

二十五日　晴天

午后二時より番町波多野へ行く、家人みな不在、高田の直ちやん、はしかにて重態なるを見舞に行りと、只峰子丁度学校より帰り、今お茶とおやつをすましたといふ所なりき、彼の女は小公子(30—14)と日本お伽噺を膝前に並べ居たり、彼の女は前記の次第にて老祖母と母君の高田様へ行れし事により、目前の本、ことに小公子の話なぞなされし、小公子は最も面白く読みたり……、此間は大森の方へ遊に行き云々なぞ種々会釈のお話多かりき、其うちに彼の女は奥の茶菓子を取出で、かねて稽古のうす茶を馳走せんなぞと、なにくれとなくアンアフエクショネートリーなるもてなしの態度可愛敷思ひぬ、午后五時頃彼の女は常用の牛乳を女が持来るを飲み、余は用意の弁当パンを喫しつゝ彼の女と炬燵を境に物語り、ついに金子弐円を封して峰子に托し家人に届させ、彼女と下女等に送られて帰参せしは五時半頃なりき、銀座高田氏へより直ちやんを見舞ふ、今日は大に快方なりと、暫く話して去り、教文館にてTheory of Human progressionを一円十銭にて求め、更に足を赤坂に転し、先づ此間不参なりし大島姉を訪問し無事なりと聞き、田中氏を訪問し、河合・長山・矢島氏等の話より長谷川氏の談に及びしが、結局田中氏は余に留まりては如何と促され、余も幾分意なきにも非りし故、一応勘考致すべしとて別れ、十時頃帰校しぬ、

二十六日　晴天

二十七日　晴天

二十八日　晴天　安息日

日曜学校に会するもの四十人、礼拝式に二十二人、河合氏説教され専ら台湾伝道の話を為さる、午后中島まつ子を訪問し祈祷して去る、当日は彼女も最早物語るの勇なく黙答さるのみ、夜分自分新生の事に就て話す、会するもの十四人、

三月

一日　晴天

二日　晴天

三日　晴天

〔欄外〕「中島まつ子逝く」

四日　晴天

本日稽古終へ帰宿せんとするや河氏〔ママ〕はがきを渡さる、則ち広瀬姉より来りしが如き書風にて、中島まつ子事昨日午后九時半頃安々と永眠せりとの報なり、なほ直に来れとあり、早速夕飯を食し出掛く、先一応病院の広瀬姉を尋ね大略の様子伺ひ、七時過中島様へ伺へば、親戚町田氏はじめ三四の隣人及求道者の如き人々ありき、自分老母よりまつ子の履歴を聞き八時半頃去る、それより田中氏に到り葬式の説教者の事なぞ相はかり、石原氏を頼み来らんと決定し、九時半頃同家を去る、帰路雨学校の近所にてふる、

五日　晴天

〔欄外〕「中島まつ子の葬式」

昨夜は中島姉の履歴を認め一時頃まで深し〔更かし〕、今朝並に起き先づ石原氏の許に行き中島姉葬式の説教を依頼せしに直に快く承諾せられ、帰校すれば昨夜出されたると見へ、田中氏より雨天なれば石原氏を依頼する事は見合べしと申来りぬ、彼此する中に十時となり、急で赤坂を指し一寸飯田様へ言葉をかけ、十一時頃中島氏へ行き、直に麹町教会に行き棺の蓋を借り来り、一寸田中様へ行き田中氏と同道中島様へ行く、時に諸兄姉の会葬するもの十四五名あり、自分墓表〔墓標〕を認め、一時半頃田中氏司会にて左の順序を以て葬式の会を開く、

一、讃美　百四十四　一同
一、聖書朗読　伝道書十二章　田中太郎
一、祈祷　同
一、履歴　山田幸三
一、説教　石原保太郎
一、祈祷　同
一、讃美　一同
一、祝祷　石原保太郎

二時半式了り直に出棺、日暮しの〔　　〕寺に埋葬す、墓地へは会主中島某（まつ子の兄にて盲人、琴の師匠になりとかいふ）はじめ親戚の方こと中島姉の親友〔　　〕姉・大島・広瀬の

諸姉及自分にて、身内の方は門前より乗車されたりしが、后の三人には余学習院前にて車を頼み乗らす（一ツ十五銭の割合にて）、自分は徒歩にて行んとせしに少々后れたれば三崎町より飛乗す、しかし小石川にて追付く、斯て四時頃日暮に着、直に埋葬す、則ち左の順序にて

一、讃美　百九十二　一同
一、聖書〔ママ〕　哥林多前書十五、三十五以下　山田幸三
一、祈祷　同
一、讃美　一同

四時五十分頃全く埋葬し了り花飾りの輪を墓表〔墓標〕に通し、尺経の輪と十字架を墓表〔墓標〕の前に安置し、先づ会主中島氏に墓表〔墓標〕及飾等をざくらせ、一同敬礼を表して墓前を去り、一先づ寺院の待合に休息しパん菓子を喫し、大島・広瀬の二人と共に北風凛々たるを背負ひ飛か如くに帰路に就き、やがて麹町にて大島姉に別し頃は七時半頃なりき、斯て一ツ木にて新島氏に会し、則ち長谷川氏の手紙を渡し、ワイコフ氏の牧氏に関する事を話し、氏明日来校すと聞き別る、広瀬姉午飯なしときゝ自分も同様なれば夕飯を喫せんと両人して田町の牛肉屋吉田屋支支店に登り、両人して二人前半の牛肉を喫し二十四銭取らる、蓋し自分二十二年の秋出京、凡人と共に携られて牛肉家〔ママ〕に登りし事、今宵ともに都合五度、則ち第一は出京早々和知氏と新栄教会に行き、帰路銀座にて初て牛肉屋といふものに登りき、其后理吉と共に親父に携られ三田のいろはに登り、其后関谷の叔父に携られ力氏と共に桐通の牛肉屋に登り、其后筧氏と共に麹町のいろはに登り、而て今宵は近来の珍事にて、しかも以上数度はみな人に携れられたりしものなれど、今宵は自分主人公となりて

登楼せしは今宵がはじめてなり、されば下婢何に致すべき乎と問れし時、余は一寸困りたり（后にて思へば彼の女は酒にすべき乎、飯にすべき乎の意なりしと見ゆ）、余牛肉の柔のを持来れといへば、彼女然ば御飯なりやと、早速鍋と肉を持ち来られし次第なりき、時に余と広瀬姉との談話は教会の事より遂には大関姉や常田姉の個人的噂噺に及びたりき、然し余は割合に多話せざりき、斯て八時半頃病院前にて同姉に別れ帰校せしは十時頃なりき、今日中島様まで会葬せし方々の中には田中・鈴木・飯田・大島・広瀬・〔　〕・河合きく子・石原・菊地・井上・鈴木・梶様の下女二人、其他四五の兄姉及御親戚の方々、都合二十人近くの会集なりき、是より一昨三日には中島姉危篤となるや、広瀬姉は態〳〵東京看護婦会より看護婦を頼み来り、中島姉の眠りしは看護婦の来りてより数時間后の事なりしといふ、

六日　晴天

今日午後三時より柏井氏の寓居に同級生招待を受け、茶菓及すしの馳走にあすかり七時頃去る

七日　曇天　安息日

〔欄外〕「赤坂教会婦人会／白石小滝子・同早出雄氏」(30-15)

小児安息日学校三十人、礼拝式に二十二人集る、今日より午后一時より小児組の日曜学校開会、井田・菊地・津田氏等の小供等を教ゆ、先づ当分新島氏之が教師たり、本日矢島氏説教さる、「馬太六の三十三」之れ氏がライセンスの試験に出たる説教なりき、今日は第一日曜日にて梶氏に婦人会あるべき筈にて、広瀬姉に万事宜敷様依頼したり、自分長山君と築地一丁目十九番地円乗氏方に白石小滝姉を見舞ひ、久しふりにて面会せり、姉は一層太り色黒くなりたりまて（ママ）、息子

早出雄氏には初対面なりき、彼はよくも父君に似られたり、時に近藤・白井の両氏あり暫く相話し三時頃去り、銀座にて長山に別れ近藤氏と共に駿河台まで同行、自分は里見に行く、貫一氏あらず、お伯母君に家を案内され、四時半波多野に行き夕飯馳走となり六時四十分頃去り、赤坂教会に来れば新島氏司会、和田氏既に前椅に在りき、蓋し前日余は同氏に今宵の説教を依頼したりしが故なり、氏の説教の大意はキリスト教は人の罪を療す教なりとの事なりき、八時半雨を冒して帰校、和田氏には気の毒なりき、今日一寸高田氏に直氏を見舞ひしに既に起て食事中なりき、(30—16)又丸善にて新島氏より長谷川氏に送るべきキッドのソシヤルエボリウシヨンを求めたり、

八日　雨天

九日　雨天

午后六時半頃より神学部チヤプル(ママ)に山本秀煌氏の牧会学講義ありき（徴誡）、

十日　晴天

十一日　晴天

十二日　晴天

午后三時神学教授・生徒一同影採す(30—17)、自分五時頃より祈会に行く、六時半より普通科チヤペルに青山との同盟文学会あり、井田兄弟を呼ぶ

十三日　晴天

午后二時頃田中太郎氏来校、小生赤坂就任に付きミシヨンに交渉に来り談般(談判)整へりと申来たる、

十四日　晴天　安息日

小児の日曜学校三十人、大人礼拝式に十八人、長山君説教さる、午后自分説教、八人集る、

十五日　雨天

昨日新島君に頼れ今宵百合園を教へに行く、昨日女子学院の永野姉よりヲルガンの教授をなし度し、口を見付呉と申来る

十六日　晴天

〔欄外〕「白石喜之助氏」

白石喜之助氏来校、長山の室にて話す、氏は昨夜九時頃着京すと、ポペン氏の試験ありき（ロマ書）

十七日　晴天

里見君病大に宜敷、今朝九時半頃駿河台の〔　　〕、亜氏の試験あり、今日にて全く試験了る、夜百合園に行く、

十八日　晴天

〔欄外〕「最后のクラスミーチング」

自分及山野委員となりクラスミーチングを田町の海水湯楼上に開く、自分先づ三田に行き、すし及菓子を調整し浴屋に至れば衆既にあり、間もなく十一時となり山野氏則ち司会となり、テモテ后書二章を読み、二十二・二百三十六等の讃美あり、千磐・清水・矢島の諸氏感話あり、又郡山・村松・千磐・清水諸氏の祈祷あり、十二時少し過聖式を了り、それよりかねて順備〔準備〕せしすし

及菓子を喫し、食后囲碁・トランプ等相始まり、あるいは入浴するあり放談するあり、誠に聖々して楽しき会とは此様な会なるかな、特に余が感じたるは、常々は比較的に俗気に充ち罪悪に汚れたる人々が世俗的快楽を貪らんが為に時を費す浴屋の楼上にて斯くも聖らかなる会筵を開き、聖且つ義なる天地の主なる神を讃美し、且つ祈るとは偶然にも税吏や罪ある人を招かん為に来れりとのたまひしキリストの御旨にも叶へるかといふ事なり、斯て二時半頃各々思ひ〳〵に散会したり、此日会するもの河野氏を除て十一人なりき、自分浴屋へ行く前、聖坂下にて散髪す、去る十五日、長谷川君が十三日に出したる手紙来り、今日其返事を認む、事は彼がマイフ井〔ママ〕チェアハーフペルリンのトウカンチデートとしてS.K.とO.K.をイントロデウスしたるを以て、余は答に何も可なりと云ひ、併しS.K.はロングマウンテン氏との自信ありたる直際の事故、寧ろO.K.をチョイスする旨を報ぜり、又教会員中島きよ子本所へ移転するを以て原沢氏まで同姉を紹介す、

十九日　雨天

雨を冒して百合園に行く、終て教会に祈祷会の為出席、広瀬姉・田中氏来会せられき、

二十日　曇天

神田青年会に台湾伝道報告会あり、(30—18) 午後二時より開会せられき、会集殆ど満場、初に井深氏の演説あり、次て河合・大儀見・押川の諸氏演説せられ、最后に貴山氏は義捐金を集むる旨報告せしに、会集〔会衆〕〔ママ〕ぞろ退場するもの十中八九なりき、併し大体に於て天気模様悪かりしにも不拘盛大なりき、

二十一日　曇天　安息日

日曜学校午前は少しも集なし、蓋し新島氏欠席の故ならむ、礼拝式の集り十八人、自分「信仰の父アブラハム」を話す、后、大会費・印度飢餓救済費等の報告す、午后一時より日曜学校開会、十二三人集る、同二時よりの積なりしが三時より田中様に婦人祈祷会を開き、田中ふゆ子初め大島・広瀬・須藤及自分の都合五人集り、広瀬姉司会され、自分貴任ある祈祷を為すべき事を励む、大島・広瀬・須藤諸姉の祈祷又は感話あり四時閉会す、夜分長山氏大なる事業及人物に就て説教せらる、会するもの十二人

二十二日　晴天

午后百合園へ行く、永野姉に返事差出す、

今日午后三時より井深先生の宅に招れ六時頃まで遊興(30—19)す、

二十三日　晴天

昨日よりストカル氏の保羅伝(30—20)を読むに大に面白かりき、

二十四日　晴天

唐風烈し、今朝は平日より早起に六時起き、里見への見舞状を今朝行くといふ石本婦人に頼み、又八時頃より日影町田中にて写影し、河合氏が借りたる毛布を貴山氏に帰(返)し、円乗氏方に白石小滝姉を訪問し一時間余話し、唐風に吹れつゝ帰校せしは十二時過なりき、午后三時より中台氏へ小林格氏を訪問し金子五円親父より送金されしを受取り、田中氏へ行き夕飯の弁当を食し、百合園へ行き、七時過牧氏来り早目に帰校す、

二十五日　晴天

来る二十七日卒業式なれば梶・田中・清水・波多野・関谷へ招待状出す、過日来滞り居りたる、来る七月度の大会費用一円四十八銭、昨年十月度の中会費用五十五銭、大会伝道費教会より三十五銭、清水氏より五十銭、合計二円八十八銭占切(絶)る、

二十六日　雨天

里見純吉氏の為に国元より羽織及金子七円送り来る、午后五時頃マクネヤ氏来訪、夜分来談あれと則ち八時頃同氏の寓に行く、何用かと思へばミションの会計頗る不如意にて正当に赤坂を扶助するの余裕なし、故に君は大森と佐倉を掛持にして、赤坂は泉氏に動かすること〻しては如何と、余はなほ他の諸君と談合すべしとて去る、

二十七日　雨天

朝より吹き雨り夜分に及びぬ、今日午后二時より明治学院第十二回卒業証書授与式(30-21)をサンタム館チヤペルに開く、

奏楽（ピヤノ）　佐藤・林の両姉

一、聖書朗読　ポプペン

一、祈祷

奏楽（ピヤノ入英語の歌）独吟　林姉

一、演説　偉人の感化（英語）　普通学部普通科　田中信道(30-22)

一、演説　遥に洗礼の約翰を憶ふ　神学部　矢島宇吉

明治三〇年三月

一、演説　美の力　（英語）　普通学部高等科　戸田謙二[30—23]

奏楽（バイヲリンとピヤノ合奏）　田野森・内田の二姉

一、卒業証書授与　総理　井深梶之助

一、卒業生総代　普通学部　末松多美彦[30—24]

一、同　神学部　清水久次郎

奏楽（ピヤノ入唱歌）　河村・林の両姉

一、演説　特命全権公使正五位　矢野文雄[30—25]

奏楽（ピヤノ・バイヲリン合奏）　田野森・内田の両姉

一、祝祷　稲垣教師

卒業生姓名

普通部高等科二年生　熊野春江・篠原耐・末松多美彦・戸田謙二

普通部高等科一年生　石川林四郎・森田金之助

普通部普通科　宮田寅蔵[30—26]・尾島喜久恵[30—27]・里見純吉・田中信道

神学部　千磐武雄・深尾泰次・河野政喜・郡山源四郎・村松米太郎・長山万次・柴山幾久松・清水久次郎・和田三郎・矢島宇吉・山田幸三・山野友一郎

雨天にも不拘無慮二百名程の来会者あり、午后四時半頃式は了りぬ、式後神学校[ママ]のリーデングルームに晩餐の饗応あり、学院出身の輩無慮百名程円形に着席し木村屋の洋食を喫ず[ママ]、膳部は、

パン・ビステキ〔ママ〕・野菜・菓子パン・マフ井・密甘〔蜜柑カ〕等にて、食后普通部はD室に、神学部はC室に会し、来年度より組織立たる会合を学院卒業式の式后に開会する為の相談会を開き、陶山・石原の両氏委員となる、当日矢野氏は病気なりとて欠席せりき、

二十八日　雨天　安息日

小供日曜学校出席者殆どなし、大人礼拝式に十八人程集り、長山君説教さる、夜分十二人程相集り、自分信仰に依て義とせらるゝ事を説く

二十九日　晴天

三十日　雨天

三十一日　晴天

註

明治二九年

29－1　秋葉太平二　→『資料集』第一六集、註26－55参照。

29－2　伊志田平三郎　→『資料集』第一七集、註28－44参照

29－3　里見　→ 里見純吉。『資料集』第一六集、註26－11参照。

29－4　小林格　→『資料集』第一七集、解題註（68）参照。

29－5　新島善直　→『資料集』第一七集、註28－110参照。

幸三の父幸律の日記『丙申明治二十九稔日誌』（山田家文書E－13）四月八日条には「農科大学本年卒業生ナル新島善直氏ハ長谷川亦幸三ノ親友ニテ長谷川氏の結婚式ノ為メ来松」と記されており、新島が幸三の親友であったことが分かる。新島は幸三と同じく赤坂教会の長老を務めていた（解題9頁参照）。

29－6　ヤングマン　→ ケイト・ヤングマン（Youngman, Kate M. 一八四一－一九一〇）

アメリカ長老派の婦人宣教師。一八七三（明治六）年来日し、パーク・M・Cらとともに東京築地にB六番女学校を設立。一八七七年には好善社を設立し、ハンセン病患者救済活動などを行った。のちに啓蒙小学校（『資料集』第一六集、註27－10参照）を開設するなど多くの慈善活動に携わった。

29－7　渡辺六郎（わたなべ　ろくろう　生没年未詳）

大関和（註29－9参照）の子。『資料集』第一七集、明治二八年七月一日条参照。

29－8　田村直臣　→『資料集』第一六集、解題註（5）参照。

29－9　大関和　→『資料集』第一七集、註28－94参照。

29－10　安田退三　→『資料集』第一七集、註28－147参照。

29－11　白石喜之助　→『資料集』第一七集、註28－30参照。

29－12　近藤虎馬　→『資料集』第一七集、註28－90参照。

29－13　周添祐（しゅう　てんゆう＊　一八七九？－没年未詳）
詳細は不明であるが、「井深日記」明治二九年一月四日条に「学院ニ往キ細川氏ガ台湾ヨリ携来リタル支那人周添祐ヲ見ル、同人ハ台湾嘉義ノ牧師周某（霞歩？）〔ママ〕ノ二男ナリ、年齢十七歳、漢文ヲ以テ筆談ヲ能ス、且羅馬字・日本ノ片仮名・平仮名ヲ解ス、未タ日本語ヲ解セズ、容貌温柔ニシテ卑シカラズ、一個ノ好青年ナリ」とある。解題5頁参照。

29－14　長谷川峰吉　→　解題註（21）参照。

29－15　百合園
一八九二（明治二五）年、生活困窮者の子弟を教育する目的で麻布谷町に設立された施設。設立に加わった小倉脩吉（『資料集』第一六集、註26－53参照）が初代園長を務めた。その後、新島善直（註29－5参照）が主任となり運営を行った。生徒は三〇～四〇名程で、読書・習字・算術の課目をなし、尋常小学校程度の教育を目指していたという。日曜日には赤坂教会において日曜学校が開かれていた。一八九八年四月に廃園。新島源介等編『中央学生基督教青年会史』中央学生基督教青年会刊、一九〇二年、一五六頁「百合園」の項参照。

29－16　河合氏　→　河合亀輔。『資料集』第一七集、註28－59参照。
日記明治二九年五月二三日条に「氏は大会伝道局の命により台湾へ渡行の積にて来月早々出発の予定なり」、同六月三日条に「河合亀輔氏台湾へ行く」、翌年二月一三日条に「河合亀輔氏帰京す」など、本日記には河合の台湾伝道に関する記述が散見される。

29－17　森山信一　→『資料集』第一七集、註28－88参照。

29－18　矢島宇吉　→『資料集』第一六集、註26－65および『資料集』第一七集、解題「（六）矢島宇吉と九十九里教会」参照。なお、矢島は明治三〇年四月二九日、九十九里教会において、幸三の叔母にあたる若林ふじと結婚した。

29－19　石原氏　→　石原保太郎。『資料集』第一六集、註26－31および『資料集』第一七集、解題註（21）参照。

29－20　メリケン　→　註28－129参照。

29－21　若林芳郎　→『資料集』第一六集、註26－22参照。

29－22　植村先生の確なる信仰てふ説教

説教の内容については解題6頁参照。

29－23　ウエスト　→『資料集』第一六集、註26－5参照。

29－24　長山万次　→『資料集』第一六集、註26－72、〔口絵写真3〕参照。

29－25　野村直彦（のむら　なおひこ＊　生没年未詳）

高知県出身。一八九三（明治二六）年九月明治学院神学部本科に入学。一八九六年三月に卒業後は伝道者となる。のち伊予郡松山中学校へ赴任。

29－26　ミロル　→　ミラー（Miller, Edward Rothesay 一八四三－一九一五）

アメリカ・ペンシルヴェニア州に生まれる。プリンストン神学校の研究科を修了後、アメリカ長老教会宣教師として一八七二（明治五）年来日。翌年アメリカ・オランダ改革派教会宣教師キダー・M・Eと結婚し改革派に転じた。一八九五年九月、明治学院神学部の教師に就任し、一八九六年五月まで務めた。日記明治二九年五月一五日条には「ミロル氏の送別会」についての記述がある。また「井深日記」明治二九年五月一八日条には「ミロル氏神学部講師を止め、盛岡ニ帰ル」とある。〔口絵写真2〕参照。

29－27　塚本道遠・石坂正信両教授送別会

塚本道遠（つかもと　どうえん　一八六六－没年未詳）は農学士。福岡県士族塚本通甫の次男。一八八三（明治一六）年に家督を相続し、一八八五年旧名又喜を道遠と改める。一八九七年八月、農商務省水産講習所教授兼水産調査所技師に就任。のちに実業に専念し亜細亜護謨株式会社取締役となった。石坂正信（いしざか　まさのぶ　一八六〇－一九三四）は教育者。共立学校、東京英学校（のちの青山学院）に学び、一八八三年、東京英学校が東京英和学校に改称ののち、同校の教師となる。その後、アメリカに留学。一八九四年帰国。青山学院の中等科、高等科の各科長を経て、一九二一（大正一〇）年から一九三三まで、第五代院長を務めた。「井深日記」一月一七日条には「学生等ノ発起ニヨリ石阪（ママ）・塚本二氏ノ為ニ今夜送別会ヲサンダム館ニ開ク、生徒数名各級ヲ代表シテ送別ノ辞ヲ述ベ塚本氏答弁ヲ述ブ、一場ノ好演説ヲ為セリ」とある。また、前日は教員懇親会が開かれており、「井深日記」

一月一六日条には「今回石阪(ママ)正信・塚本道遠ノ二氏我ガ学院ヲ辞シ小松緑・外山亀太郎ノ二氏新タニ招聘セラレタルニ付送迎ノ意ヲ兼テ芝橋松金ニ教員懇親会ヲ開ク、但石阪(ママ)氏ハ差支アリテ来ラズ、会スル者凡テ十一人」とある。

29－28　山野　→　山野友一郎。『資料集』第一六集、註26－71参照。
一八九九（明治三二）年一二月山野の死後発行された『福音新報』第二三四号（一八九九年一二月二〇日）には詳しい経歴等が掲載されるとともに、山野について「神を信ずること篤く、人に対しては信実親切なる人なりき」と記されている。

29－29　郡山　→　郡山源四郎（こおりやま　げんしろう＊　生没年未詳）
「神学部学籍簿」によると、一八九四（明治二七）年九月、明治学院神学部本科に入学。一八九七年卒業後は伝道者として京都に赴任。その後、会津中学校教員となる。

29－30　村松　→　村松米太郎（むらまつ　よねたろう＊　生没年未詳）
「神学部学籍簿」によると、一八九四（明治二七）年九月、明治学院神学部本科に入学。一八九七年卒業後は伝道者として越前武生に赴任。

29－31　清水　→　清水久次郎（しみず　きゅうじろう　一八六八－没年未詳）
「神学部学籍簿」によると、長野県出身。一八九三（明治二六）年九月、明治学院神学部予科に入学。一八九七年卒業後は札幌教会牧師となる。のちにオーバン神学校に留学。

29－32　千磐　→　千磐武雄。『資料集』第一六集、註26－69参照。

29－33　柴山　→　柴山幾久松（しばやま　きくまつ＊　生没年未詳）
「神学部学籍簿」によると、一八九二（明治二五）年九月、明治学院神学部本科第二学年に入学。翌年本科に進み、一八九七年卒業後は伝道者として越前福井に赴任。

29－34　和田　→　和田三郎。『資料集』第一六集、註26－73参照。

29－35　篠原耐　→『資料集』第一七集、註28－19参照。

29－36　丹毒

皮膚の外傷などから、主に連鎖球菌が感染して起こる急性の炎症。一日ないし数日間の潜伏期を経て高熱を発し、患部の皮膚が発赤して腫れ広がり、灼熱感や痛みを伴う。小児や高齢者に生じると重症の場合が多い。

29－37　承五郎　→　波多野承五郎。『資料集』第一六集、註26－13および『資料集』第一七集、註28－2参照。

29－38　細川瀏（ほそかわ　きよし　一八五六－一九三四）

牧師。高知県出身。一八八五（明治一八）年新橋教会（のちの芝教会）でノックス・G・Wより受洗、同年東京一致神学校に選科生として入学。その後、明治学院神学部に在籍。『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業前に愛知県名古屋教会の牧師となった。一八九六年横浜海岸教会二代牧師となり、一八九八年六月まで務めた。細川の横浜海岸教会就任式については、『福音新報』第三二号（一八九六年二月七日）「横浜海岸教会牧師就職式」の記事に詳しい。自伝に『小鱗回顧録』（一九二七年）がある。明治学院大学図書館所蔵本は細川から山本秀煌への献呈本。

29－39　ランヂス氏病篤く

「井深日記」一月二六日条に「ランヂス氏金曜日以来再ビ病気ノ由」、同一月二八日条にも「ランヂス教授病重ク苦痛甚シキ由ニ付臨時祈祷会ヲ開ク」とある。

29－40　横浜フエリス女学校　→　フェリス和英女学校。『資料集』第一六集、註26－94参照。

29－41　梶氏　→　梶梅太郎。解題註（1）参照。

29－42　聖書学館　→『資料集』第一六集、註26－8参照。

29－43　梶夫人　→　クララ・ホイットニー・梶。解題註（2）参照。

29－44　図書館

当時の図書館について、『神学部一覧　明治二十九年』には「図書　一、本学院所蔵ノ図書ハ七千余巻アリ学生ハ規前（規則）ニ循ヒ之ヲ縦覧借用スルコトヲ得」とあり、『普通学部一覧　明治二十七年』には「◎図書及器械　一、本学院貯蔵ノ図書ハ掛員ニ於テ保存、出納、整頓等ノ事ヲ掌リ物理学及ビ化学器械又ハ体操器械等ハ該学科担任教員コ

レヲ監理ス　一、本学院貯蔵ノ図書和漢洋大約一萬巻アリ生徒ハ借覧規則ニヨリテ閲覧スルコトヲ得」、「図書室管理　ジェームス、エム、マコーレー」とある（『普通学部一覧　明治二十九年』も同）。また、『福音新報』第七九号（一八九七年一月一日）「明治学院」の項には「明治学院所蔵の図書凡て七千余巻あり就中哲学、神学及び宗教に関する書籍に富む、恐くは神学文庫として日本第一の文庫ならん」と明治学院所蔵の図書について紹介されている。

29－45　ブルースのパラボリックチーチングヲブゴスペル

ブルースはBruce, Alexander Balmain（一八三一－一八九九）。スコットランドの牧師で神学者。*The parabolic teaching of Gospel*は詳細不明。

29－46　チーチングをふクライスト

The parabolic teaching of Christ: a systematic and critical study of the parables of our Lord. Bruce,Alexander Balmain. Armstrong, 1887.

29－47　鳩翁道話

一八三五（天保五）年に刊行された心学書。柴田亨（柴田鳩翁）が口述したものを、嗣子柴田武修が編集。『孟子』の語句を題材として、心学思想を説いた書。

29－48　駿台雑話　→『資料集』第一七集、註28－150参照。

29－49　デニーの神学入門

デニーはDenney, James（一八五六－一九一七）。*Studies in theology: lectures delivered in Chicago theological seminary*, *Denney*, James. Hodder and Stoughton, 1895のこと。

29－50　岩本善治　→　巌本善治。『資料集』第一六集、註26－20参照。『普通学部一覧　明治二十九年』によると、一八九五（明治二八）年三月より普通学部の会計を務めている。

29－51　かし子　→　若松賤子（わかまつ　しずこ　一八六四－一八九六）

会津若松にて松平容保の家臣松川勝次郎の長女として生まれた。干支に従って甲子と名付けられたが、自らは嘉志

子、かし子と書いた。若松賤子はペンネーム。一八七五（明治八）年、フェリス・セミナリー（現在のフェリス女学院）に入学。一八七七年、横浜海岸教会で受洗。一八八二年に卒業後、同校の教師を務める。一八八六年頃から『女学雑誌』に紀行文や詩を寄稿するようになり、編集人であった巌本善治（註29－50参照）と一八八九年に結婚。一八九〇年から一八九二年までバーネットの『小公子』を『女学雑誌』に翻訳連載。長らく病身にあったが、一八九六年二月六日に発生した明治女学校（註29－117参照）の火災によって同校校内に住んでいたかし子の病状は悪化し、二月一〇日に逝去した。三月二一日には、矢島楫子・津田梅子らが発起人となって追悼会が開かれた。その様子は『福音新報』第三九号（一八九七年三月二七日）「故巌本嘉志子追悼会」に詳しく記されている。また、『婦人新報』第一四号（一八九六年二月二九日発兌）では「故巌本夫人かし子の君」として彼女の経歴が約三頁にわたって紹介された。死後一八九七年一月に遺稿として翻訳小説『小公子』が博文館より刊行された。

29－52　ツルー　→トゥルー。『資料集』第一七集、註28－131参照。一八九六年四月一九日に死去。日記四月二〇日条参照。

29－53　中村茂策（なかむら　もさく＊　生没年未詳）

新潟県出身。明治学院普通学部を一八九三（明治二六）年に卒業。一八九五年、幸三が越後高田へ伝道に行った際、幸三は中村の実家を訪れている（『資料集』第一七集、九〇頁）。「井深日記」二月二〇日条には、ランディスが家族とともに帰国するため、教員・生徒一同で品川まで見送りに行ったことが書かれているが、そこに「中村茂策氏随行ス」と記されている。中村はランディスに随行して渡米しており、『普通学部一覧　明治二十九年』の名簿にも「在米国」と記されている。

29－54　熊野春江（くまの　はるえ＊　一八七七－一九〇一）

熊野雄七の長男。一八九二（明治二五）年九月明治学院普通学部本科に入学、一八九五年三月卒業、四月高等科に進み、一八九七年三月に卒業した。一九〇一年春江死去の際に書かれた井深梶之助の「熊野春江氏ヲ吊フノ辞」（当館所蔵、ID: 1201610229）には、明治学院在学中の春江につき次のように記されている。「学生トシテ何時モ忠実ニシテ一タビモ譴責セラレタルコトアルヲ記憶セズ、又君ハ性来活溌ニシテ深ク遊戯ヲ好ミ常ニ率先シテ種々

ノ遊戯ヲ試ミタリシガ就中ベースボールト柔道トハソノ最モ好ミタル所ナリキ」。

29－55　ランヂス氏への送り物

「井深日記」二月一七日条には「午後七時ランデス教授及ビ中村茂策氏ノ為ニ送別会ヲ開ク、ランデス氏ヘ送別トシテ花鳥ノ掛物、唐金ノ花瓶ヲ送ル」とある。

29－56　日本評論中の歴史上の基督と現今の基督

『日本評論』は、一八九〇（明治二三）年に創刊された植村正久の主宰誌。編集人は田中達、発行所は日本評論社。一八九四年九月まで全六四号が発行された。幸三が一読した「歴史上の基督と現今の基督」は、エディンバラ大学のブルウスが著したもので、一八九三年三月四日発行の『日本評論』第四九号に掲載されている。

29－57　デールの活ける基督と四福音書

ロバート・ウィリアム・デール（Dale, Robert William　一八二九－一八九五）の著作を松尾音次郎（霽月堂主人）が訳した『活ける基督と四福音』のこと。一八九二（明治二五）年、警醒社から刊行された。

29－58　日本文学史の下巻

三上参次・高津鍬三郎著『日本文学史』の下巻のことか。一八九〇（明治二三）年、金港堂から刊行された。鎌倉時代以降の文学史の解説書。

29－59　第十四回青山明治学院文学会

各演説の詳細な内容については、『青山評論』第六五号（一八九六年三月）所収「青山日誌」にも記されている。「井深日記」三月六日条には「青山明治同盟文学会アリ、出来ハ不出来、独リ我石川生ノ英語演説ノミ可也ノ出来ナリ」とあり、井深は明治学院神学部の石川林四郎（註29－62参照）の英語演説を高く評価している。

29－60　菱川

前掲「青山日誌」によると、英語論文「Love」の発表者は「S. Hayashi」と記載され、「林君は愛の純潔を論したるものか文章は美なり音声少しく底く明かに聞れず」と評されている。「Love」の発表者を「菱川」とするのは幸三の間違いか。

29－61　森田金之助（もりた　きんのすけ　一八七七－一九六〇）
一八九六（明治二九）年に明治学院普通学部普通科を卒業し、翌年、高等科第一年を修業。その後神学部に進み、一九〇〇年に卒業して牧師となる。在学中は学院のベースボールチームに所属。一九〇八年渡米、オーバン神学校に入学。一九一一年に卒業して大阪神学院教授兼教頭に就任した。のちにウヰルミナ女学校（現在の大阪女学院）の日本人初の校長となり三五年間女子教育のために尽力した。一八九六年一〇月二一日に起きた賄に対するストライキの首謀者の一人でもあった（本資料集131頁）。

29－62　石川　→　石川林四郎（いしかわ　りんしろう　一八七九－一九三九）
一八九六（明治二九）年、明治学院普通学部普通科を卒業し、翌年、高等科第一年を修業。東京帝国大学英文科に進み、卒業後は、東京高等師範学校教授などを経て東京文理大学教授となる。また英語教授研究所で所長のH・E・パーマーを補佐してそのオーラル・メソッドを広めた。明治から昭和時代前期の英語学者として知られる。註29－59参照。

29－63　田島進（たじま　すすむ　一八七六－一九五二）
群馬県出身。明治学院普通学部普通科を一八九六（明治二九）年に卒業した後、神学部に入学。一八九九年卒業。一九〇〇年八月に内村鑑三の薦めにより札幌独立基督教会教務主任となり、翌年八月まで在任した。その間、のちに小説家となる有島武郎（一八七八－一九二三）の教会入会式に司式者として立ち会い、以後親しい交流を続けた（『有島武郎事典』有島武郎研究会編、勉誠出版、二〇二一年、三三七頁）。その後、渡米しオーバン神学校・ユニオン神学校大学院・コロンビア大学大学院などで学ぶ。帰国後は、一九〇八年から一九一七年まで明治学院神学部の教員を務め、のちに牛込教会を牧した（『同窓会名簿』）。

29－64　「ホーサウ」流行　→　解題2頁参照。

29－65　岡山孤児院年報
『福音新報』第三七号（一八九六年三月一三日）に掲載された『明治二十八年　岡山孤児院年報』の紹介記事によると、岡山孤児院の憲法、現況、昨年中に起こった事件、会計報告等を詳記したもので、非売品であった。岡山孤

児院は、一八八七（明治二〇）年、「天下無告の孤児を救済し其父母に代りて養育する」目的で、石井十次（一八六五－一九一四）によって岡山市門田屋敷に設立された孤児院。六歳以上一二歳以下の入院を許可し、各自の労働と有志者の義捐金品によって施設を維持拡張した。

29－66　ハリス館

一八八九（明治二二）年夏、北アメリカ・フィラデルフィアの長老教会信徒ハリス父子の寄附金で、築地七番地にあった元築地大学校の校舎が白金に移築され、邦語神学部用校舎および明治学院幹事の居宅とされた。この施設を寄附者の名に因んでハリス館と称した。のちにハリス館は神学部生専属の寄宿舎と定められた。日記によると、幸三は、一八九三年九月明治学院神学部予科に入学した際、神学部生の寄宿舎であるハリス館に一旦入るが、幸三の所属する神学部予科の中から誰か二人が普通学部の寄宿舎であるヘボン館へ行かねばならず、幸三は自ら希望してヘボン館へ移っていた（『資料集』第一六集、一五一頁）。

29－67　明治学院第十一回卒業式

「井深日記」三月二八日条にも以下のような詳細な内容が記されている。「午後二時明治学院第十一回卒業証書授与等ヲ執行ス、ドクトルワイコフ聖書朗読並祈祷ス、普通科卒業生石川林四郎英語演説（上出来、題天然ノ声、神学部卒業生北野高弥邦語演説、不出来、題伝道ノ困難、証書授与、普通学部総代中根金太郎（ママ）、神学部総代島田正七、答辞ヲ述ブ、辻新次氏俄カニ故障アリ来会セズ、ドクトルハルトホルン英語演説ヲナス、音楽ハ昨年ノ如クヘージ母子之ヲ奏ス、聴衆満堂、実ニ立錐ノ地ナシ、式後茶菓ヲ呈ス、諸事好都合ナリキ」。

29－68　川添満寿衛　→　川添万寿得（かわぞえ　ますえ　一八七〇－一九三八）

高知県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九二（明治二五）年九月明治学院神学部本科に入学。保証人は片岡健吉。卒業後はオーバン神学校へ留学した。

29－69　北野高弥（きたの　こうや　一八六七－没年未詳）

愛媛県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九一（明治二四）年九月明治学院神学部予科に入学。保証人は岡田則邦。卒業後は伝道者となり、一九二四（大正一三）年四月には、仙台基督教育児院の日本人初の院長に就任し、

一九三二年まで務めた。

29－70　国沢篤実（くにさわ　あつざね＊　生没年未詳）
高知県出身。『神学部一覧　明治二十九年』によると、卒業後は伝道者として大阪北教会に赴任。

29－71　島田正七（しまだ　まさしち＊　生没年未詳）
高知県出身。『神学部一覧　明治二十九年』によると、卒業後は伝道者として東京麹町教会に赴任。

29－72　杉本栄太郎（すぎもと　えいたろう＊　生没年未詳）
金沢出身。『神学部一覧　明治二十九年』によると、卒業後は伝道者として加賀小松（現在の石川県小松市）に赴任。

29－73　本川次郎（もとかわ　じろう　一八六五－没年未詳）
高知県出身。「神学部学籍簿」では「本川二郎」とする。一八九四（明治二七）年九月明治学院神学部別科に入学。卒業後は伝道者となる。

29－74　小河内碧（一八六二－一九〇八）
山口県岩国藩士岩井徳良の五男として生まれ、のちに、小河内信良の養子となる。一八八三（明治一六）年に受洗。町役場吏員、小学校教員等を務めたのち、明治学院神学部に入学。一八九六年卒業後は伝道者となり、啓蒙学校で教鞭を執った。一八九七年に越前武生へ赴任。翌年、武生より福井市に転じ、一九〇三年まで同地での伝道師を務めた（『日本基督教会年鑑　昭和一〇年』日本基督教会事務所編刊、一九三五年）。

29－75　関力之助（せき　りきのすけ＊　一八七五－没年未詳）
茨城県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九四（明治二七）年九月明治学院神学部別科に入学。卒業後は伝道者となる。

29－76　南廉平（みなみ　れんぺい　一八七七－一九二六）
愛媛県の卜部家に生まれ、広島の南家の養子となる。広島日本基督教会で受洗。『普通学部一覧　明治三十年』の卒業生名簿には「在目黒騎兵等一聯隊一年志願兵　南廉平」と記されている。また、一八九六（明治二九）年一〇月二一日に起きた賄に対するストライキの首謀者の一人でもあった（本資料集131頁）。卒業後はヒル・スクール、

オーバン神学校に留学。一九一一年、富士見町教会副牧師となり、植村正久を補佐。植村の死後、一九二五（大正一四）年富士見町教会を継ぎ二代目牧師に就任した。

29－77　中根欽次郎（なかね　きんじろう＊　生没年未詳）

東京府出身。『普通学部一覧　明治三十年』の卒業生名簿には「在江田島海軍兵学校」と記されている。一九〇六（明治三九）年三月発行『白金学報』第八号所収の卒業生名簿には「戦死」とある。

29－78　華族女学校

皇族・華族子女の徳育、智育、体育を養成する目的で一八八五（明治一八）年、明治天皇皇后美子（後の昭憲皇太后）の命により、麹町区赤坂門内に設立された官立の学校。初代校長は谷干城。一八九六年当時、文事秘書官細川潤次郎（註29－126参照）が学校長を務め、下田歌子や津田梅子も教師として在籍していた。一九〇六年に学習院と合併し、学習院女子部となった（『女子学習院五十年史』女子学習院編刊、一九三五年）。

29－79　辻新次（つじ　しんじ　一八四二－一九一五）

官僚。もと信濃松本藩士。一八八三（明治一六）年大日本教育会初代会長、のち帝国教育会会長をつとめ、一八八六年初代文部次官となる。一八九六年一月に貴族院議員に任命された。伝記に『男爵辻新次翁』（安倍季雄編、仁寿生命保険株式会社、一九四〇年）がある。

29－80　基督教道徳

スマイス（Smyth, Newman 一八四三－一九二五）著・高橋五郎訳『基督教道徳学』（一二三館、一八九六年）のことか。

29－81　講談越后伝吉

「越後伝吉」は大岡政談の一つ。一八八二（明治一五）年頃から絵本や実録として広く読まれた。一八九六年に刊行された『大岡名誉政談　春の巻』（内藤加我編、金桜堂）では巻頭に「越後伝吉の件」が収録されている。

29－82　津田姉　→　津田梅子（つだ　うめこ　一八六四－一九二九）

津田仙（『資料集』第一七集、註28－62参照）の次女。一八七一（明治四）年、日本初の官費女子留学生として渡

米。一八七三年受洗。一八八二年に帰国して華族女学校（註29－78参照）の教授となる。一八八九年、再び渡米し、ブリンマー・カレッジで生物学専攻の選科生となる。一八九二年帰国後は華族女学校教授を続けた。一九〇〇年に女子英学塾（のちの津田塾大学）を創設。

29－83　鳥羽　→　鳥羽権三郎（とば　ごんざぶろう　生没年未詳）
幸三の母りゑの妹すまの夫、幸三の叔父。幸三の日記明治二六年三月六日条および一〇月八日条（『資料集』第一六集六四頁、一五七頁）参照。

29－84　富沢清斎（とみざわ　せいさい＊　生没年未詳）
幸三の日記から一八九五年・一八九六年は明治学院普通学部に在籍していたことが分かるが、卒業者名簿等には名前が見えないことから、中途退学したものと思われる。在学中はベースボールチームのメンバーであり、日記明治二八年一〇月一九日条および二六日条に記されるベースボールマッチの出場選手に富沢の名が見える（『資料集』第一七集一七四頁、一七六頁）。加えて日記明治二九年六月二六日条にも富沢がファーストを守ったことが記されている。また、明治二九年一〇月二一日に起きた賄に対するストライキの首謀者の一人でもあった（本資料集131頁）。後年は、多摩村で村会議員や区長などを務めた（『多摩市史』通史編二　近現代、多摩市史編さん委員会編、多摩市、一九九九年）。

29－85　菓子は拙家の製　→　解題12頁参照。

29－86　一番町教会　→　富士見町教会
一八八七（明治二〇）年に植村正久によって、東京府麹町区一番町に創立された教会。番町一致教会として日本基督一致教会第二東京中会に加入し、その後移転して一番町教会と改称。更に、一九〇六年、富士見町六丁目に新会堂落成献堂式を行い、富士見町教会と改称した。

29－87　川田繁太郎（かわだ　しげたろう　生没年未詳）
高知県出身。一八九二（明治二五）年明治学院普通学部を卒業後、神学部に進み、一八九五年に卒業。『神学部一覧　明治二十九年』の卒業生名簿には「明治学院書籍掛　河田（ママ）繁太郎」と記されるほか、「井深日記」明治二九年

四月一六日条には「河田繁太郎氏祖母葬式ニ付神学予科生ノ倫理学ヲ休ム」とあることから、卒業後は書籍掛をつとめつつ、神学部予科生の講義を受け持っていたようである。著述として『六合雑誌』第二四〇号（明治三四年一月）に掲載された「笑を生ずる客観的条件」ほか、著書『天地人生之秘義』（富山房、一九〇七年）がある。

29－88　東京府下基督教徒聯合大親睦会

当日の内容については、『福音新報』第四三号（一八九六年四月二四日）の教報に詳しい。

29－89　盲唖学校　→　東京盲唖学校

一八七五（明治八）年五月二二日、古川正雄・津田仙・中村正直・岸田吟香および宣教師ボルシャルトの五人が、東京築地南小田原町にあった医師で宣教師のヘンリー・フォールズ宅において訓盲について話し合い、盲人教育を目的として組織した楽善会を起原とする。一八八四年に名称を訓盲唖院と改称し、一八八六年には官立学校となった。一八八八年に東京盲唖学校と改称、一八九〇年には校舎を小石川区に移転した。その後、一九〇九年から翌年にわたって東京盲学校と東京聾唖学校へと分離した。『創立六十年史』（東京聾唖学校編刊、一九三五年、二一八頁）によると、一八九六年四月一一日に第八回卒業式が行われ、この日から一九日まで同校において校舎等の参観が許可されると同時に、日本絵画協会の作品展覧会が開催された。日記中の「絵画展覧会」はこの展覧会のことであろう。

29－90　津田仙　→『資料集』第一七集、註28－62参照。

29－91　奥野昌綱（おくの　まさつな　一八二三－一九一〇）

牧師。一八七一（明治四）年、J・C・ヘボンの日本語教師となり、『和英語林集成』の改訂を助ける。翌年、S・R・ブラウンより受洗。一八七七年日本基督一致教会中会で按手礼を受ける。麹町教会（のちの高輪教会）、銀座教会（のちの巣鴨教会）、芝教会などを牧した。伝記に『奥野昌綱先生略伝並歌集』（黒田惟信編、一粒社、一九三六年）がある。

29－92　江原素六（えばら　そろく　一八四二－一九二二）

政治家・教育家。幕臣江原源吾の長男として江戸に生まれる。戊辰戦争に参戦後駿府にのがれ、のちに静岡師範学

校長、静岡県会議員、沼津中学校長などを歴任した。一八七八（明治一一）年には、カナダのメソジスト教会宣教師ミーチャムより受洗。一八八一年病気を機に再度受洗して伝道生活に入る。一八九〇年、第一回衆議院選挙に当選。一八九三年、東洋英和学校校長に就任。一八九五年には同校中学部を切り離して麻布尋常中学校（現在の麻布学園）を創設した。自伝に「予の受けたる境遇と感化」（『現代名流自伝　第一編』江戸肇編、新公論社、一九〇八年所収）がある。幸三の日記には「演説江原素六君（欠席）」と記されているが、『福音新報』第四三号（一八九六年四月二四日）所収「東京府下基督教徒聯合大親睦会」によると、余興には出席したらしく、提灯競争などの「勝利者は江原素六氏の手より各々賞品を受けぬ」と記されている。

29－93　**山田寅之助**　→『資料集』第一七集、註28－197参照。

29－94　**松村介石**　→『資料集』第一六集、註26－48参照。

29－95　**左乙女豊秋**　→『資料集』第一六集、註26－25参照。

29－96　**ツルー夫人の死去**

トゥルー。→註29－52参照。「井深日記」明治二九年四月二〇日条によると、葬儀のため明治学院神学部の授業は休みとなった。葬儀の様子も「井深日記」に詳しい。『福音新報』第四三号（一八九六年四月二四日）に「トルウ夫人の死去」の記事、また『婦人新報』第一六号（明治二九年五月二八日発兌）にも「ツルー夫人永眠す」の記事が掲載された。

29－97　**福**　→　山田福。幸三の妹。解題11頁参照。

29－98　**良一**　→　山田良一。幸三の弟。解題11頁参照。

29－99　**福田錠二**　→『資料集』第一七集、註28－36参照。

29－100　**原沢紀堂**（はらさわ　きどう　一八五五－一九二二）

牧師。上田松平藩の家老弥惣次の三男として信濃国小県郡上田（現在の長野県上田市）に生まれる。新潟師範学校を卒業。一八七六（明治九）年、上田の朝陽学校校長に就任。一八八〇年に同校校長を辞し、横浜共立女学校の教師となる。同年横浜海岸教会にて稲垣信より受洗。その後、東京一致神学校に入学し、一八八七年卒業。同年東京

第一中会において按手礼を受けた。

29－101　井深先生細君を大磯に向(迎)に行かれ

「井深日記」によると井深梶之助の妻勢喜子は、当年二月頃より肋膜炎の徴候があり、三月九日赤坂病院に入院。その後、大磯で転地療養を行っていた。勢喜子が快復したため、井深は五月一日に大磯まで迎えに行き、翌日帰宅した。

29－102　閨秀小説

『文芸倶楽部』の第一二編臨時増刊号として一八九五年一二月一〇日に発行されたもの。幸三が日記中に記す中島歌子のはしがき及び若松賤子（註29－51参照）の小説「わすれがたみ」ほか、樋口一葉、小金井喜美子などの小説一二編を収める。

29－103　中島歌子（なかじま　うたこ　一八四五－一九〇三）

歌人。和歌を加藤千浪に学び、東京小石川で歌塾萩の谷を開いた。門人に樋口一葉がいる。幸三が日記中に記した「花といふ」の和歌には「石山寺のむかしおぼえて優にうるはしき作者たちのみつどへたまへりときゝて」という詞書が添えられている。

29－104　電信学校　→　東京郵便電信学校

『資料集』第一七集、註28－118参照。『東京郵便電信学校一覧』（東京郵便電信学校編刊、一九〇三年）によると、一八九六年当時、入学者定員二〇〇名に対し、入学者は一〇五名であったという。

29－105　フレンド女学校　→　普連土女学校。『資料集』第一六集、註27－19参照。

29－106　総理は学校の方針に付き諸氏に計る所あり

『福音新報』第四九号（一八九六年六月五日）「明治学院関係者の懇談会」によると、当日開かれた会は「神学部普通学部の卒業生及び同学院関係者の交情を厚うせしめ且つ学院の方針等に関し各自の所感を叩かんために同学院が主となりて京浜間の関係者を招待した」ものであった。来会者は八〇余名。晩餐の後、井深梶之助ら五名の演説が行われた。井深の演説の大要として「官学跋扈の時節柄なれども本学院は飽迄も當初の主義を貫徹せんと欲すと云

ふにありき」と記されている。

29－107　キナエン　→　キナ塩

解熱剤。『浪花の志保里』（太田源太郎著、本林丁子堂、一八九五年）に掲載の広告には「しん熱おこり風ねつの良剤」とある。一八九五（明治二八）年時点の薬価は、二包入が五銭、五包入が一〇銭、一一包入二〇銭。幸三が河合氏に渡したキナエンは「二拾銭」とあるので、一一包入か。

29－108　河合亀輔氏台湾へ行く

日清戦争の結果割譲された台湾に関し、日本基督教会は、台湾の宗教を視察し、かつ信徒を慰問するため二名の委員を派遣することを決め、同時に伝道局は台湾に伝道を開始することとした。これにより一八九六年六月から台湾伝道が開始され、台北に河合亀輔（註29－16参照）が派遣された。日記七月一一日条に、河合が無事台湾に到着したことが記されている。

29－109　神の自啓

サムエル・ハリス（Harris, Samuel 一八一四－一八九九）が著し、小林彦五郎が訳した『神之自啓』（メソヂスト出版舎、一八九六年）のこと。原著は *The Self-Revelation of God.* Charles Scribner's Sons, 1886。『福音新報』第三二号（一八九六年二月七日）には一頁を使った広告が掲載されており、その中で本書は「基督教証拠論の標準書」と称されている。

29－110　女子教育

成瀬仁蔵著『女子教育』（青木嵩山堂、一八九六年）のこと。本書は、当時の女子教育不振の原因を指摘するとともに、それに対する方針と歴史的観点から日本の女性の智育の必要性を説き、高等女子教育の方針および程度等を論じたもの。『福音新報』第三七号（一八九六年三月一三日）の「新刊紹介」欄には「新興国の女学の前途を慮る者之を坐右に備へて可なり」と記されている。本書については、『評伝成瀬仁蔵―女子高等教育から「社会改良」へ―』（片桐芳雄著、日本女子大学発行、風間書房発売、二〇二一年）に詳しい解説がある。

29－111　**成瀬氏**　→　成瀬仁蔵（なるせ　じんぞう　一八五八－一九一九）
教育者・牧師。一八七七（明治一〇）年大阪の浪花教会で受洗。一八八七年新潟女学校を開校、校長となる。一八九〇年渡米し、アンドヴァー神学校、クラーク大学に留学。一八九四年に帰国し梅花女学校校長に就任。一八九六年「日本女子大学校設立之趣旨」を作成し、一九〇一年に日本女子大学を設立。明治期の女子教育の発展に大きく貢献した。

29－112　**陶山斌次郎**　→『資料集』第一七集、解題註（20）参照。

29－113　**谷口直吉**（たにぐち　なおきち＊　生没年未詳）
鹿児島県出身。明治学院神学部を一八九三（明治二六）年に卒業後伝道者となり、徳島や福井に赴任。一八九六年にアメリカへ留学。『資料集』第一七集〔口絵写真2〕参照。

29－114　**東奥大海嘯**　→　明治三陸地震津波
六月一五日午後七時三二分頃に起こった三陸沖を震源とするマグニチュード八・五の大地震により発生した津波のこと。地震による直接の被害は軽微であったにもかかわらず、津波が巨大であったことにより甚大な被害となった。『福音新報』第五二号（一八九六年六月二六日）で「三陸の海嘯、悲惨の状況」として被害の詳細が記されるなど、各新聞紙上での報道が相次いだ。

29－115　**仏教管見**
田中達著、メソヂスト出版舎刊、一八九五年。仏教の教理を分かりやすく案内した初心者向けの梗概書。植村正久が序文を寄せている。『福音新報』第三二号・第三三号（一八九六年二月七日・一四日）の表紙に本書の広告が掲載された。明治学院大学図書館所蔵『仏教管見』は山本秀煌旧蔵本。

29－116　**宮川巳作**　→『資料集』第一七集、註28－41参照。

29－117　**明治女学校**
一八八五（明治一八）年、木村熊二によって麹町区飯田町に創立されたキリスト教主義の女子高等教育機関。一八九六年二月の火災で校舎・寄宿舎・教員住宅の大半を失う。復興活動の末、翌年巣鴨の庚申塚に移転した。一九〇

八年廃校。教師には島崎藤村・戸川秋骨・北村透谷らがいた。

29－118　フインチ　→　エステラ・フィンチ（Finch, Estella 一八六九－一九二四）

アメリカの超教派宣教師。一八九三（明治二六）年二月一〇日、二四歳で来日。神戸に上陸の後間もなく東京に居住。女子学院生徒栗本すた子、向井秀子らと共に荻窪・上高井戸等に日曜学校を設け、専ら児童対象の自給伝道に励んだ。一八九五年九月から新潟高田において伝道に従事。一八九七年一時帰国するも、翌年再び来日。横須賀日本基督教会牧師稲葉曠二（後に黒田惟信と改名）の要請により、軍人伝道に尽力した。一九〇九年、日本に帰化して星田光代と改名。

29－119　世界三大宗教

戸川残花（安宅）著、博文館刊、一八九五年。仏教・キリスト教・儒教の入門書。『青山評論』第六二号（一八九五年一二月）掲載の「世界三大宗教を読む」（妄評生著）では「本書は専門家に取りて素より益する所なく、教外の人に取りては簡に過きて得る所なかるべし」と酷評されている。

29－120　読史余論

新井白石著、一七一二（正徳二）年成立。史論書。一八九三（明治二六）年にも幸三は本書を読んでおり（一月九日から一四日）、同年日記の巻末に付された読書記録には「読史余論　新井白石著　全六本」と記されている（『資料集』第一六集、四〇・四二・一九五頁参照）。

29－121　菅又熊之助（すがまた　くまのすけ　生没年未詳）

詳細は不明だが、著書に『地理学講義』（たつみや書房、一九〇四年）があり、その自序によると、千葉県立千葉中学校に勤めていたことが分かる。また菅又熊之助編『満州事情』（春陽堂、一九〇四年）がある。

29－122　タムソン氏のエルサレム実見談

この日、聖書学館の卒業式に参加し、タムソン（Thompson, David 一八三五－一九一五）の談話を聞いた井深梶之助は、「井深日記」六月二九日条に「タムソン氏エルサレム実視談ヲ為ス、但談話極メテ拙ナリ」と感想を記している。

29－123　**井深氏宅に同志会の集会**

「井深日記」六月二九日条には「日本キリスト教会クラブ臨時会」とあり、来会者は一三名であった。

29－124　**富山市に洪水起れり**　→　解題3頁参照。

29－125　**華族学校**　→　学習院

華族の教育機関として一八七七（明治一〇）年に神田錦町に設立された私立学校。

29－126　**校長細川**　→　細川潤次郎（ほそかわ　じゅんじろう　一八三四－一九二三）

官僚・教育家。元老院議官、貴族院議員、枢密顧問官を務め、一八九三年一一月に華族女学校（註29－78参照）の第四代校長に就任し、一九〇六年四月まで一三年間務めた。

29－127　**婦人新報**

日本キリスト教婦人矯風会の編纂による『東京婦人矯風雑誌』が『婦人矯風雑誌』と改称し、一八九五年から『婦人新報』となった。『世界之日本』第六号（一八九六年一〇月一〇日発行）の広告には『婦人新報』の特色について「其の主義は「進歩」。其思想は「清潔」。其調子は「温和」。其文字は「平易」。一字の軽藻なるものはなく、一語の浮靡なるものなきは蓋し其特色なり」と記されている。ここでは、『婦人新報』第一八号（一八九六年七月一五日発行）を指す。

29－128　**近頃の福音新報**

一八九六年七月一七日に発行された『福音新報』第五五号のこと。幸三の日記の内容は「教界近事」に掲載された「女子聖書学館の義捐」を指す。

29－129　**川崎巳之太郎**（かわさき　みのたろう　一八七三－一九五一）

茨城県出身。一八九三（明治二六）年、明治学院神学部を卒業後、伝道者となるが、『神学部一覧　明治二十九年』では「福音新報社員」、『神学部一覧　明治三十年』では「新聞記者」と記される。一八九七年頃、日刊新聞『世界之日本』の編集長を務めた（『雑誌世界之日本』復刻版、二二頁、福井純子解題、柏書房、一九九二年）。月刊雑誌『天地人』を発刊。一八九八年渡米し、カリフォルニア大学の聴講生となる。その一方で邦字新聞「日米」を刊行。

後年、衆議院議員に三回当選し、「率直にして情熱ある純然たる民衆政治家」と称された。著書に『実験上の宗教』（警醒社、一八九七年）がある（『議会制度七十年史』第一一、衆議院・参議院編、大蔵省印刷局、一九六二年、および『時の人』、イハラキ時事社編輯局編、イハラキ時事社、一九三九年）。

29－130　小倉鋭喜（おぐら　えいき＊　生没年未詳）

一八九四（明治二七）年明治学院神学部を卒業。一八九五年から一八九七年頃まで、神学部の嘱託講師として、旧約歴史、教会歴史、福音史を担当した。〔口絵写真3および4〕参照。

29－131　新刊の「世界之日本」

一八九六（明治二九）年七月二五日に開拓社より創刊された総合時事雑誌。日本、東洋主義に偏らず、国際的視野を国民に与えるという目的で創刊された。一九〇〇年三月二日第五巻第五六号をもって終刊。幸三が購入した第一号の執筆者には、内村鑑三をはじめ戸川残花・正岡子規・内田魯庵等が名を連ねている。

29－132　福音新報紙上山本淑子の就眠始末

『福音新報』第五六号（一八九六年七月二四日）所収「少き女の就眠」のこと。この記事に続く「略伝」によると、山本淑子は、徳島県士族山本正巳の長女として一八七七（明治一〇）年東京根岸に生まれ、七歳の時母を失ってからはキリスト教信者であった祖母の養育を受けた。一四歳の時高等小学校を卒業し、普連土女学校（『資料集』第一六集、註27－19参照）に入学。一八九三年同志社女学校に入学の後、同志社教会にて受洗。一八九六年六月に卒業の予定であったが病により七月八日、一九歳で死去。

29－133　文明之弊及其救治

平民叢書第五巻、民友社編刊、一八九三年。序文によると、本書は、文明社会における様々な弊害とその救治について、イギリスのエドワード・カーペンター（Carpenter, Edward 一八四四－一九二九年）が述べたものであり、文明の弊害を認め救治しようとする者の方針が書かれているという。

29－134　遠藤秀三郎（えんどう　ひでさぶろう　生没年未詳）

詳細は不明だが、『教育家としての孔夫子』（註29－135）のほかに、『高等小学作文階梯』・『尋常小学作文階梯』（い

ずれも阪上半七刊、一八八六年）など教科書を著している（『教育文献総合目録』第三集第一　明治以降教科書総合目録 第一、国立教育研究所編、小宮山書店、一九六七年）。

29－135　「教育家としての孔夫子」

大日本図書刊、一八九三年。遠藤秀三郎（註29－134）の自序によると、自身が以前「萊府の大学に於て、科試の際草せしもの」を日本語に翻訳したものという。孔子の略伝・教育の主義・教育法などが記されている。

29－136　長田偶得の著「林子平」

長田偶得（一八六六－一九二五）は長田権次郎とも。『林子平』は偉人史叢第一巻として裳華房から一八九六年二月に刊行された。『海国兵談』の著者林子平（一七三八－一七九三）の伝記。『国民之友』（第二八八号、一八九六年三月二一日発兌）・『東京経済雑誌』（第三三巻第八一五号、一八九七年三月七日発兌）などに広告が見える。

29－137　宮城女学校なる浅井さく子

『天にみ栄え　宮城学院の百年』（宮城学院編刊、一九八七年）八二四頁「旧職員名簿」に「浅井柞」とあり、一八九五年二月から一九〇五年三月まで在職していたことが分かる。

29－138　尾崎行雄の「内治外交」

衆議院議員であった尾崎行雄（一八五八－一九五四）は一八九三年に博文堂より『内治外交』を刊行した。洋行以来、新聞紙上に発表した内政・外交に関する諸論策をまとめたもの。

29－139　高田群司（たかだ　ぐんじ＊　一八五四－一九三三頃）

医師。一八八六（明治一九）年京橋区銀座に開業。一八八八年に同区鎗屋町に移り、内科・外科・眼科の治療に従事した（「高田群司先生之伝」、近藤修之助ほか著『明治医家列伝』第二編所収、近藤修之助、一八九二－一八九四年）。漢詩・和歌をよくし、没後には遺稿をまとめた『耕雲遺稿』（高田寿子、一九三三年）が出版された。

29－140　養神亭

一八八九（明治二二）年から一九八四（昭和五九）年まで神奈川県逗子市新宿にあった旅館。『風俗画報』第一七一号（一八九八年八月二〇日）「逗子の部　養神亭」の項には「養生旁々部屋を借切りにして、幾週日か止宿する

ものさへあり、避暑には実に屈竟の樓なるべし」とある。徳富蘆花が一八九八年から翌年にかけて『不如帰』を執筆した旅館としても知られる。

29－141　自ら綽号して孤月と称す

一八九八（明治三一）年から一九〇二年の幸三の日記（山田家文書C－2－7、C－2－8）では巻頭に「孤月生」と記されている。

29－142　頼朝・忠久・広元等の墓

鎌倉市西御門付近にある源頼朝・島津忠久・大江広元の墓のこと。一八九七年五月発行の『詞藻』（大橋又四郎編、少年園）に所収された青萍子著「江ノ島より鎌倉」によると、頼朝の墓は山腹の一段にある数層の石浮図（石で出来た仏塔）で、苔や蔦・葛が茂っており、もとは法華堂と称するものもあったというが、当時は跡形もなくなっていたという。更に山腹を右へ一町あまり行くと石龕（石の塔）が南面して並んでおり、中央が大江広元の墓、右が島津忠久の墓、左はその碑銘があったことが記されている。また、一八九七年八月発行の「鎌倉江ノ島名所図会」（『風俗画報』臨時増刊・第一四七号）では、名所古跡として三氏の墓が紹介されている。

29－143　権五郎神社　→　御霊（ごりょう）神社

神奈川県鎌倉市坂ノ下にある神社。平安時代後期に創建された。鎌倉権五郎景政を御祭神とする。権五郎神社は通称。

29－144　七里ヶ浜ヤングメンの別荘

七里ヶ浜は、神奈川県鎌倉市の相模湾に面する海浜で稲村ヶ崎より腰越に至る約四キロメートルの間をいう。一八七六（明治九）年にドイツ人の医学者ベルツが、七里ヶ浜を保養地として推奨して以降、別荘や療養所が多く建てられた。ヤングマン（註29－6参照）の七里ヶ浜の別荘は不明であるが、鎌倉極楽寺村の別荘を伝道所として使用していたことが知られている（『ある群像―好善社一〇〇年の歩み』好善社著、日本基督教団出版局、一九七八年）。

29－145　**海老原武五郎**（えびはら　たけごろう＊　生没年未詳）
詳細は不明であるが、慶応義塾卒業後、一八八七（明治二〇）年に千葉学館に赴任している（『慶應義塾百年史』付録、慶応義塾編刊、一九六九年、一七二頁）。

29－146　**秋田大地震**　→　解題3頁参照。

29－147　**貴山幸次郎**　→『資料集』第一六集、註26－36参照。

29－148　**外教内政衝突史**　→　内政外教衝突史
渡辺修二郎著、民友社、一八九六年。日本にキリスト教が伝来してから当時に至るまでのキリスト教と政治の関係を詳述したもの。

29－149　**安田磐子**　→『資料集』第一七集、註28－86参照。

29－150　**米沢鷹山公の伝**
この頃の上杉鷹山の伝記としては、川村惇著『米沢鷹山公』（朝野新聞社、一八九三年）がある。また、幸三の日記によると一八九三（明治二六）年四月三〇日頃、波多野承五郎が「米沢鷹山公」を執筆連載している（『資料集』第一六集、八五・八六頁参照）。

29－151　**竹内虎也**（たけうち　とらや＊　一八六九－没年未詳）
高知県出身。一八九五（明治二八）年九月、明治学院神学部予科に入学（『資料集』第一七集、一七二頁参照）。翌年本科に進み、一八九九年に卒業。その後、信州上田教会・鴻巣教会などを牧した。

29－152　**三人にて神明前田中へ行き、写真採影**
山田幸吉氏寄贈当館所蔵資料の中には、この時撮影された写真が含まれている（ID:2201770018、Ph-S0260）。

29－153　**ポプン**　→　ポピン（J.J. Poppin 生没年未詳）
アメリカ・オランダ改革教会宣教師。『神学部一覧　明治二十九年』には「教授」として「哲学博士　ゼコブ、ポピン」の名が見え、担当科目は新約釈義・旧約釈義・希臘語と記されている。『同窓会名簿』の「旧教職員（神学部）」の項には「J・J・ポペン」とあり、一八九六年から一八九八年まで在職の記録が残る。

29－154　河野政喜（こうの　まさき　生没年未詳）
愛媛県出身。幸三とは明治学院神学部の同級生。一八九六（明治二九）年は夏期伝道で信州へ赴き、九月一八日頃に帰京していた（「井深日記」九月一八日条）。一八九七年卒業後は伝道者として信州下坂へ赴任。『資料集』第一六集〔口絵写真2－1〕参照。

29－155　教授並に新入学生歓迎会
「井深日記」一〇月二日条にも「午後六時神学部新任教授及新入学生ノ歓迎会アリ、余ハ明治学院神学部ト日本キリスト教会トノ関係ニ付一言ス、ポッピン・陶山二氏ノ答詞アリ、後茶菓ヲ出ス」とある。

29－156　三光坂上旧自営館の跡
自営館は、田村直臣が当初「明治学院に学ぶ苦学生の為」に「学生が勉学に必要な費用や住まいを自活しながら賄える場」として一八八八（明治二一）年に東京芝区白金三光町に創設した宿舎。館生の増加に伴い、一八九三年八月に巣鴨宮下へ移転した。『資料集』第一六集、一〇頁参照。

29－157　妻君の令妹
クララ・ホイットニー（解題註（2）参照）の妹アデレード（Lang, Adelaide Norton 一八六九－一八九六）のこと。北海道函館の聖公会宣教師ラング・D・M（Lang, David Marshall 一八六二－一九四六）と結婚。日記に記されるように、一〇月三日函館で長男を出産後に死去した。

29－158　大石保　↓　解題註（16）参照。

29－159　深尾　↓　深尾泰次（ふかお　たいじ　生没年未詳）
「神学部学籍簿」によると、高知県出身。一八九四（明治二七）年明治学院神学部本科に入学。一八九七年に卒業後渡米。のちに牧師となる。ハワイのベレタニア街にあった日本聖公会に所属。邦字新聞である『やまと新聞』一九〇三年七月三日（Hoover Institution Library & Archives）によると、一九〇三年七月二日に催された在ハワイの明治学院同窓会に参加（この同窓会には、深尾のほかに矢島宇吉など計九名が集まっている）。

29－160　奥平浩（おくだいら　ひろし　一八五四－一九三四）
大分県出身。『日本基督教会年鑑　昭和一〇年』（日本基督教会事務所編刊、一九三五年）所収「奥平浩略伝」によると、一八八五（明治一八）年に矢島楫子より受洗。一八九一年九月明治学院神学部に入学。『神学部一覧　明治二十九年』および『同　明治三十年』には第二学年に名が見え、『同　三十一年』では第三学年に名が見えるが、後年の卒業者名簿には名前が見えない。一九〇〇（明治三三）年夏に岐阜講義所へ三代目牧師として就任（『岐阜教会百年史』岐阜教会百年史編纂委員会編、日本キリスト教会岐阜教会、一九九五年）。著書に『童蒙聖書問答』（藤村太平、一八八八年）がある。

29－161　ライマンアボットの基督教の進化
The Evolution of Christianity. Abbott, Lyman. 1896のこと。

29－162　賄対ストライキ
「井深日記」一〇月二一日条には「普通学部寄宿生等一同夕食ノ後食堂ニ於テランプ吹消シ之ヲ合図ニ食卓ヲ倒シ膳椀ヲ破壊シ乱暴ヲ為シタリ」と記される。松本智子「明治学院の学生ストライキ事件―山田幸三記『明治二十九年日誌』より―」（『明治学院歴史資料館　News Letter』No.13　二〇二二年三月所収）参照。

29－163　両人とも得意の弁を振われたり
井深の説教内容については、当館所蔵「〔井深梶之助講述録集〕」（ID:1201610228）の中に「人ノ糧」（草稿）として残る。

29－164　田川大吉郎（たがわ　だいきちろう　一八六九－一九四七）
肥前国彼杵郡大村（現在の長崎県大村市）に下級士族田川節造の長男として生まれる。東京専門学校（現在の早稲田大学）を一八九〇（明治二三）年に卒業し、郵便報知新聞に入社。一八九二年、都新聞に移る。一八九六年当時、田川は台湾新報に勤めていた。一九二五（大正一四）年、明治学院第三代総理に就任。

29－165　松井昇（まつい　のぼる　一八五四－一九三三）
洋画家。松井の長女幾世は一八九六年一二月二八日に田川大吉郎（註29－164参照）と結婚した。遠藤興一「執筆活

動からみた田川大吉郎」（『研究所年報』三七号、明治学院大学社会学部付属研究所、二〇〇七年三月所収）参照。

29－166　**石本氏**　→　石本三十郎。『資料集』第一七集、一一頁参照。

29－167　**学院秋季運動会の為大遠足**

「井深日記」一一月二日条には「横浜迄汽車、其ヨリ徒歩金沢ヲ経テ鎌倉ニ出テ同所ニ一泊、藤沢へ出テ帰京ノ見込」とある。また、同一一月四日条によると、三日に帰京するも、生徒たちの疲労のため四日の授業は特別に休講となった。

29－168　**青山練兵場**

東京青山にあった旧陸軍の教練・演習場。一八八七（明治二〇）年に開設され、一九二六（大正一五）年、明治神宮外苑となる。一八八七年に明治天皇が初めて近衛兵除隊式を閲兵、以後毎年一月八日の陸軍始の観兵式と一一月三日の天長節の観兵式が行なわれた。日記に記された一八九六年一一月三日は、日清戦争後はじめての観兵式のため人も多く集まっており、当時の新聞には「拝観の群集ハ場の四方に人の山を築き三崎町より信濃町に至る各停車場の混雑いはん方なく此日ハ特に臨時列車を出したり其他二重橋より青山練兵場に至る御通路亦人を以て両側を埋め巡査の警衛厳重なりければ怪我掏摸などの災に罹りたるものなし」（『読売新聞』一八九六年一一月四日朝刊）と記されている。

29－169　**秋季聖書の友大会**

『福音新報』第七二号（一八九六年一一月一三日）に掲載された報告によると、一五〇名ほどの参加者があったという（ただし、開催を「五日」とする）。

29－170　**西郷の伝**

勝田孫弥著『西郷隆盛伝』全五巻（西郷隆盛伝発行所、一八九四－一八九五年）のことか。『福音新報』第三二号（一八九六年二月七日）表紙には「再版」としてこの『西郷隆盛伝』の広告が掲載されている。

29－171　**竹越氏の二千五百年史**

竹越与三郎著『二千五百年史』（警醒社書店、一八九六年）のこと。「井深日記」明治二九年八月一〇日条には本書

について次のように記されている。「竹越氏著二千五百年史ヲ求メ終ニ之ヲ読ム、頗ル趣味アリト雖モ考証不充分、議論動モスレバ独断的ニ走ルニ弊ナキニ非ズ、乍然決シテ従来ノ本邦歴史ノ類ニハ非ズ、新ニ一機軸ヲ出シタリト謂ツテ可ナリ」。

29－172　**麻布の英和学校**　→『資料集』第一六集、註27－6参照。

29－173　**錦城学校**　→　錦城学校尋常中学

一八八〇（明治一三）年、慶応義塾の旧医学校跡に開設された三田予備校を母体とする。校主矢野武雄。一八八一年に三田英学校と改称。一八八九年、神田区錦町三丁目に新校舎を建設して校名を錦城学校とした。一八九二年、錦城学校尋常中学校と改称。校長に矢野文雄（註30－25参照）が就任した。『改正官立公立及ビ私立諸学校規則集』（広原新編刊、一八九五年）「錦城学校尋常中学」の項には「本校ハ文部省所定ノ尋常中学校学科程度ニ従ヒ中人以上ノ実務ニ就カントスルモノ、若シクハ高等ノ学校ニ入ラントスル者ニ普通教育ヲ授クル所トス」とある。

29－174　**明治義会**　→　明治義会尋常中学校

『東京遊学案内』（少年園、一八九六年）「明治義会尋常中学校」の項には、「本校ハ尋常中学校の程度に拠りて、倫理、国語、漢文、英語、其他の学科を授くる所にして、修業年限を五ヶ年間とす」とある。所在地は東京麹町区富士見町。

29－175　**独立女学校**　→　女子独立学校

一八八九（明治二二）年、加藤とし（俊子）（一八三九－一八九九）を校長として四谷に開校された学校。一八九〇年に新宿角筈村に移転。

29－176　**赤坂教会連夜説教会**

『福音新報』七七号（一八九六年一二月一八日）に、赤坂教会の当該説教会のことについて「七日は羽原亨、ワデル氏にて聴衆三十五名、次夜は福田錠二、水芦幾二郎氏にて聴衆二十五名、先づ盛会の方なりき」との報告がなされている。一一月二〇日発行の『福音新報』（第七三号）では水芦ではなく「小倉鋭喜」となっており、何らかの事情で交代が生じたものと思われる。

29－177　羽原亨　↓　解題註（19）参照。

29－178　石原氏の牧会談

「井深日記」一二月一四日条にも「神学部ニ於テ石原保太郎氏実地牧学講演第二回ヲ為ス」とある。

29－179　伴直之助（ばん　なおのすけ　一八六二－一九三七）

政治家。中村正直が開設した私塾同人社を一八七九（明治一二）年に卒業後、東京経済雑誌社の編集者、山梨峡中新報社、大阪立憲政党新聞社の各主筆を務めた。その後、東京府会議員などを経て、一八九四年九月衆議院議員に当選し一八九八年三月までの一期を務めた。

明治三〇年

30－1　望洋閣

大本山成田山新勝寺（千葉県成田市）の上段に位置する太子堂の東方にあり、崖上に建てられていた建物。『風俗画報』臨時増刊第二七四号「成田鐵道名勝誌」（一九〇三年九月一〇日発行）に記される「望洋閣」の項には「信仰上の建物にあらず。一の茶室に類するものにて。山主、山僧、雅人等清遊の為めに設くといふ。眺望佳なり」とある。

30－2　皇太后陛下　→　英照皇太后（えいしょうこうたいごう　一八三五（一八三三説あり）－一八九七）

孝明天皇の皇后。明治天皇の嫡母。九条尚忠の六女。名は夙子（あさこ）。一八四五（弘化二）年御息所となり、翌年天皇即位に伴い入内。一八六八（明治元）年皇太后となる。「英照皇太后」は諡号。「井深日記」一月一二日条によると、皇太后崩御に際し一五日間歌舞音曲が停止され国喪三〇日間との告示があった。翌日一三日には明治学院においても、「謹テ吊意ヲ表サンガ為ニ本週間休業スベキ旨」が神学部・普通学部の生徒一同に言い渡された。

30－3　一葉全集

樋口一葉（一八七二－一八九六）の全集。一八九七（明治三〇）年一月、博文館より刊行。「にごりえ」「たけくらべ」などを含む二一の短編を収録。一葉は前年一一月に二四歳の若さで死去。本書の刊行に尽力した一人に、明治学院普通学部を一八九一年に卒業した戸川秋骨がいた。

30－4　竹林寅蔵　→『資料集』第一七集、註28－32参照。

30－5　モット　→　ジョン・ローリー・モット（Mott, John Raleigh 一八六五－一九五五）

アメリカのキリスト教青年運動の指導者。一九四六年には、キリスト教青年会（ＹＭＣＡ）での働きや国際キリスト教連盟会長として国際平和に貢献したことに対し、ノーベル平和賞が贈られた。また日本においても日米国際交流の功を讃え、勲一等瑞宝章が授与された。『福音新報』八三号（一八九七年一月二九日）に「明治学院に於けるモット氏」の記事がある。

30－6　矢島・長山の三人にて田中で写真を取る　→〔口絵写真3〕参照。

30－7　ホイットニー　→ ホイットニー（Willis, Norton Whitney 一八五五－一九一八）
アメリカ・ニュージャージー州に生まれる。一八七五（明治八）年、家族とともに来日。当時二〇歳であったホイットニーは日本に来てから医師になることを決意し、東京医学校（現在の東京大学医学部）で学んだ。のちに帰国してペンシルベニア大学医学部で学び博士号を取得。一八八二年に再び来日。赤坂氷川町にあった勝海舟の土地を購入し、一八八六年に赤坂病院を開院した。同時に日曜学校を運営し、以後生涯の大半を日本での宣教と医療に尽くした。妹クララは勝海舟の三男梶梅太郎の妻。

30－8　皇太后の発棺式
「井深日記」二月二日条によると、英照皇太后（註30－2参照）の発棺に伴い明治学院は休業となった。

30－9　埋棺式の為学校休業
「井深日記」二月八日条にも「皇太后陛下御埋棺ニ付学院休業、敬吊ノ意ヲ表ス」とあり、二日の発棺式と同じく、明治学院は休業となった。

30－10　マコーレー氏の葬式
この頃、マコーレー（『資料集』第一六集、註26－43参照）は病床に伏していたが、二月九日危篤となり、翌日一〇日に死去。「井深日記」二月一二日条に葬式の詳細が記されている。『福音新報』八六号（一八九七年二月一九日）には「明治学院教授マコレー氏の来歴」が掲載された。

30－11　井深先生の厳父宅右衛門　→ 井深宅右衛門（いぶか　たくえもん　一八三〇－一八九七）
会津藩家臣の井深家に生まれ、五五〇石の知行を領した。日新館の館長や、町奉行、番頭等の役もつとめた（『井深梶之助とその時代　第一巻』井深梶之助とその時代刊行委員会編、明治学院、一九六九年）。「井深日記」によると前年九月頃より体調不良が続き、年が明けて一月二九日に医師高田畊安（『資料集』第一六集、註26－91参照）の診察を受けたが、三一日には「兎角疲労ノ御容体」であった。また井深家では、宅右衛門の誕生日にあたる二月三日（旧暦正月二日）には、豆飯を炊いてお祝いをした。しかし宅右衛門の容体は既に快復の見込みはなく、井深が二月八日高田畊安のもとを訪れた際、畊安は宅右衛門について「本月中ハ御六ヶ敷カラン」と述べている。二月

一九日、宅右衛門は親族に看取られながら永逝した。

30－12　井深宅右衛門氏の葬式

「井深日記」二月二二日条によると、会葬者は会堂に二五〇～六〇人、墓地まで行った者は二〇〇人近くであった。

30－13　駒場の農科大学　→　帝国大学農科大学

旧駒場農学校を継承して一八八六（明治一九）年に東京農林学校が設立され、一八九〇年六月、帝国大学農科大学に改組された。のちに東京大学農学部となる（『東京大学百年史』通史一、東京大学百年史編纂委員会編、東京大学、一九八四年）。一八九七年当時、新島善直（註29－5参照）は「林学士」として研究科に所属していた。『東京帝国大学一覧　従明治三十年至明治三十一年』（東京帝国大学、一八九七年）所収「農科大学学生及生徒」参照。

30－14　小公子

バーネット（Burnett, Frances Eliza Hodgson　一八四九－一九二四）の『小公子』（原著は*Little Lord Fauntleroy.*）を若松賤子（註29－51参照）が翻訳したもの。一八九〇年から一八九二年まで『女学雑誌』に連載されたが、若松の死後一八九七年一月に遺稿として翻訳小説『小公子』が博文館より刊行された。

30－15　早出雄　→　白石早出雄（しらいし　さでお　一八九六－一九六七）

前年三月一六日に誕生していた白石小滝の子。一九二〇（大正九）年、東京大学理学部数学科を卒業。数学および哲学を専攻。文学博士。著書に『数と連続の哲学』『文科の数学』『現代数理哲学問題』などがある。

30－16　キッドのソシヤルエボリウシヨン

イギリスの社会学者ベンジャミン・キッド（Kidd, Benjamin　一八五八－一九一六）が著した*Social Evolution.* Macmillan, 1894.のこと。

30－17　神学教授・生徒一同影採

「井深日記」三月一二日条によると、明治学院の庭で撮影された。〔口絵写真4〕参照。

30－18　台湾伝道報告会

『福音新報』第九一号（一八九七年三月二六日）の彙報「台湾伝道演説会」に詳しい。

30－19　井深先生の宅に招れ六時頃まで遊興

「井深日記」三月二二日条に「出院執務如常、午後三時今回ノ神学部卒業生十二名ヲ宅ニ招キ茶菓及「スシ」ヲ饗シテ親睦ノ会ヲ開ク、河野生ヲ除クノ外皆来ル」とある。解題8頁参照。

30－20　ストカル氏の保羅伝

ストーカー（Stalker, James　一八四八－一九二七）著・ホワイト訳（White, William John　一八四八－一九〇一）『須氏保羅伝』（基督教書類会社、一八九五年）のこと。原著は *The life of St. Paul.* Scribner & Walford, 1884.

30－21　明治学院第十二回卒業証書授与式

『福音新報』四〇号（一八九七年四月三日）には、卒業式が執り行われた記事とともに、神学部卒業生の任地が掲載されている。

30－22　田中信道　→　鮭延信道（さけのべ　のぶみち　一八七八－一九五四）

東京府出身。田中貫一の次男として生まれ、一九〇五（明治三八）年に鮭延良治の養子となり改名。養母の勢喜は石原保太郎（註29－19参照）の姉にあたる。『高等学部普通学部一覧　明治三十四年』によると、卒業後は第二高等学校に進学。その後、東京帝国大学法科大学政治学科を卒業し、外交官となる。『人事興信録』五版（人事興信所編刊、一九一八年）参照。

30－23　戸田謙二（とだ　けんじ＊　生没年未詳）

富山県出身。『高等学部普通学部一覧　明治三十四年』によると、卒業後は東京美術学校生徒となっている。

30－24　末松多美彦（すえまつ　たみひこ＊　生没年未詳）

福岡県出身。一八九五（明治二八）年明治学院普通学部普通科を修了後、高等科に進む。『高等学部普通学部一覧　明治三十四年』によると、卒業後は印度三井物産会社支店に勤務。のちに海軍に入り、李王職事務官を務めた（「JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05022675200、官房第三五五一号　八・八・二、本年度特別大演習観艦式の賜饌に関する件（二）（防衛省防衛研究所）」）。

30－25　矢野文雄（やの　ふみお　一八五〇－一九三一）
政治家・小説家・ジャーナリスト。号龍渓。一八七三（明治六）年慶応義塾を卒業。大隈重信の知遇を得て任官したが、明治一四年の政変で退官。その後、立憲改進党結成に参画。郵便報知新聞社長となり、一八八三年『経国美談』を上梓。一八八九年、政界を引退後は宮内省に出仕。一八九二年には錦城学校尋常中学校（註29－173参照）の校長に就任。一八九七年から一八九九年まで特命全権駐清公使を務めた。

30－26　宮田寅蔵（みやた　とらぞう＊　生没年未詳）
東京府出身。『高等学部普通学部一覧　明治三十四年』によると、一八九八（明治三一）年に明治学院普通学部研究科を卒業後は横浜税関に勤務。

30－27　尾島喜久恵（おじま　きくえ　生没年未詳）
静岡県出身。『高等学部普通学部一覧　明治三十四年』には「尾島武伴」の名で掲載されている。卒業後は徳島県で中学校教員を務めた。エス・ヘースレット（Heaslett, Samuel 一八七五－一九四七）著、尾島喜久恵校『人に内住せる神の像』（普光社、一九一一年）やジョン・チャールス・ライル（Ryle, John Charles 一八一六－一九〇〇）著、エス・ヘースレット・尾島喜久恵共訳『捕はれぬ信仰』（基督教書類会社、一九一五年）がある。

主要参考文献一覧

・『日本基督教会年鑑』 笹倉弥吉編、日本基督教会総務局、一九一六年
・『日本基督教会史』 山本秀煌編、日本基督教会事務所、一九二九年
・『日本キリスト教歴史大事典』 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、一九八八年
・『長老・改革教会来日宣教師事典』 日本キリスト教史双書、中島耕二・辻直人・大西春樹共著、新教出版社、二〇〇三年
・『日本近現代人物履歴事典 第二版』 秦郁彦編、東京大学出版会刊、二〇一三年
・「オーバン神学校に学んだ人々」 岡部一興著、『明治学院大学キリスト教研究所紀要』四七巻、二〇一五年一月所収
・「『明治学院の外国人宣教師』―瀬川和雄遺稿集―」『明治学院歴史資料館資料集』第一三集、明治学院歴史資料館、二〇一八年
・『横浜の女性宣教師たち』横浜プロテスタント史研究会編、有隣堂、二〇一八年
・『日本キリスト教歴史人名事典』 鈴木範久監修・日本キリスト教歴史大事典編編集委員会編、教文館、二〇二〇年
・『九十九里教会九十年誌 里見長老と共に』〔松尾町（千葉）〕、日本基督教団九十九里教会、〔一九六八年〕
・『宣教百周年』 日本キリスト教団九十九里教会編刊、一九八一年
・『女たちの約束 M・T・ツルーと日本最初の看護婦学校』 亀山美知子著、人文書院、一九九〇年

主要参考文献一覧

・『明治女学校の研究』　青山なを著、慶応通信、一九七〇年
・『巌本善治　女学雑誌派連環』　磯崎嘉治編、共栄社、一九七四年
・『ドクトル・ホイトニーの思い出』　ホイトニー夫人・梶夫人共著、ジョージ・ブレスウェート編、基督教書類会社、一九三〇年
・『赤坂教会献堂記念誌』　日本基督教団赤坂教会編刊、一九八四年
・『勝海舟と赤坂氷川』　赤坂教会宣教一二五周年記念誌出版委員会編刊、二〇一一年
・『赤坂教会創立一三〇周年記念アルバム　ウィリス・ホイットニー医師と赤坂教会』　日本基督教団赤坂教会編刊、二〇一六年
・『山武市郷土史料集一七　掛川藩から松尾藩へ―近代編―』　山武市教育委員会編刊、二〇一一年
・『山武市郷土史料集二三　掛川藩から松尾藩へ（補遺）―追加目録―』　山武市教育委員会編刊、二〇一七年
・『山武市郷土史料集二四　山武市松尾町広根　北田定男家文書調査報告書（1）　目録編』　山武市教育委員会編刊、二〇一八年
・『「青山日誌」明治二四年一二月～三一年三月』　青山学院一五〇年史編纂報告三、青山学院資料センター一五〇年史編纂室編、青山学院一五〇年史編纂委員会、二〇一九年

第一六集・第一七集　正誤表

『資料集』第一六集

・口絵写真2－1キャプション　松村米太郎　→　村松米太郎

・三頁　一二行目　四月一一日　→　四月七日

・二三九頁　五行目　二円　→　三円

・三五二頁　二行目　さとみ　かんいち＊　→　さとみ　かんいち

生没年未詳　→　一八七二－一九〇九

里見純吉の弟カ　→　里見富三郎の弟

・三五三頁　三行目　幸三の母りゑの弟　→　幸三の母りゑの妹すまの夫

・三六二頁　八行目　伝道者として越前福井に赴任している。→　札幌教会牧師となる。

・三六八頁　一〇行目　里見勝子　→　里見勝子（一八三三－一九一五）

・三八七頁　一七行目　里見かつカ　→　里見かつ

・三八九頁　一八行目　東京百便覧　→　東京百事便

・三八九頁　三行目　山武市郷土資料集　→　山武市郷土史料集

『資料集』第一七集

・三八頁　四～七行目　加藤敏子　→　加藤俊子

・一六九頁　三行目　マヰンチ　→　フヰンチ

・二〇〇頁　一一行目　生没年未詳　→　一八七七－一九〇一

九行目　長崎県出身。→　削除

一〇行目　マヰンチ　→　フヰンチ

・二三〇頁　註28－187

2022年3月31日発行

明治学院歴史資料館資料集【第18集】

編集代表　長谷川　一
発行者　小暮　修也
発行所　明治学院歴史資料館
東京都港区白金台1-2-37
電話（03）5421-5170
印刷所　株式会社白峰社
東京都豊島区東池袋5-49-6
電話（03）3983-2312